

324
143

堀江復譯

シリヤの聖イサダス全書

明治四十二年七月 正教會編輯局

シリヤの聖イサク全書



イサクは後來アストラハンの大主教となり人
 なりて千七百七十一年シリヤの聖イサクの苦行的説教希臘
 文に採りて出版するに當り此聖人の行狀と其説教に就て
 述る所左の如し

克肖なるイサクは凡そ救の道の起源して流るゝ東方の産に
 てシリヤの人なりき彼の生國はニテビヤなれども其父母の事
 は消息を有せざれば我等に知られざるなりイサクは青年の
 時に世を避けすべて世に屬するものに遠ざかりて兄弟と共に
 聖マトフイの修道院に入りけるが彼處には多くの人を猶肉體

緒言

明治
 42 58 5
 内交

を以て天使の如き生涯を送りけるに、彼も自から其處に於て修道士の生活の方法と秩序とを受けたりき。彼は此院に在りて苦行場裡に己を修齊し、道德に充分の進歩を爲しけるが、其時深く黙想に入らんと欲する願の爲に刺撃せられ、野を愛するの熱情を以て心を燃しぬ。故に會住修道院より更に遠ざかりて荒涼たる野の小庵に棲隱し、何人にも交らずして、たゞ自己と神とに在りて、全く靜寂なる生活を送るを始めぬ。此の時に當りて、彼の同胞兄弟は最早前述修道院の掌理となりけるが、書を彼に遺はし、野を棄て、以前の修道院に歸らんとことを切に勧め、嘆願して已まざりき。然れどもイサクは愛する所の野を片時も棄つるを肯んぜざりき。さりながら最初兄弟の願の成らざりしは後に神の默示は遂ぐるを得しめ、イサクは聖なる修道院に再び入らんことを切に勧めたる同胞の言を聽かざりしかど、主教の

監督に必要を有せるニネビヤ教會の舟を統御せんことを上より命じ給へる天の父に順へり。是に於て彼は其心に熱愛する野を棄て、立てられてニネビヤ大都府の主教となれり。けだし燈の爲に要用なるは野の斗下に隱るゝにあらずして、牧師の職の台上に置かれ、燈をとして光り輝く道德の照さるる所なき光線を遠く注ぐにありしかれども、是は甚だ暫時にして、此光は僅に照し始むるや、次で復た隠れぬ。何故なれば世は斯の如きの人を受るに堪へざりしによる。彼の爲に起れる事件は昔サシムの主教に叙せられたる神學者聖グリゴリイが接手禮の際に逃走を謀れると殆ど同様なりき。それ此事は自適と心神の不堪忍をあらはし、隨て愛神者には不相當なる如く見ゆるといへども、此二人の徳行と完全とにより、予は之を定罪すべきもの且は非難すべきものと言はず。何となれば彼等は他のすべてに於て間然す

る所なく、神聖なればなり、神にに屬する者は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず「ユリソフ前二の十五」。

按手の禮の後イサアクが遭遇したる事件は左の如くなりき。イサアク按手の禮を受くるや、其日二人あり、主教館に來りて彼に訴へ出でたり、其一人は他より負債の償却を要求し、他は負債せしことを自認しつゝ、少しの延期を與へんを懇請せり。然れども債權者は彼を脅して言へり、「もし償を償ふを肯んぜずば、今斷じて裁判官に訴へん」と。神聖なるイサアク彼を責めて言ひけるは「聖なる福音の誠命に依れば汝は掠奪者よりも督促すべきにあらず、矧んや償を償はんとする者に一日の間の猶豫を爲すは當然なり」と。されども此刻薄なる人は答へり、「福音の誠命を今は側に置くべし」。其時イサアク宣言していへり、「主の福音の誠命に順はずば予は汝等に何を爲すべきか」と。而して彼は野に於て習慣

せる平穩にして掛慮なき生活が主教の誓約を以て要求せらるゝ事の爲に掣肘攪亂せらるゝを認め、位を棄てゝ愛する所の寂寞たる隱舎に歸りぬ。彼は死に至る迄彼處に止まりけるが、魔鬼及び肉身と戦ひて如何なる苦行を成しゝか、實驗的生活と直覺的生活を以て要求する道德に幾何の進歩をなしゝか、靈魂の如何なる完全を得て生存中に如何なる恩寵を賜はりしか、是事は言ふも無用ならん、此は彼の書により容易に確知するを得べし。けだし彼は第五十六説教に次の如く言へり、曰く「自己の眼を以て太陽を見ざる人はたゞ聞くのみにて、此光に觸れざるにより、人に此を説明する能はざるべし、靈的行爲の甘さを自己の心に味へざる者も此の如し」。又第七十五の説教には言へり、曰く「久しく右と左に試みらるゝ予は此の二の方法を以て一度ならず己を試み、敵の無數の打撃を受け、大なる救援を窃に賜はり、多年の

間に經驗を求め得て、神の恩寵により實驗上確知せしもの左の如し云々、而して第六十五の説教には言ふ、予は自己及び凡て此文を讀む者の記憶の爲に聖書の研究と眞實なる口を以て傳へられたるものより借り來りて其儘之を記述せしが、自己の實驗より借れるものも少なからず、此に由りて見るにイサアクはすべて後來書に著す所のものを先に自から實驗して、奧義の門に入る者等を自己の實驗により教導せしこと明なり。然のみならず、此の奧義入門の事は最高上なる道德を授け、完全の最巔を示すものとして實に神聖なるのみならず、奧義の教導者も神聖なり、高尚にして且完全なりき、けだし已に述べたる如くすべて神聖なる恩寵を以て教へられしものを實地に試み、確知して之を書きたればなり。ゆゑに此の最驚く可き人は有能にして極めて美なる恩寵の働を默止する能はずして、或處には容易に言顯

し、他の處には特に明言して曰く、予が之を書する時は予の指は紙に隨ふに違あらざること一回のみならず、予が心に突入して感覺を默せしめたる愉快の爲に、予は忍耐を守る能はざりき。三十八説教さながら之と同く此人の德行に於て特に驚くべきは、其自から證する如く、すべての人類に遠ざかりて生活しつゞ彼等に對して愛に燃えたること、是なり、けだし言ふあり、愛する所の者よ、予は愚に陥りしにより奧秘を默守するあたはず、兄弟の爲に無智となれり、是れ使徒が、我誇りて無智に至れり、汝等我に此を爲さしめたり、といふに符合す、コリント後十二の十一「けだし眞實なる愛は此の如きものにして、愛する所の者に何事も窃に隠す能はざるなり」。三十八説教此に由りイサアクは清潔にして生活を施す水の流を野より渾々として湧出し、無盡に灌注して、兄弟の靈魂に豊に飲ましめたりき、けだし或る無名記者

もイサアクの事の簡短なる傳記の後、彼の文章に就て左の如く言へり、曰く、凡そ修道士の師にして且教導者たり、及び救の湊なる彼は修道士の生活に關する此四書を最能辨にてあらはせり。

傳記はロマワチカシの書庫の古典中に之ありて、イサアクの四書の始にア

ラビヤ語とシリヤ文字にて書されたり、此傳記はシロマロニトアッセマニ

を以て羅匈語に譯出せられたりしが、今其處より茲に引用せり。

又此記者はイサアクの生存の時のことをも次の如く言へり、曰く、此聖人は創世を距る七千年の始めに生存せり、是れイサアクの自から言ふ所のものと符合す、彼が魔鬼の事に論及し、最早六千年經たる所の者を汝は出て、呪咀すといへる是なり、三十説教此に由るに彼の此言をなし、時は世の造成より最早六千年經過したるを見るべくして、此事は彼が登塔者シメオンに與へた書により更に確實に知るを得べし、何となればシメオンは

ユースカイン一世の時の第四年、是れ救世主ハリストスより五百年の始なり、よりマウリキイの代の五十年に至り、或はハリストス降生五百九十六年に至る迄、七十五年の間生存したればなり、然してシメオンの塔に居るを愛し始めたるは、最弱年の時にして、彼に書を與へて教訓し、默想的生活の第一の規則を命ずるイサアクはシメオンの塔に登る以前に之を書したるにより、
〔五十五の説教を見よ〕 神の攝理の五百三十年の頃には父イサアクは既に徳行に成全したるのみならず、年齢も盛なる時なりしは知るに難からざるなり、故に彼の老後は非常に長壽なりしにあらずんば、彼はハリストスの降生後六百年以前に天の第宅に移りしこと疑なし。

聖イサアクはシリヤ人として其著作をシリヤの語にて書せり、シリヤの作者エペドイエズー記して、いへり、ニネビヤ人イサア

外は靈的教導の事、神聖なる奧義の事、審判の事及び行狀の事に
 關する書七卷を著せり。然れども十三世に知られたるもの
 して今日知らるゝは全きにあらず。聖イサアクの教訓の大部分
 はアラビヤの翻譯に修道士の規則といふ題名の下に保存せり。
 茲に四書は存しけるが、第一書は教訓二十四を載せ、第二は四十
 五、第三は四十四、第四は二十、シメオンに與ふる書を載す。パ
 レステナ聖サウラの修道院の克肖なる修道士バトリキイニアウ
 ラミイが希臘語に翻譯せる教訓九十九はたゞ第二第三の書に
 シメオンに與ふる書を載するのみにて、原稿には幾と第一と
 第二の書を存せしのみなり。かくの如くエペドイエズが表示
 したる著作の中希臘の翻譯に於て知らるゝものは聖イサアク
 の作の半より少なし。右緒言は原序文并にカルニゴスの大主教フラレトの著な

る歴史的師父學より鈔録す。

譯者識

シリヤの聖イサク全書

目次

第一説教	世を棄つる事及び修道士の生涯	一頁
第二同	神に感謝すること并に初等の教の簡短なる説明	十一頁
第三同	靈魂は世と世慮に遠ざかりて沈黙するならば神の睿智と神の造物を易く認識するに至らんけだし其時は己の性と己の内部に隠るゝ實とを認識するを得るなり	二十二頁
第四同	靈魂の事慾の事及び智の淨潔の事に就ての問答	二十五頁
第五同	威覺の事併て誘惑の事	三十三頁
第六同	主宰が尊威の高きより人間の弱きに降し給ふ仁慈の事及び誘惑の事	四十一頁
第七同	自由なる罪と自由ならざる罪の事及び場合に依り犯す罪の事	四十五頁

目次

二

第八同 衰弱して怠慢なる人々より己を守りて自省すべき事、彼等と親むに
より怠慢と衰弱が人に主となりて種々なる不潔の慾に充たさるゝ事、放蕩
なる思念を以て心を汚されざらんが爲少年と近づくより己を守るべき事。

第九同 新進修道士の秩序及び規則及び彼等に適當なる行爲の事……六十頁

第十同 聖なる人々の記事及び彼等が聖なる訓言と奇異なる生涯……六十五頁

第十一同 高老なる老人の事……六十七頁

第十二同 他の老人の事……七十頁

第十三同 或兄弟の問……七十二頁

第十四同 詰責を受けたる一兄弟の事……七十四頁

第十五同 默想の種々なる卓越の事、智の權の事及び祈禱の各種類に對して
智は其活動を起すに幾何權あるか、祈禱には如何なる界限を天然に與へら
るゝか、汝は如何なる界限迄祈禱を以て願ふの權あるか、其界限を越ゆれば
汝が行ふ所は祈禱と名づけらるゝと雖最早祈禱には非ざる事……八十二頁

第十六同 清潔なる祈禱……八十二頁

第十七同 物の記憶を以て喚起せらるゝ肉體の念を離れて深く直覺に入ら
んを尋ぬる靈魂の假定……九十二頁

第十八同 無形體なる者の本性を観察するに就て問答……九十八頁

第十九同 主日の事及びスポタの事に關する理論の標準及び其比喩的意義……

第二十同 常に庵中に居りて獨り己を省みんと決心せし者に最必要にして
最有益なる日々 of 想起……百〇五頁

第二十一同 種々なる事項に就ての問答……百〇九頁

第二十二同 試惑を恐るゝ身體は罪の友となる……百一十頁

第二十三同 默想を愛する一兄弟に遺す書……百五十二頁

第二十四同 同胞にして同教なる兄弟に遺す書……

彼は世に居りてイサアクに遇はんと欲し其來らんことを書を以て勸め且
懇願したるによる……百五十九頁

第二十五同 知識の三の方法の事、其作用と其意味の同じからざる事、心の信
仰の事、信仰に隱るゝ奥密なる富の事、此世の知識は其方法に於て信仰の正

目次

三

直明白と幾ばく差異ある事……………百六十一頁

第二十六同 知識の第一階級……………百七十一頁

第二十七同 知識の第二階級……………百七十五頁

第二十八同 知識の第三階級即完全の階級……………百七十六頁

第二十九同 知識の他の方法と其種々なる意味……………百八十一頁

第三十同 祈禱の状態の事及び其他讀者が小心に守るならば不斷の記憶の爲に必要にして多くの關係に有益なる者の事……………百八十三頁

第三十一同 近世的生活の事及び我等は畏れず驚かず神に依頼して心を堅むべく確たる信仰を以て勇氣なるべし何となれば神を看守者と爲し守護者と爲せばなり……………百九十一頁

第三十二同 心中内部の奥密なる微醒は如何して守らるゝか嗜眠と冷淡は何處より心中に來りて聖なる熱愛を靈底に消し靈界天上の事に熱心する精神を奪ふて神に向ふを滅殺するか……………百九十六頁

第三十三同 心中に續生し祈禱を以て試みらるゝ多くの變化の事……………二百頁

第三十四同 神に近づきて生存し認識の生活にて日を送る事……………二百二頁

第三十五同 世に服従する事……………二百五頁

第三十六同 或る顯然なる奇徴を己の手に有せんことを必要なくして願ひ且求むべからざる事……………二百十頁

第三十七同 神は何故神を愛する者に誘惑を放任するか……………二百十四頁

第三十八同 人に起る所の念頭により如何なる階級にあるを察知すべし……………二百十七頁

第三十九同 靈に屬する人々は身體の肥滿に準じ他の靈界に屬するものを知識により幾許看破すべきか如何して智は其肥滿より上に高めらるべきか之より自由を得ざるは何故なるか智は何時如何なる方法により祈禱の時妄念なくして止まるを得べきか……………二百二十五頁

第四十同 叩拜及び其他の事……………二百二十九頁

第四十一同 沈黙の事……………二百三十四頁

第四十二同 是れイサクが愛する所の一人に與ふる書にして彼は此中に(ア)默想の奥義に關する教訓を著し多くの者が此奥義を知らざるに依り此の神妙なる練修を等閑にし往々修道士の間に行はるゝ傳説により庵中に

留まることを述べ(カ)默想のことに關する訓話の摘要……………二百四十一頁

第四十三同 種々なる豫想の事及び各豫想の爲に必要な者の事……………二百四十八頁

第四十四同 默想を務むるは思慮ある者に肝要なる事……………二百五十四頁

第四十五同 精細なる思慮の階級……………二百五十九頁

第四十六同 眞實なる知識の事試惑の事及び陋劣薄弱にして學ばざる人のみならず一時無慾を賜はり思想の有様に於ては完全に達して死者の如くなれると共に一分は淨潔に近づきし者等も慾の上に高く立ちし者等も此世にある間は其生命を慾なる肉體と結合するにより神意により格闘の中に居りて肉體の故に慾より擾亂を受く故に驕傲に陥りて滅ぶるが爲憐みによりて彼等に試惑を遣はさるゝを確知するの緊要なる事……………二百六十五頁

第四十七同 此章の意義及び祈禱の事……………二百七十三頁

第四十八同 道徳の各種及び凡の道の完備……………二百七十九頁

第四十九同 信仰と謙徳の事……………二百九十頁

第五十同 遁世の益……………三百〇三頁

第五十一同 人は何に由りて生命の外部の状態の變ずると共に神秘なる思想にも變化を來すか……………三百〇五頁

第五十二同 夜間の徹醒及び其行爲の種々なる方法……………三百一十一頁

第五十三同 謙遜は如何なる尊敬を受るか其階級は如何に高尚なるか……………三百一十四頁

第五十四同 問答各種……………三百廿二頁

第五十五同 克肖なる父奇蹟者シメオンに與ふる書……………三百二十六頁

第五十六同 神を愛する事世を避くる事及び神に於て安んずる事……………三百七十三頁

第五十七同 世より遠ざかる事及び凡て智を擧すものより遠ざかる事……………三百九十一頁

第五十八同 神は靈魂を益するが爲慾に近接するを許す事及び苦行的行爲の事……………四百一十一頁

第五十九同 修道士の生活の秩序及び其梗概と區別徳行は如何なる様子にて互に相生するか……………四百二十八頁

第六十同 世より極めて上なる窄き路を進行する者に對し魔鬼の戦ふ種々な手段の事……………四百三十頁

第六十一同 心を神に近づかしむる爲に人に益するものゝ事如何なる其實の源因は人に助を傍に近づかしめて如何なる源因は人を謙遜に導くか……………四百四十三頁

第六十二同 神聖なる書の悔改を奨励する諭言及び人間の弱きに對して此を陳べられしは人々生活の神より離れて亡ぶるを免れんが爲なる事及び之を轉じて罪を犯す緣由と爲すべからざる事……………四百五十頁

第六十三同 修道士の生涯の美は如何して保護せらるゝか神に榮を歸するの順序……………四百五十三頁

第六十四同 神より定められたる默想の路を進行する者に如何なる轉變變化を生ずるか……………四百五十六頁

第六十五同 默想者の事默想者が其行爲を以て無邊の海に至る即ち沈黙の生涯に至るを理會し始むるは何の時なるか其勞の結果を産するを多少望むを得るは何の時なるか……………四百五十七頁

第六十六同 世に貧者となりて神を尋ぬる爲に出發したる神の僕は眞理の了解に達せざらんを恐れて尋ぬるを停止すべからず又神聖なるものと神の奥義の研究を愛するにより生ずる熱愛を冷にすべからざる事及び智は忿の記憶により擾さるゝ事……………四百六十頁

第六十七同 神に倚頼する種類當然に神に倚頼する者と無思慮に且無智にして倚頼する者の事……………四百六十二頁

第六十八同 世を棄る事及び自由の交際を慎む事……………四百六十八頁

第六十九同 掛念を有せざるは默想者の爲に有益にして其出入は有害なる事……………四百七十二頁

第七十同 夜間儼醒の行の愉快により神に接近し人に顯然たる者の行路の事及び此の本人は其生活の凡ての日を盗にて養はるゝ事……………四百七十五頁

第七十一同 罪なる敗壞は如何して生じ如何して止むか其力と勢力の事……………四百八十一頁

第七十二同 心を守る事及び幾微なる直覺の事……………四百八十九頁

第七十三同 神を愛する表徴及び其働の事……………四百九十一頁

目次

第七十四同 德行の種類……………四百九十三頁

第七十五同 不斷の禁食の事自己に集中して一所に止る事其結果の事及び凡て此等を正しく適用するを知識により區別するを學ぶ事…四百九十六頁

第七十六同 沈黙と默想の事……………五百〇七頁

第七十七同 肉體上の感動……………五百〇八頁

第七十八同 誘惑の各種類及び眞理の爲に起る誘惑を忍耐するは幾許く愉快にして善智なる人は如何なる階級により昇進するか……………五百十二頁

第七十九同 驕傲の事驕傲なる神の敵の試惑……………五百十七頁

第八十同 德行の種類の説明及び彼等は各々如何なる價值と如何なる特質を有するか……………五百二十一頁

第八十一同 肉體と靈魂と智の淨潔……………五百二十五頁

第八十二同 靈的智慧に充たさるゝ有益なる主眼……………五百二十六頁

第八十三同 悔改の事……………五百二十七頁

第八十四同 智識の尺度と信仰の尺度は如何程大なるか……………五百三十頁

第八十五同 謙遜にして聽く者に愛を以て告ぐる有益なる教訓五百三十四頁

第八十六同 心が靈界に進步する爲神の照管に依り我等に喚起せらるゝ天使的行動……………五百四十六頁

第八十七同 人に於ける第二の行爲……………五百四十八頁

第八十八同 光と暗の更迭は何れの時にも靈中に起る事及び靈魂は右にも左にも傾く事……………五百五十五頁

第八十九同 神聖なる熱心の假面に覆はるゝ無智なる熱心の有害なる事濫良及び其他の徳性より生ずる助の事……………五百五十三頁

第九十同 心ならざる惡なる念頭は之に先だつ思念を等閑にして注意せざるより生ず……………五百六十四頁

第九十一同 神を愛するより生ずる忍耐の事及び忍耐により助を得らるゝ事……………五百七十一頁

目次終

目次

シリヤの聖イサク全書

苦行的説教

第一 説教

世を棄つる事及び修道士の生涯

神を畏むるは道徳の始なり。言ふあり、道徳は信仰の所産なり。彼は智が世の放心より遠ざかり、羅くとして旋回する思を纏めて、未來の興復を考ふるに集中する時に心に種附けらるゝなり。人は道徳の基を置かんと欲せば、己を操持して浮世の事に遠ざかり、聖詠者(聖詠二十二の三百十八の三十五)が神を以て示し且稱したる如く正しく聖なる路に由り、光明の法に止まるに如くはなし。品性に於ては天使と等しき者もあるべし。雖、其尊きを持致し得る人ありや、或はあらん否、全くあらざらん。是れ或人の言ふ如く、變化を速に感受するより生ずるなり。

生命の路の始は常に智を以て神の言を學ぶと貧しきに生活を送るとにあり。一を

以て己を潤すは他を成全するに助けん。もし神の言を學ぶを以て己を潤さば貧しきに進歩するの助を爲すべくして無慾に進歩するは神の言を學ぶに進歩するが爲に閑暇の時を汝に與へん。彼と此との方法は、道德の完全なる家屋を速に高むるに助けん。

世に遠ざからずんば、誰も神に近づく能はざるなり。然れども遠ざかるとは肉體より移るの謂には非ずして、世事に遠ざかるをいふ。而して道德は人の其智を世の爲に占有せしめざるにあり。五感が人に勢力を有する間は、心は寧靜に止まり妄想なくして存する能はず。野に非ずんば肉體上の慾は休止に至らざるべく、愚なる思念は衰へざるなり。靈魂が自から感動する力を受けて神を信するに酣醉するに至らざる間は、五感の弱きを愈さるべく、内部に屬するもの、爲に障礙となるべき有形物體を力を以て壓する能はざるべく、自由と靈智的所産と彼と此との結果を感ぜざるべし。即網より救はれざるなり。第一者なくんば第二者あらざるべく、第二者之の正しく進行する處に在りては第三者は恰も勒轡の如く結び付けらるるなり。

(ア)世に遠ざかること(カ)神を信するに酣醉すること(サ)自由

恩寵が人に増殖する時は、義の願により、死を畏るゝことは人の爲に重視するに足らざるものとなるべくして、神を畏るゝが爲に患難を忍耐すべき多くの理由を人は其心に發見せん。見見身體の爲には有害にして、俄に人性に影響を及ぼし、隨て人を苦しむるすべてのものは、之を未來に望む所のものと較ぶれば、毫も其眼中に入らざらん。誘惑を許さるゝなくんば我等は眞理を認むるあたはざるべし。しかれども人の此事に於ける確證を發見するは、神が人の爲に大に慮りて神の照管の下にあらざる人なしとの概念に於てすべくして、神を尋ねて神の爲に苦難を忍耐する者は特に分明に之を見ること、掌を指すが如くならん。さりながら恩寵の衰微が人に増々加はるときは、此のすべてのものは人に於て殆ど之と反對なる状態にてあらはるゝなり。彼の爲に知識は研究の故に信仰より大なるべく、神に依頼するは何れの事にも之あるにあらざるべくして、人に於る神の照監は別に了會せらるゝなり。かくの如き人は常に矢を以て射んとして、暗きに埋伏する者(聖詠十の二)の詭計に陥らん。

人に於て眞生活の始は神を畏るゝなり。然れども人は才智の高超と共に之を其の心中に守るに堪へざるなり。何となれば神を樂むを自から失ひつゝ、五官に勤むる

が爲に心は散亂すればなりけだし人々言ふ如く内部の思想は此等を感じずるを以て之に勤むる官能其ものに結び付けらるゝなり。

智の疑は心中に畏を引誘す然れども信念は肢體を截断せらるゝ際にも自由の意志を確固不拔ならしむるを得べし。肉體に對する愛の汝に優勢なる程は汝が愛する所のものを圍む多くの抵抗に對し勇敢にして戰慄せざる者となる能はず。

己の爲に榮譽を希ふ者は哀みの原因を少くするあたはず。境遇の變化と共に眼前に在る所の事に關して變化を其心に感ぜざる人はあらず。もし慾念は人々の言ふ如く五感の所産ならば己を主張して引誘の際にも心の平安を守らんと言ふ者は終に黙止すべし。

奮闘苦行の時に於て勞の爲に耻づべき思念は其時絶滅すと自から己の事を稱する者は貞潔なる者にあらず。其心の眞實を以て其智の直覺を淨むる者は是れ貞潔者なり。けだし彼は放蕩なる思念に無耻にして心を留めざればなり。其良心の真正が一見して眞信の爲に證を爲す時は耻は思念の秘密なる納所に掛けられし慕の如くなるべし。彼の無玷は貞潔なる處女の如く、ハリストスの爲に信を以て守らるゝなり。

靈魂を豫め占領したる放蕩の傾きを遠ざけんが爲、又は肉體に起りて逆焰を漲らす騒がしき記憶を除かんが爲に充分なるは神の書を學ぶを愛するに己を埋めて、其意の深さを理會するに如くはなし。言中にかくるゝ睿智を理會するの樂みに思を没するときは、之より解明を引出すに隨ひ、人は世を背後に棄つべく、すべて世にあるものを忘るべく、すべての記憶とすべて世が具體化したる勢力ある象樣は靈魂に消滅して、常に天性を見舞ひ來れる思念の要求を頻りに貶黜せん。されば靈魂は聖書の奧義の海に於て見る所の新なる顯現により大に悦ばん。

もし智は水面に浮び、即神の書の海面に浮びて、其意の深きに透徹し、其深處にかくるゝ悉くの寶を了解することは能はず。雖も聖書を了解せんとする熱心に占領せらるゝならば、是れ其最も驚くべきことを考ふる。獨一の思考を以て其意思を堅く緊縛する爲にも、或る抱神者の言ふ如く、意思が肉體の性に突進するを妨ぐる爲にも、これを以て充分ならん。然れども心は劣弱にして内部と外部の戰の時に起る所の殘害に堪ふる能はざるべし。されば悪なる思念の如何に苦しきことは汝等之を知らん。もし心は知識を以て占領せられずんば、肉體的突進の援れを忍耐するあたはざるべし。

掛けらるゝものゝ重みは風の暴きにより天秤の動揺する速力を妨ぐる如く耻と畏は智の動揺を妨ぐるなりしかれども畏れと耻の缺乏するに随ひ智は斷えず旋轉せしめられんされば靈中より畏の遠ざかるにしたがひ智の秤衡は自由を得たるものゝ如く彼方此方に搖々として定らざるなりさりながらも秤衡は甚だ重き貨物を其盤上に載するならば最早風の吹くが爲に易く動揺せざるべしかくの如く智も神を畏るゝ心と耻との積載の下にあるときは之を動揺せしむる者の爲に轉倒せらるゝこと難し然れども心に畏の乏しくなるに随ひ轉動と變改とは之を占領し始めん故に其進行の基に神を畏るゝの心を置かんことを學ぶべしさらば途上に於て旋回するを爲さず日ならずして天國の門にあらん。

凡そ汝が聖書に於て見る所のものは言の主旨を探究せよ聖なる意義の深きに透徹していよゝ精確に之を了解せんが爲なり神聖なる恩寵を以て其生命を光明にみちびかるゝ者は恰も或る聰明なる光線ありて句々節々に記されしものを通過する如くなるを感知すべくして智は空言と大なる思想を以て心の認識に告ぐるものとを區別せん。

もし人は著名なる句々節々を思を潜めずして讀むならば心も貧しくなり了るべ

くして、靈魂の奇異なる了解により最甘美なる趣味を心に得しむる聖なる能力は彼に消滅せん。

すべての物は常に其の親しきものに向ふ神の分前を己れに有する靈魂も奥妙なる神的能力を含有する言をきく時は其言の旨趣を熱心に己れに引誘するなり靈神を以て言ひ奥妙にして大なる力を有するものはすべての人を覺醒して驚嘆せしむるには非ず道德に關する言は地の爲及び地と近く交るが爲に占有せられざらん心を要求す道德は暫時なるものを慮るが爲に心を苦めらるゝ人の思を覺醒して道德を愛せしめず之を領有するを尋ねしめざるなり。

物體より解脱するは其成立に於て神と結合するに先だつ恩寵の攝理により或者には後者の前者に先だちてあらはるゝことも屢々之ありといへども前者は後者に先だつだけだし愛は愛にて覆はるればなり攝理に通常なる秩序は人間社會の秩序と異なるありさりながら汝は一般共通の秩序を守るべし若し汝に於て恩寵の先だつあらば是は恩寵の事なりしかれどももし先だつすんばすべての人々が互に進行する途によりて汝も靈塔の高きに昇るべし。

すべて直覺的に行はるゝ事にして之が爲に與へられたる誠命に従ひ成就せらる

べきものは有形の目には全く見えず。而してすべて實驗上に行はるゝ事は複雑なり。何となれば實體あるものと實體あらざる者との爲にたゞ一なる誠命所謂實驗なるものは彼にも此にも直覺にも實驗にも必要を有するによる。けだし一致とは直覺と實驗との配合なればなり。

淨潔の事を配慮するの行爲は既往の過を記憶するにより喚起せらるゝ感情を壓せず。却て之を記憶するときに感ずる所の哀みを靈智より借るべし。さらば此時より記憶の進歩は心中に益を生ぜしめん。靈魂が道德を求むるに飽かざるは靈魂と結合する身體の顯然たる願欲の一分を己の益に向はしめん。節度はすべての物を飾らん。節度なくんば最美なりと思惟せらるゝものも轉じて害とならん。

彼の五官に役せらるゝにはあらざる樂みを己れに感じ智を以て神と交らん。欲するが矜恤に勤めよ。矜恤が汝の内部にあらはるゝ時は彼の神に似たる聖なる美は汝の中に描かるゝなり。矜恤の事の包容せざる所なきは、光明の榮譽と一致するが爲に何等の時間も要するなくして神性と交るを心に生ぜしめん。

靈的交通は印象す可らざるの記憶なり。此記憶は體合一致を守るが爲に其力を誠命に違はざるより借りつゝ、人性を強ふるを以てするにあらず。又之に従ふに依る

にもあらずして、奮然なる愛により、不斷心中に燃えん。けだし心靈の直覺を以て堅く體合に立つが爲に支柱を彼處に於て見るなり。ゆるに肉に屬するは靈に屬する二様の感覺の閉るにより、心は驚奇せん。もし人は先づ我等の主が言ひし如く父の完全なる如く博愛なる者となるを始めずんば、見えざる象様を心に印する靈的愛情に達するが爲に他の路あるなし。けだし主は其從ふ所の者に此基を置かんことをかくの如く誠命し給へり。

實驗の言は別にして、美言は又別なり。經驗上何等の確知なくしても、智慧は其言を飾るを能くすべく、真理を知らずして真理を言はん。或者は道德の行爲を自から實地に試みずして、道德のことを講解し得べし。しかれども、實驗より出る言は希望の實なり。之に反し、實驗を以て其義を表さるる智慧は耻の言質なり。

壁に水を描き其水を以て己の渴を止むる能はざる技藝者と、美なる夢を見る人、實驗を以て其義を表さるる言とは同じかるべし。道德につきて自ら實地に試みたる所を言ふ者は其聞く所の者に之を傳ふること、己の勞を以て求めたる金を他人に與ふる者と同じかるべし。又己の勞にて得たるものにより、聽者の耳に教を蒔く者は其神子と言ふや、勇氣にして口を開くこと、高老なるイアコフか潔淨なるイオ

第一 説教

一〇

シフにつぐる如くなるべし、曰く我れ第一の分を汝の兄弟よりも多く汝に與ふ是れ我が劍と刀を以て啜摩、但人の手より取りたる者なり、創世記四十八の廿二、一時の生命は凡て不潔に生活する人には大に望ましかるべく、智識を奪はれたる者は之に次ぐ、死の畏は良心に責めらるゝ人を哀ましめんと、或人の言へるは、太だ好し之に反して善なる證明を自己に有する者は、生命を願ふ、丈死をも願ふ、此の生命の爲に己の智を恐怖と畏懼の奴たらしむる者を、眞の智者と認むるなかれずべ、肉體と遭遇する所のものは善なるも悪なるも夢と思ふべし、けだし之より脱するは、獨り死を以てするにあらずして、死する以前にも、彼は汝を棄て、遠ざかること屢々之ありしかれども、此中汝の靈魂と或る關係を有するものあらば、之を以て此世に於る己の所得と思ふべし、彼は汝と共に來世にも行かん、而して此は善なるものならば、樂んで其心に神に感謝すべし、されど此は悪なるものならば、哀むべく、嘆息すべくして、汝が此身を有する間に、之より脱せんことを盡力すべし。

凡て汝の心に行はるゝ善は、汝自らも念を入れて、奥密に涵養せよ、けだし汝の爲に之が中保となるものは、洗禮と信仰にして、之により汝は我等が主イエススハリストスを以て彼の善なる行に召されたるなり、彼に光榮と尊敬と感謝と、叩拜は父及び聖神と共に世々に歸す、アミン。

第二 説教

神に感謝すること并に初等の教の簡短なる説明

受くる者の感謝は與ふる者をして先に受けたるよりも多くの賜を與へしむ、少き者の爲に感謝せざる者は多き者に於ても、偽なり不眞實なり。

病んで其病を知る者は必ず療法を尋ねん、己の病を他に告ぐる者は治療に近づきて其療法を易く發見せん、心の頑なるによりて彼の病は増加す、もし病者は醫に反對するならば、其苦痛は益々大ならん、悔いざる罪の外に赦す可らざる罪なし、而して賜はたゞ之が爲に感謝することなき時の外は、加増なくして了らざるなり、愚鈍なる者の受くる部分はその眼中に小なり。

德行に於て汝より優越なる者を常に記憶に存して、忘れざるべし、彼等の尺度に對して己の足らざるを、不斷に見んが爲なり、憂ふる者と輕蔑せられたる者の最苦しき憂愁を常に心に存すべし、汝自ら逢ふ所の微小にして論ずるに足らざる憂愁の

第二 説教

一一

爲にも當然の感謝を爲し喜んで之を忍耐するを得んが爲なり。
 打撃と衰弱と怠慢の時に當り敵の爲に苦しき疲勞と罪の重きに拘繋抑留せらるる者は以前の勉勵の時を其心に思ひ浮ぶべし。汝は凡て小なることをさへ如何に慮りしか。如何なる苦行をあらはしたりしか。汝の進行を妨げんと欲したる者に如何なる熱心を以て抵抗したりしか。然のみならず汝の怠慢により汝に現れたる瑕瑾の爲に汝は如何なる痛心歎息をなしたりしか。此のすべての際に汝は如何なる勝利の冠をうけたりしか。此を念ふ可し。げだし凡てかくの如き想出により汝の靈魂の喚起せらるるは深處よりする如くなるべく燃ゆるが如くなる熱心を被るは死者の葬られたるより復活して起上る如くなるべくして魔鬼と罪とに熱心敵抗するを以て其元始の秩序に立歸らん。
 有力者の陥りしを記憶して己の善行に謙遜せよ。昔陥りて悔改したる者の重き墜墜を想起せよ。而して之と同く彼等が其後に賜りたる高きと尊敬を想起せよ。さらば己の悔改に勇敢ならん。
 自から己を責めよ。さらば汝の敵は汝の近づくにより逐拂はれん。自から己と和せよ。さらば天と地は汝と和せん。己が内部の室に入らんことを勉めよ。さらば天の室

を見ん何となれば彼と此とは同一にして一に入りつゝ兩ながら見るべければなり。彼の國の階梯は汝の内部に汝の靈中に秘藏せらる罪を離れて自己に沈没せよ。然らば彼處に登るべき路を發見し之によりて登るを得ん。
 聖書は來世に如何なるものあるを我等に説示さす。然れども天然の變化至りて此世界より出づるに先だち未來の樂みの如何なるを此處に於て感知し得べきことを便宜に我等に教ふるなり。さりながら縦ひ我等を喚起して未來の幸福を願はしめんが爲に我等に慕はしくして且光榮なる愉快にして且貴重なる物の名を以て此を描寫すといへども「目未だ見ず耳未だ聞かず」云々(コリント前二の九)と言へば之により未來の幸福の測る可らずして此處の幸福とは何の同じきこともあらざるを我等に知らしむるなり。
 心神の樂は受くる者の靈性の外に獨立して存在する何等の物をも利用することあらず。然れども別に「天國は汝の裏にあり」(ルカ十七の二十一)と言ひ又「汝の國は來れ」(マテ六の十)といへば是れ既に我等は己の内部に或る感覺に屬する實體を感じ、此中に籠る所の樂みを聘質として受けたるを示すなり。けだし獲たる其ものは必ず聘質と同じき者なるべく、全きものは部分の合したるものならざるべから

すゆゑに「鏡に縁りて観るが如し」コリント前十三の十二といふは獨立的に存する者を示さずといへども同じきものを受けたるを意味するなり然して此の感知は聖神の智慧ある作用なりといへる聖書解釋者の證明はもし真ならば此感知は亦既に彼の全きものゝ部分なるなり。

戦て善を爲す者は道徳を愛する者にあらず之に随つて生ずる不幸を喜んで受くる者は道徳を愛する者なり人が道徳の爲に患難を忍耐するは大なる行爲にあらす五官の誘惑的肉痒の時に當り善意の選擇を爲すが爲に智の惑はざるは大なる行爲なり。

すべて後悔は自由を奪はるれば喜をも生せず又此を爲し、者に恩賞に對する權利をも與へざるなり。

もし汝に害なくんば陷る者を庇護すべし然らば彼にも善心を添ふべく汝の主宰の憐みは汝をも扶けん劣弱なる者と傷心する者とは言を以て之を堅むべく汝の手の届く丈すべての方法を以て堅めよ然らば全宰なる右の手は汝を堅めん祈禱の勞を以ても中心の愛情を以ても傷心する者と親與せよ然らば汝の願の爲に憐みの泉は開れかん。

感動に満たさるゝ清き思念を心に有する神の前の祈禱を以て常に己を勞らすべし然らば神は汝の智を不潔汚穢なる思念より守り神の途は汝によりて辱められざるべし。

神の書を讀み其確實なる理解を以て常に點想を練習せよ汝の智の閑なるに乗じて汝の視覚が他の未だ知らざる放蕩の汚穢を以て汚されざらん爲なり。

勝たれざるべしと思ふ時にも或は放蕩なる思念を以ても或は汝を誘惑に引き入るゝ容顔を見るを以ても己の智を試みるを決行するなかれ何となれば賢者も此の如くして暗まされ驕傲に陥りたればなり其肉體の強き衰なくして火焰を其懐に隠すなかれ。

青年には學ばずして聖物の軌下に自から投すること難し智の昏昧の始は其徴候が心中に始て顯はるゝ時先づ神の勤めに怠ると祈禱に怠慢なるに於て發見せらるべしけだし靈魂が先づ此より離れずば心靈上の誘惑に入るべき他の途なればなり然して靈魂は神の助を奪はるゝならば其敵の手に易く陥らん且靈魂は道徳の行を等閑視するものとなるや必ず之と反對なるものに誘はれんげだし如何なる方面なりとも此より他に轉ずるは最早反對なる方面の始なりもし道徳の

ため及び靈魂の爲に爲す所あらば無益の事に掛念するなかれ己の弱きを不斷神の前に打明すべし然らば保護なくして獨り居るも他の爲に誘はれざるべし。十字架的實驗に二様あり性の二様なるにより彼も二部に分たるなり其一是靈魂の刺激的部分の働により起さるゝ肉體の愛を忍耐するにありて是れ所謂實驗なり之に反して他は才智の穎敏なる活動と神聖なる默想とにあり同く亦祈禱を專にする等にありて彼は靈魂の願望の部分に行はれ直覺と名づけらるゝなり而して一者即實驗なるものは熱心の力によりて靈魂の慾に屬する部分を潔むべく次者は眞實なる愛の働にして即ち靈魂の聰明なる部分を光照する天然の願望なり凡て第一の部分に於て完全に學習を爲すに先だち此の第二の部分に移り其美に心を奪はるゝ人のことは予は最早其怠慢は言はざるべきも地に在る肢體「コロサイ三の五」を先づ殺さるゝが爲に怒は彼に及ばん即十字架的汚辱の行爲を忍耐練習するを以て意志の弱きを癒さず却て十字架的光榮のこゝを其心に妄想するを取てしたるが爲に怒は及ばん古聖のいはゆる其官能の弱きを癒して靜黙に達するに先だち智は十字架に上るを企つるならば神の怒は及ばんといふは亦此義を示す怒を招くべき此の十字架に上るの事は憂愁を忍耐する即肉體に釘する第

一の部分にあるには非ずして人が直覺に入らんとする時にありされど此は靈魂を惹きたる後に従ふべき第二の部分あり耻づべき慾の爲に智を汚されたる者と虚妄の念を以て智に満たさんと急ぐ者は先づ憂愁を以て心を潔めず肉體の願望を制せずして耳に聞くものと墨汁にて書したるものに依頼し自から目を盲まして暗黒に満たさるゝ途を行かんと務進するが爲に其口は塞がれんげだし視覺の健全なる者は光に満たされ恩寵の嚮導を己れに得ることも日夜戦々兢々として其目は涙に満たさるゝなり而して彼等を途に要する甚だ恐るべきものと其遭遇する恐るべき懸崖と欺かれ易き幻像と相混じてあらはるゝ眞理の假裝の故に彼等は祈禱と涕泣とに於て其勤を終日續行し夜に至らんとす。或人言ふ「神よりするものは自然に來る然れども汝は感知せざるなり」と是れ眞實なり然れどもたゞ願くは場所の淨潔にして汚さるゝ無からんことをもし汝の心の目の眸子が不潔ならば太陽の球體に敢て目を注するなかれ恐らくは汝は此の小なる光線をも失ひ即一片の信仰と謙遜と心の信認と汝の力に準する小なる行爲をも失ひて靈物の居る唯一の範圍に投せられん即神の外にありて外域の幽暗と稱する地獄と同じき所に投せらるゝこと夫の不潔の衣を服して婚姻に來るを

耻ぢざりし者の投せられし如くなるを免れざらん。
 思の淨潔は勞苦と己を守るとより流れ出づべく思慮あることの光は思の淨潔より流れ出でん。此により才智は恩寵に依りみちびかれて五感が權を有せざるものと教へざるものと學ばざるものとに至らん。
 道徳は即體にして直覺は即ち靈なるを想ふべし而して彼と此とは五感に屬する靈智に屬する二の部分よりして精神を以て合成せらるゝ一の完全なる人を成す。肉體と其部分が完全に形作らるゝなくんば靈魂は存在を受けて生ずる能はざるべし。此の如く靈魂の爲に第二の直覺に達する即默示の精神に達し靈的種子の實質を己れに受くる子宮に於て形成せらるべき直覺に達するの事も道徳の行爲を成すなくしては能はざるべし。而して是れ即天啓を己れに受くる力を認識する者等の居る所なり。
 直覺は物と其原因とに隱るゝ神聖なる奧秘を感じする是なり。世に遠ざかると世を棄つると世にあるすべてのものより潔まるの事を聞く時は、先づ世といふ名稱は如何なる意味なるか如何なる區別により此名の成ることを理解し且認識するに通俗の意味を以てせず純理の見解を以てせんこと汝に要なり。然らば汝は自己

の靈魂が幾ばく世に遠ざかると世より之に何を混せらるゝことを認識するを得ん。世といふ言は我等が計算する諸慾を自から包括する集合名辭なり。もし人は世の如何なるを先づ覺知せずんば、何の肢體を以て世に遠ざかり、何の肢體を以て世と結ばるゝを認識する迄に到り達せざるべし。二三の肢體を以て世より脱し之を以て世と交るを避け、竊に己を以て其生活は世に遠ざかれりと思ふ者多し。けれど彼等はたゞ二の部分にて世の爲に死したれど、他の肢體を以ては世に生くるを理會せず。容智を以て悟らざるなり。然して彼等は自から己の慾をも自覺するあたはずして、既に之を自覺せざれば、之を療することにも意を致さざるなり。
 理論的推究によれば世とは分ち取る所の諸慾を自から包括する集合名辭の組成をも名づくれば、慾を總括して之に名を下さんと欲するときには之を慾と名づくるなり。慾は連続も其名の區別により之を分たんと欲するときには之を慾と名づくるなり。慾は連続として繼々承々する世の流れの部分なり。ゆゑに慾の廢絶する處に於ては世は其連続たる繼承を止めん。慾とは左の如し、富の爲及び或る物體を聚むるが爲に熱中するなり。肉體上の快樂なり。結婚の熱情は之より生ず尊貴の願なり。嫉妬は之より流る首領となりて令せんとの願なり。權勢の高きに傲然として誇るなり。修飾して

意を悦ばせんと願なり人間の名譽を索むるなり是れ怨の原因なり肉體の爲に
 恐るゝ心なり此等の怨の其流を止むる處に於ては世も死すべく此等の怨の或る
 部分が彼處に不足する程はそれにしたがつて世は其組織の其部分に於ては活動
 せずして休止するなり聖者のことに就て或人の言ひし如し曰く彼等は生存しつ
 づ死せり何となれば肉に於て生くれども肉に従はずして生くればなりとゆゑに
 汝も此等の中の何の部分かを以て生くるを見よ其時は何の部分かを以て世に生きて
 何の部分かを以て死せるを汝は認識せん世の如何なるものたるを確知するときは
 此のすべての區別により何を以て世と結ばれ何を以て世より脱するを確知せん
 畧して之を言へば世とは肉體的生涯と肉體の念慮をいふ人の己を此より奪ひ去
 ることに依り人が世より出でたることは認識せらるゝなりされば世より遠ざか
 ることも左の二の徴候により認識せらるべし即超絶なる生涯に依り及び其智見
 の卓越なるに依り認識せらるゝなり此よりして終に庶物に對する概念は汝の思
 に生じて其の概念により思は庶物の上に飄らんされば性が己を強ひずして願欲
 するものは何なるか汝にある所の萌芽は滅さるゝ能はざるものなるか或はたゞ
 偶然に生ずるものなるか智は全く無形體なるものを理解認識するに到達したる

か或は全く有形物體なるものに動かされて此の物體なるものは嗜慾的なるか之
 と相準じて汝は其生涯の尺度を得んけだしすべて行ふ所のものに智が自然にあ
 らはるゝ行爲の具體化したる印象は是を即道徳なる善なる目的と共に身を以て
 勞せんとする思念の熱切と集中はもし嗜慾的にあらずんば此の熱切を練習する
 が爲に原因を自から此等の印象より健然に借り來るべくして此等の思念の隠
 る印象と相會しつゝ神に於る最良なる熱心の爲に無益なる記憶は常に割断せら
 るゝにより智は弱るなや否を察すべし。

此章に於て示したる此等の僅少なる徴候はもし人は默想に専らにして遁世生活
 を爲すときは人を光照するが爲に充分にしてては多くの書に易ふるを得ん肉體
 の爲の恐れは人々に於て有力にして之により人々は或る名譽なる事又は尊敬す
 べき事をも成すに堪へざるものとなり了ること屢々之ありしかれども肉體の爲
 の恐れに靈魂の爲の恐れが臨むときは肉體上の恐れは心靈上の恐れに對して無
 力なること恰も蠟の之を焼く火の力に於る如くなるべし我等が神に光榮は世々
 に「アミン」

第三 說教

靈魂は世と世慮に遠ざかりて沈黙するならば、神の睿智と神の造物を易く認識するに至らん、けだし其時は己の性と己の内部に隠るゝ寶を認識するを得るなり。

浮世の慮の外より靈中に入るあらずして、靈魂が天性自然の状態に居るならば、其辛勞は久しからずして神の睿智を認識するに達せん、何となれば靈魂が世に遠ざかるゝ其沈黙とは、彼をして自然に神の造物を認識せしむべく、之により彼は神に擧げられ、驚嘆して神と共に止まらん、けだし心靈の泉に外より水の入り来るあらざるときは、彼に溢るゝ天然の水は神の奇蹟を考ふる思想を不斷靈中に生ぜしめん、之に反して靈魂が此等の思想を有せざるものとして現はるゝならば、是れ或は他の或る記憶を以て或る原因を興へられたるゝ、或は五感が外物と逢着したるに、より靈魂に亂れを引起したるゝを示すなり、然れども五感が沈黙を以て鎖され、外

部に突出するを許されずして、沈黙の助けにより記憶の衰ふる時は、靈魂の天然自然の意思は如何なるか、靈性其ものは如何なるか、如何なる寶は之に隠るゝかを發見せん、それ此寶は無形體なるものを識るの認識にして、之に先だつの意思あるなく、之が爲に勞することもあらずして、自然に心中に生ずるものなり、然のみならず人はかくの如き思念の人の性中に生ずるを知らざるゝことさへ之あり、けだし誰か人の爲に師となるか、或は智力により想像しつゝ、他の爲に説明し得べからざるものを人は如何して理會するか、或は人か少しも他より學ばざる所のものに於て誰か其嚮導者となるか。
靈魂の天性はかくの如し、ゆゑに慾は或る附加物にして、靈魂は自から之が本原たるなり、けだし天性によれば、靈魂は無慾なり、されば聖書に於て、靈魂の慾と肉體の慾の事を見るあらば、是れ慾の原因に關して言ふものなることは、汝の爲に明白なるべし、しかれども靈魂は天性に依れば無慾なり、外部の哲學を固守する者等は、此説を採らず、彼と同じく其門徒等も亦然り、之に反して我等は信ず、神は像によりて造る所のものを無慾に造り給ひしを、像によりて造る所のものは、肉體に關していふにあらずして、見ざる靈魂につきて言ふなり、けだし凡の像は眼前にある所

の形状より描取らるべし。先づ眼前にあらはれたる同形なくんば、いかなる像をあらはすを得べきか。ゆゑに我等が前文に述べし如く、慾は靈魂の天性に存するに非ざるを確信すべし。もし誰か之に抗言するならば、我等は彼に疑問を提出せん。彼は我等に答ふべし。

問 靈魂の性は如何なるか。無慾にして光に満たさるゝものなるか。或は有慾にして暗まされたるものなるか。

答 それ靈魂の性は有福なる光を己れにうけしものなるが故に、闇には光明純潔にして原始の秩序に回復せらるゝときも、之と同様にあらはるゝならば、教會の教育者も斷定する如く、慾に感動するあるや、靈魂は其本性の外にあることは最早疑を容れざるなり。故に慾は後來靈魂に輸入したるなり。されば靈魂はたとひ感動せらるゝも、慾を以て靈魂の本性の中に之ある如く言ふは眞實にあらざるなり。ゆゑに靈魂が自己の固有にあらざる外物を以て感動せらるゝことは明なり。もし靈魂は身體の關係を離れて慾に動かさるゝにより、慾を以て靈に屬するものと名づくるならば、飢渴も睡眠も靈に屬するものとならん。何となれば、靈魂は此等のものに於ても、之と同じく肢體を截斷せらるゝ際に於ても、熱病疾病及び其他の之に類するものに於ても、肉體と與にするにより、之と共に愛を分つは、猶肉體も靈魂と共に愛を分つが如し。靈魂は肉體の樂むときは共に樂み、其愛をも自から共にするなり。我等が神に光榮と權柄は世々に「アミン」

第四 説教

靈魂の事、慾の事、及び智の淨潔の事に就ての問答

問 靈魂の天然の状態はいかなるか。天然と反對の状態はいかなるか。天然以上の状態はいかなるか。

答 靈魂の天然の状態とは感覺に屬すると思ふに屬する神の造物を認識するなり。天然以上の状態とは常に萬物に先だちて存在する神性を直覺するが爲に喚起せらるゝなり。然して天然と反對なる状態とは慾に亂さるゝものに靈魂の感動するなり。神聖なる大ワシリイの言へる如し、曰く、靈魂は天性に順應してあらはるゝときは上方にありしが、れども其天性の外にあらはるゝときは下方に地にあらはるゝなり。上方にあるときは無慾を以てあらはるれども、天性が其固有の品位より

下るときは彼に愆はあらはるゝなりゆゑに靈魂の愆は天性のまゝ靈魂に屬するものにあらざることは終に明白なりもし靈魂は非難せらるべき肉體上の愆に感動すること飢渴に於ると同くは飢渴に就ては之が爲に法を置かれざるにより、他の批責に値する者と同様批責をうくべきには非ざるべし時として或者には一見したる所或る不適宜なることを遂ぐるを神より許され非難と譴責とに代へて善なる報酬を與へらるゝことあり淫婦を妻に娶りたる豫言者オシヤの爲にもかくの如く、神に屬する熱心により兇行を遂げたる豫言者イリヤの爲にもかくの如く、モイセイの命により其父母を及殺したる者の爲にもかくの如くなり其外靈魂には肉體の性を俟たざるも、天然自然に辯愛と激し易き性のあつたことは言ひ得らるべくして是れぞ即靈魂の愆なる。

問 性に順應すとは靈魂の望みが神聖なるものゝ爲に奮熱せしめらるゝ時なるか或は地に屬するものゝ肉に屬するものゝに向ふ時なるか且何の爲に靈魂の性は激怒と其熱心を露はすか又如何なる場合に於て激怒は天然なるものゝ名づけるゝか靈魂が或る肉體上の望みの爲或は嫉妬の爲或は虚誇の爲或は之と相類するものゝ爲に刺激せらるゝ時なるか或は之と反對なるものゝ之を刺激する

時なるか誰か説あらば答ふべし我等之に従はん。

答 神の書は名稱を多く言ひ、屢々之を使用すれども其義を的確にあらはさず或る名稱は肉體に屬すれども靈魂のことを言ひ、之と反對に靈魂に屬する名稱は肉體のことを言ふ、聖書は之を分開せず然れども聰明なる者は此を理解するなり。かくの如く主の神性に屬する名稱の中人性に適用すべからざる或る名稱は聖書に主の至聖なる體のことを言ひ、之に反して人性に依り主に屬する卑下なる名稱は主の神性のことを言ふゆゑに多くの者は神聖なる言の旨趣を理解せず、蹉跎して改む可らざる罪を犯しぬ、かくの如く聖書には靈魂に屬するものと肉體に屬するものとのを嚴に區別せずゆゑに道德は天然に靈魂の健康ならば、愆は最早靈魂の病にして、靈魂の性に偶然入り來りて其固有の健康を失はしむるものなり、然れども健康は天然に偶然の病に先だつことは此により明白なり、ゆゑに此は實にかくの如くならば、至當ならば是れ既に道德は天然自然靈魂に存在して偶然なるものは靈性の外にあるを意味するなり。

問 肉體上の愆は天然なるか或は偶然に肉體に屬するか又靈魂に屬する心靈上の愆は靈と體の結合により天然なるか或は非固有的に靈魂に屬するか。

答 肉體上の慾のことは非固有の義に取るべしとは誰も敢て言はざるべし然れども心靈上の慾のことは清潔が靈魂に天然なることと敢て言ふは當然なり何となればむるならば慾は毫も靈魂に天然なるにあらざると敢て言ふは當然なり何となれば病は健康の後であればなり然して同一の性に善なるものと惡なるものは共に存すること能はずゆゑに一は必ず他に先だゞざるべからずして他に先だつものは天然なり何となれば凡て偶然なるものゝことは性よりするにあらずして外より輸入せりと言ふべきによる而してすべて偶然なるものと輸入せしものには變化の隨ふあれども性は變せず易はらざるなり。

凡て利益に資くる所の慾は神より賜はりしなりされば肉體上の慾は肉體を益し且成長せしむるが爲に賦與せられしものにして心靈上の慾も亦然るなりさりながら肉體が其固有するものを失ひて強て其安寧の外に立ち靈魂に従ふを餘儀なくせらるゝときは肉體は衰弱して害を被むらん又靈魂も己れに屬するものを棄て、肉體に従ふときは彼も害を受けん使徒の言ふ所によるに曰く「肉の欲する所は神に逆ひ神の欲する所は肉に逆ふ斯の二者相敵す」ガラタイヤ五の十七ゆゑに誰も神を非難して我等の性に慾と罪とを賦與したる如く言ふなかれ神は各自の

性にその成長に資くべきものを賦與し給へりさりながら一の性が他と合同するときは自己と親しきものに合同するにあらずして反對なるものに合同するなり然れどももし慾は靈魂に天然に存するならば何故靈魂は之より害をうくるか本来性に屬するものは之を害せざるなり。

問 肉體を成長堅固ならしむる肉體上の慾は本来靈魂に屬せずんば靈魂を害するは何故なるか又道徳は肉體を苦むれども靈魂を成長せしむるは何故なるか。

答 性の外にあるものは性を害する所以を認めざるかけだし性は各己れに屬するものに近づきて樂みに満たさるゝなりさりながら汝は此等各自の性に屬する固有なるものゝあるを知らんを願ふか認めよ性に助くる所のものは其性に屬するものにして之を害するものは疎遠なるもの外より輸入せしものなることをゆゑに肉體の慾と靈魂の慾とが互に反對することは確知せられたるにより凡て幾許なりとも肉體に助けを爲して之に休安を與ふるものは既に肉體に固有なるものなりしかれども靈魂は何物と親しくなるとも其物は靈魂に天然なりとは言ひ得ざるなりけだし靈魂の固有を成すものは肉體の爲には死なればなりさりながら前文に言ふ所のものは非固有的に靈魂に屬するも靈魂が自から肉體を被むる

問は肉體の弱きにより之を脱して自由にならんことは能はざるなり何となれば測る可らざる睿智を以て靈魂の活動と肉體の活動との間に定められたる一致合同の故に依り肉體の爲に憂ふるものを天然自然に彼と共とすればなり然れども彼等は互にかくの如く共に與にすといへども甲の活動は乙の活動と異なり彼の望みは此の望みと異にして之と同一體は神と異なるなりさりながら性は變せざるなり却て各自の性は或は罪に或は道徳に極めて傾くといへども然れども其固有の望みにより活動するなりされば靈魂が肉體のこの慮より上に高まるべきは其活動により全く靈神上に開花して天の中央に測るべからざる所に帶去られんさりながら此の状態に於ても肉體が其自己に屬する固有なるものを忘れて想起せざらんことをば許さざるべくして之と同じく肉體が罪に於てあらはるゝならば靈魂の思は心中に流れ出て已まざるなり。

問 智の淨潔は如何なるか。

答 智の淨潔とは人が惡を知らざるを言ふにあらずけだしかくの如き者は畜類も同様なるべし天性のまゝ孩提の如くなる状態にあるを言ふにあらず外見を飾るを言ふにあらず視よ智の淨潔とは即道徳に勤勉練習するにより神聖なるもの

を以て光照せられたる是なりゆゑに人が思念の誘惑なくして之を得ること肉體を衣ざる者の如くなるべしと予は敢て言はざるべしけだし我等が性は死に至る迄戦はざるべく害を受けざるべしと予は言ふを敢てせざればなり然れども思念の誘惑と名づくるは之に従はしめらるゝを言ふにあらずして之と戦ふの始を置くをいふ。

思念の活動は四ある事

思念の活動は人に四の原因により生ずるなり第一は天然なる肉體上の望みにより生じ第二は人の見聞する世の客觀が感覺に顯はるゝにより生じ第三は豫め占領せられたる概念により及び人が智力に有する心靈上の傾きにより生じ第四は如上的原因により悉くの慾に引入れて我等と戦ふ魔鬼の打撃により生ずるなりゆゑに人は此の肉體の生活にある間は死に至る迄思念と其戦とを有せざる能はずけだし人は世を出でざる先又は死せざる先に此の四の原因中何れか無動作に至らんことを得るか或は肉體の爲に緊要なるものを切に求めざるゝ世の或物を願ふを餘儀なくせられざることを得るか自から判斷すべししかれども此の如きことを想像するは時に合はず何となれば性は此の如き事々物々に必要を有

すればなりと云は、是れ最早慾は凡て肉體を被むる者の欲するを欲せざるとに拘はらず動作するを意味するなり是故に凡て肉體を被むる人は顯然として不斷に動作する一の或る慾より己を保護せず二の慾より保護せずして多くの慾より保護せんこと緊要なり徳行を以て自から慾に勝ちし者はたとひ思念と此の四の原因の打撃の爲に驚かざるべしといへども自から勝利を譲らざるべし何となれば彼等は力を有して其心意は善良神聖なる記憶の爲に大に悦ばばなり。

問 智の淨潔と心の淨潔とは何を以て異なるか

答 智の淨潔は別にして心の淨潔は又別なりけだし智は心靈上の感覺の一なれども心は内部の感覺を包括して之を其權中に持すればなり心は根なりもし根が聖ならば枝も聖ならん即心が導かれて淨潔に達するならば悉くの感覺も清めらるること明なりもし智は神聖なる書を読み益々勉勵し或は禁食と敬醒と静黙とに多少苦んで汚穢の品行に遠ざかるならば其従前の生涯を忘れて淨潔に達せん然れども恒久なる淨潔は有せざるべし何となれば彼は速に淨めらるれど亦速に汚さるればなりたゞ心は多くの患難と剝奪と凡て世に居る者等と世間的交際を爲すより遠ざかるべし此のすべての爲に己を殺すことにより淨潔に達するなり然

してもし彼は淨潔に達するときは其淨潔は何等の小なるものゝ爲にも汚されざるべし大なる顯然たる戦をも恐れざるべし即寒心すべき戦をも恐れざるべし何となれば薄弱なる人々に於て消化する能はざる如何なる食物をも速に消化し得べき強健なる胃を己れに有すればなりけだし醫は言へり凡て肉食は消化し易からず然れども強健なる胃が之を受くるときは健康なる體に多くの力を與へんかくの如く凡て暫時の間に僅少なる勞苦を以て速に得たる淨潔は速に失はれ且汚されん然れども多くの患難によりて達し長久の間を以て得たる淨潔は靈魂の或る部分に對する打撃の度の優勢にあらざるものをば恐れざるべし何となれば神は靈魂を堅むればなり彼に光榮は世々に歸すアミン。

第五 説教

感覺の事併て誘惑の事

貞潔にして一に集中せられたる感覺は靈魂に平安を生じて事物を試みるに入るを許さるべし然して靈魂が事物の感觸を己れに受けざるときは勝利は戦なく

して成らんしかれどももし人が漸く怠慢して打撃の來り近づくを許す時は戦を受くるを餘儀なくせらるべくして最單純平和なる元始の淨潔は攪亂せらるゝなりけだし此怠慢により人類の大半或は全世界も天然自然の清き状態を失はん故に世にありて世の人々と密なる關係を爲す者は智を淨潔にする能はざるべくして智の元始の淨潔を回復するを能くする者は僅なるべしゆゑに凡の人は常に警戒して其感覺と知覺を打撃より守らざるべからずけだし傲醒と不眠と豫覺とは大に要用なり

大なる質朴は變じ易し人性は神に従ふ界限を守るが爲に畏を必要とす神を愛するは人に道德の行爲を愛する心を喚起して之により人は作善に誘引せらるゝなり靈的知識は其性質に於て道德の行爲の後にある然れども畏と愛とは彼と此とに先だつべくして愛は又畏に先だつ凡て前者を爲すなくして後者を求むるを得べしと耻ぢずして言ふ者は靈魂の爲に滅亡の第一の基を置かんこと疑なし此の如く主の途は後者は前者より生ずるなり

汝の兄弟を愛するを或物を愛するに換ふるなけれ何となれば汝の兄弟はすべてものより貴重なる者を與密に己の内部に受たればなり大なる者を得んが爲に

小なる者を棄てよ高價なる者を得んが爲に餘分なるものと低價なるものを輕んせよ自己の生命に於て死すべし死後に生きんが爲なり苦行に死して怠慢に生きざるに己を付すべしけだしハリストスを信するが爲に死を受けたる者のみ致命者にあらずハリストスの誠命を守る爲に死する者も致命者なり己の願に於て無智なるなかれ汝の知識の小なるを以て神を辱しめざらん爲なり己の祈禱に於て智なるべし汝に光榮を賜はらん爲なり尊敬すべきものを嫉妬なくして與ふる者に願ふべし其賢明なる願の爲に尊敬をうけん爲なりソロモンは自から睿智を願ひ之を大なる睿智の王に願ひしにより睿智と共に此世の國をも受けたりエリセは其師の有したる神の恩寵の二倍を願ひしに其願は遂げずして了らざりきけだし不要緊なるものを王に求むる者は王の尊貴を賤んずるなりイズライリは不要緊なるものを願ひしかば神の怒は彼に及べり彼は神に屬する行爲により神の恐るべき奇跡に驚嘆する事をば棄てゝ其腹の欲する所を充さん求めたり然るに食の尙其口にある時神の怒は彼に臨めり聖詠七十七の三十三一神の光榮に應じて己の願を神にさげよ汝の價値が神の前に増々加はりて神は汝を喜ばん爲なりもし誰か或る穢はしきものを王に願はばこはたゞ其願の不要緊を以て自

から已を汚して之により大なる無智をあらはすのみならず其願を以て王をも辱しむるなり。祈禱に於て地に屬する幸福を神に願ふ者もかくの如く行爲するなり。けだし視よ天使と天使長即王の大臣等は汝が祈禱の時如何なる願を以て主宰を向ふに注目し汝地に屬する者が已の肉體を棄てて天に屬するものを願ふを見るときは駭き且喜ばん之に反して天に屬するものを棄てて自己の穢はしきものを願ふを見ば哀まん。

神が自から其照管により我等の願を待たずして與ふるものとたい神に屬する者又は其至愛者に與ふるのみならず神を知らざる疎遠者にも與ふるものを神に願ふなかれけだし言ふあり祈禱に於て異邦人の如く贅語を言ふなかれと「マトフイ六の七」是れ肉體に屬するものにして異邦人の需むる所なりと主は言ひ給へり「マトフイ六の二十五三十二」子は其父にパンを願はざるべし其父の家に於て最大なるものと高貴なるものを求めんけだしたゞ人智の劣弱の故に主は日々の糧を願ふべきを誠命し給へり然れども知識の完全にして靈魂の康健なる者には何を誠命せられしを見よ彼等には告げて言へり食物或は衣服の爲に慮るなかれ何となればもし神は無言なる動物の爲禽鳥の爲及び不靈なる造物の爲にさへ之を慮らば矧や汝等の爲に慮らざらんやたゞ神の國と其義とを求めよ然らば此等の者は皆汝等に加はらん「マトフイ六の三十三」

神に願ふ所あらんに神は速に汝に聽くを延引するならば哀むなかれ何となれば汝は神より睿智なるに非ればなり汝に之あるは或は願ふ所のものを汝の受くるに當らざるによるべく或は汝の心の行く路が汝の願に副はずして却て之と反對なるによるべく或は汝は願ふ所の賜を受くべき程度に未だ達せざるによるなり。けだし我等は時に先だちて大なる程度に關係すべからず受ることの速なる爲に神の賜の無益とならざらん爲なり何となれば易く受けしものは速に失はるべくして凡て中心の苦を以て得たるものは戒慎して守らるるによる。

ハリストスの爲に渴を忍べ彼が其愛を以て汝に飲ましめん爲なり浮世の樂の爲に已の目を塞げ神が其平安を汝の心に主たらしむるを汝に賜はらん爲なり汝の目に見る所を節制せよ神の喜をうけん爲なりもし汝の行爲は神の意に適せずんば神に祝福を強て願ふなかれ神を試みる人の如くならざらん爲なり汝の祈禱は汝の生涯と相準すること肝要なりけだし地に屬するものに繋がる者は天に屬するものを求むるあたはざるべく世事に占領せらるる者は神聖なるものを願ふ

を得ざるなり何となれば各人の願は其行爲を以て表示せらるべく人が勉勵を願はす其もの爲には祈禱に於て闘ふべきによる大なる者を願ふ者は不要緊なるものに占領せられざるなり。

汝は肉體に繋がるといへども自由の者たるべく、ハリストスの爲に従順の自由を表はすべし汝は正直を以て善く慮るべし竊み去られざらん爲なり凡の行爲に於て謙遜を愛せよ謙遜なる者の行路以外常に發見せらるゝ認め難き網より救はれん爲なり艱難を避くるなかれ何となれば之を以て真理の認識に入ればなり誘惑を恐るゝなかれ何となれば之により尊敬すべきものを得べければなり祈禱せよ心靈上の誘惑に陥らざらん爲なりされど肉體上の誘惑には全く剛毅にして自ら備ふべしげだし誘惑の外に於ては神に近づくあたはず何となれば神聖なる安息は誘惑の中に於て備へらるればなり誘惑より逃るゝものは德行よりも逃れん誘惑とは欲望のことにあらず艱難を言ふ。

問「祈禱せよ誘惑に入らざらん爲なり」マトフイ二十六の四十一と言へども他の處には「力を竭して窄き門より入れ」ルカ十三の二十四といひ又身を殺すものを懼るゝなかれ「マトフイ十の二十八」といひ又「我が爲に其生命を喪ふ者は之を得ん」同

上三十九といふ此等の言は如何んして一致すべきか主は何處にも誘惑を忍耐するに我等を奨勵すれども此處には命じて祈禱せよ誘惑に入らざらん爲なりといふ是れ何故なるかげだし艱難と誘惑となくして如何なる德行ありや或は如何なる誘惑は此より大なるか即人が自己を亡すより大なるかしかれども主の爲に此誘惑に服すべきを主は命じ給へりげだし言ふあり己の十字架を負ふて我に従はざる者は我に宜しからず「マトフイ十の三十八」然るに主は其凡ての教に於て誘惑に服すべきを命じたれど此處には入らざらんことを誠命し給ひしは何故なるか、げだし言ふあり汝等多くの艱難を歴て天國に入るべし「行實十四の二十二」又言ふあり世にありて患難をうけん「イオアン十六の三十三」又言ふあり忍耐を以て汝等の靈を救へ「ルカ二十一の十九」

嗚呼主よ汝の教導は智の如何なる鋭敏を要するか才智と認識とを以て讀まざる者は常に此教導の外にあらん「ゼフデイの子と其母が汝と共に天國に坐せんことを願ひし時汝は彼等に告げて次の如くいひ給へり曰く汝等我が飲まんとする爵を飲むことを能くするか我が受くる洗を受くることを能くするか」マトフイ廿の二十二しかれども主宰よ何故此處には誘惑に入らざらんことを祈禱すべきを

第五 説教

四〇

我等に命じ給ふか如何なる誘惑につきて之に入らざらんことを祈禱すべきを我等に命ずるか。

答 信仰に關係して誘惑に入らざらんことを祈禱せよ汝の心意の疑惑の爲に誘惑及び驕傲の魔鬼と共に誘惑に入らざらんことを祈禱せよ神の放任により汝が才智を以て思考したる悪なる意見の爲に汝に遣さるゝ顯然たる魔鬼の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ汝の貞潔の神使の汝と離れざらんことを祈禱せよ罪が汝に向て烈火の如き戦を起して汝を貞潔と分離せしめざらん爲なり他者に對して一者を怒らしむる誘惑或は其靈魂が大なる苦戦に引入らるべき忒心と懷疑の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ之に反して肉體上の誘惑は靈を全うして之を受くるに自から備ふべく全身全體を以て之を游渡るべく其目は涙に満たさるべし汝の守護者の汝より離れざらん爲なりけだし誘惑の外に於ては神の照管は窺ひ知られざるべく神の前に勇氣を得る能はざるべく神の睿智を學ぶ能はざるべく神聖なる愛の汝の心中に確立することも亦能ふべきなし誘惑の先には人は疎遠なる者の如く神に祈禱せんしかれども神を愛するにより誘惑に入り變心を自から許さざる時は神の前に立つこと恰も神を債務者とする者の如くなるべし何

となれば神の旨を遵奉し神の敵と戦つて之に勝てばなり視よ祈禱せよ誘惑に入らざらんが爲なりとは此を意味するなり且汝は高慢の爲に恐ろしき魔鬼の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ願くは汝が神を愛するにより神の力は汝に協力して汝は其敵に勝たん汝は其思念の邪なるが爲に此等の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ願くは神に對する汝の愛は試みられて神の力は汝の忍耐により頌讚せられん彼に光榮と權柄は世々に歸すアミン

第六 説教

主宰が尊威の高きより人間の弱きに降し給ふ仁慈の事及び誘惑の事

又汝は才智を以て透見するならば我等の主が其憐に準じ其恩寵にしたがひて處りつゝ肉體上の誘惑の爲にも祈禱すべきを命せしことは明なるべしけだし我等の性は塵にして且土なる肉體の故に在弱にして誘惑の中に在るときは之に抗する力あるなく隨て真理より離れ背走して艱難の爲に勝たるべきを知り祈禱する

第六 説教

四一

を命じ給ひしは、もし誘惑なくして神を悦ばすことを得るならば、我等は不意に之に陥らざらんが爲なり。然してもし人は高き道德に進行しつゝ、恐ろしき誘惑に不意に陥りて、堪へ得ずんば、是時に於て人は道德の完全に到り達する能はざるべし。

我等は自己の爲にも他人の爲にも、偏愛の心を有し、靈魂の生命の隠るゝ高貴にして、尊正なる行爲を怯心により放棄して、弱きを寛容するの教を口實とすることあるべからず。例へば祈禱せよ、誘惑に入らざらんが爲なりといへる教の如き是なり。けだしかくの如き者等のことは、誠命により竊に罪を犯すものと謂ふべし。故にもし誘惑が不意に起りて人を捉へんに、人は我が此誠命の一を破るならば、即貞潔若くは修道士の生活を棄て、或は信仰を棄て、或はハリストスの爲に闘はず、或は誠命の一を行はずして、之を棄つるを餘儀なくせられ、自から恐れを爲して勇氣にして誘惑に抵抗せずんば、眞理より落ちん。

今より我等は全力を盡して肉體を輕んじ、靈魂を神に托して、主の名の爲に誘惑と戦ふに着手せん。それイオシフを埃及の地に救ひて、貞潔の儀表と標準を彼に於て示し、ダニエルを獅穴に、三人の童子を火爐に守りて、彼等を無害ならしめ、イエレミヤを泥坑より救ひて、彼にハルデヤの陣中に於て憐れ賜ひ、ベトルを戸の閉されたる獄中より曳出し、パワルを猶太人の集會より救ひし者之を略言すれば、常に如何なる場所如何なる方面に於ても、其僕と共に居りて、其力と勝利とを彼等に於てあらはし、彼等を多くの非常なる境遇に守り、悉くの艱難に於て彼等に其救をあらはす者は、我等をも必ず堅めて、我等を圍む波浪の中より我等を救ひ給ふべし。アミン。

我等が靈中には、魔鬼と其衛卒に對して、マカワエ及び聖なる諸豫言者及び使徒及び致命者及び克肖者及び義人等の有したると同様の熱心あるべし。彼等は最困難なる誘惑の際に、神聖なる法律と靈的誠命を恐るべき方面に樹立し、世も身も背後に棄て、顧みず、其義を堅く守り、靈魂と共に肉體をも圍む所の危きに自から勝利を譲らず、勇氣にして之に勝ち、彼等が名はハリストスの來る以前に生命の書に記され、彼等が教は神の命によりて、我等の教訓と鞏固の爲に守らるゝこと、使徒の證する如し、ロマ十五の四、これ我等智なる者となりて、神の道を認識し、彼等と彼等が生涯のこの傳記を己の目前に有して、精神を勵まざるゝ活る模範となし、彼等を以て己の標準となし、彼等の路に由り進行して、彼等に肖るあらん爲なり。呼神聖なる言は、聰明なる靈魂の爲に、何ぞ美なるや、彼等は靈魂の爲に食たること、肉體の

爲に受けて之を支持する食と同じかるべし。且義人等の傳記は溫柔なる者の耳に慕はしきこと近頃植ゑたる植物を濕す不斷の灌溉と同じかるべし。ゆゑに至愛者よ元始より今に至る迄萬物が保護せらるゝ神の照管を心に懐抱すること弱き眼の爲に或る善良なる藥劑の如くすべく之が記憶は何れの時にも自から之を守りて之を熟考し之を慮りて己の爲に教訓を之より引出すべし汝は神の尊崇の大なるを念ふ記憶を其心中に守るに練習し其靈魂の爲に我等が主イエス・ハリストスに於る永遠の生命を得ん爲なり彼は神にして又人なるにより神と人々の間の中保者となれり彼の尊崇の寶座を繞る光榮には天使の各品も近づくあたはず然れども我等が爲に彼は卑微謙遜なる状態に於て現はれ給ひしこと

「イサイヤの言ふ如し曰く我等が見るべきうるはしき容なくうつくしき貌なしと

「イサイヤ五十三の二」性によればすべての造物の爲に見えざる者は肉體を衣て萬民の救と生命の爲に攝理を成し萬民は彼に於て清潔を得たり彼に光榮と權柄は世々に歸すアミン」。

第七 説教

自由なる罪と自由ならざる罪の事及び場合に依り犯す罪の事

自由に依らずして人の引入られ弱きによりて行はるゝ罪あり又自由に依り無知の爲に犯す罪あり之と同一他者は或る場合により又は久しく惡に止まりて之に染みたるにより罪を犯すことあり視よ是れ罪のすべての種類と状態にして此等は皆批責せらるべきものなりと雖も罪の爲に定められたる罰と之を比較するならば彼と此との輕重もあらはるゝなり或者は最大なる罪科に陥り辛うじて悔改に着手せん然れども或者の罪は赦さるゝに近しアダムとエワと蛇とは罪の爲に報を神より殘らず受けられど彼等が罪に服したる程度は極めて同じからざる如く彼等の子孫の爲にも亦然るなり各人の爲に罰の輕重は其意志と其の罪に傾く偏向とに相準するなりもし人は罪を助成する意志は有たされども道徳を等閑にし之を練習せざるが爲に罪に誘はるゝならばがくの如き者は罪に止まること

と重くして罰も亦重からん之に反して他の道徳に勉勵する者は何の罪にか誘はるゝならば其罪を抹殺するが爲に憐は彼に近きこと疑なし。

或は人が道徳に勉勵し活動して易はらざる者として顯はるゝ時犯す所の罪は之と同じからずけだし其慮る所の事の爲に毀損を受けざらんと苦心しつゝ夜は寝ねず晝は其重き鞭と其徳行の爲に慮るすべての苦心を何處にも自から負ふありと雖も此等の配慮の時に際し或は無知により或は其行路即徳行の路に何等か妨礙の起るあるにより及び何れの時にも其肢體に湧起する波浪により又は其自由を試みんが爲に許さるゝ偏重によりて其の天秤の盤が少しく左方に傾き肉體の弱きが爲に罪の種類の一に引誘せらるゝことありされば此時に於て彼は敵より起されたる災難により靈魂の爲に憂ひ悲みて痛く嘆息せん。

或は人が道徳の練修に弱く且緩慢なるを以てあらはるゝ時犯す所の罪ありこれ亦同じからず彼は道徳の路を全く棄つべく凡て有罪なる樂みに從ふに趨走すること僕の如く樂を極めん爲に其方法を求むるに勉勵すること或る從卒の如くして其敵の旨を力めて遂行し己の肢體を魔鬼の器械に備へてすべて彼に順ふの用意を爲すも悔改の事を思ひ道徳に近づき惡を絶ちて滅亡の途に終を置かんこと

は少しも慮らざるなり。

或は道徳の路に於ても義の途に於ても不意に起らんとする蹉跌と墜墮により犯す所の罪ありけだし神父等の言に依るに道徳の路に於ても義の途に於ても墜墮妨礙強迫及び其他の之に類するものに偶會するありと。

或は靈魂の墜墮と其のすべての滅亡と全くの自棄とありこれ亦別なり此等のもの、數に顯然として屬する者はもし之に陥るときは父の愛を忘るゝなかれもし彼は不義に陥りて多くの罪を犯すこともあらば善に勉勵するを息むるなかれ其進行を止むるなかれ然して再び勝たるゝ者も起ちて其敵と戦ふべく破壊せられし建築の爲に基を置かんことを日々に經始すべく自ら此世を去るに至る迄は豫言者の言を口に絶たざるべし曰くわが敵よ我につきて喜ぶなかれ我作るれば復起おがる幽暗に居れば主は我を照し給ふとミヘイ七の八篇して呼吸のある間は死に至る迄少しも戦を止めざるべく顛覆の時に至ても其靈を勝利に付すなかれさりながらもし其小舟は日々に破られ載貨は全く損害にかゝるある時も自から苦心し自から備儲したとび他借をなすとも他の大なる船に乗り移り希望と共に浮んで主が其苦行を眷み其挫折に憐を垂れ其惠を降し遣はして敵の火箭を迎へ

しめ之を忍耐するに強き勉勵を興ふるに至る迄は已まざるべし神より興へらるる
 睿智はかくの如く其望を失はざる賢なる病者は此の如し我等はたとひ或る行
 爲により罪せらるゝとも全くの自棄の爲に罪せられざらんゆゑに父なるマルテ
 ニアンは苦行の多きにより弱らざらん事と義の途に當り種々なる戦の屢々起る
 により逡巡するを爲さずして我等が爲に耻づべき状態を以て自から勝利を敵に
 譲る無らん事を勸諭すべし彼は或る慈父の如く端正整然たる秩序により通
 ぶること次の如し曰く子輩よ汝曹は實に道徳に進行する苦行者にして眞實なる
 心掛を有するならば汝曹の心意を淨めてハリストスの前に顯はし彼に悦ばるゝ
 行を爲さんことを願ふべしけだし汝曹は之を以て天然の嗜慾と此世の抵抗と汝
 等を常に攻撃して易はらず息まざる魔鬼の憎惡と其の悉くの詭計により起る所
 のすべての戦を忍耐せざるべからず戦の惨状の連綿として續くを恐るゝなかれ
 奮闘の久しきに亘るが爲に動搖を來すなかれ敵の軍備に弱はるなかれ寒心する
 なかれもし汝曹は一時蹉跌して罪を犯すことありとも絶望の淵に陥るなかれ然
 のみならずもし此の大なる戦に於て何の害をか受け面を打たれ傷を蒙むること
 ありとも之により汝曹の善良なる目的に進向するを少しも阻止するなかれ殊に

汝等が選擇したる行爲に止まりて此の願はしく且願すべき終りに達せよ即戦
 に於て堅固なる者となり勝たれざる者となり其傷の血に紅に染まる者とならん
 ことを期して如何なる方法を用ふるも敵と戦ふを能むるなかれ
 大なる老人の教訓は此の如し上文に述る所のものゝ爲に汝曹は弱り或は疲勞す
 べからず禍なる哉彼の己の約束を詐り其良心を蹂躪して魔鬼に手を貸し彼をし
 て汝等を小なる或は大なる罪の種類に引入れたるにより自から誇らしめ其靈魂
 の摧かれたる部分を以て敵の面前に再び立つ能はざる修道士よ彼は其朋友の清
 潔に達して互に相迎へんとする時彼等と途上に相別れて滅亡の途を辿り克肖者
 が神の前に有する勇氣をも又其清き心より出づる祈禱をも失ひしならば即天軍
 よりも高く上昇して願ふ所のものをうけ其の献げたる口に喜びと共に歸り來る
 に至る迄は如何しても自から禁せざるべき所のものを失ひしならば何の顔を以
 て審判者に謁見せんとするや而して最恐るべきはこゝに彼等と途上に於て相別
 れし如く光明なる雲の清潔を以て光り輝く體を其背に帯び去りて之を天門に立
 てんとする日に於てハリストスが彼を彼等と別つこと是なりけだし此處に於て
 彼等の行は最早定罪せらるべきにより悪人は審判に立つを得ず罪人は義人の會

に立つを得ざるなり聖詠一の五

第八 説教

衰弱して怠慢なる人々より己を守りて自省すべき
 事、彼等と親むにより怠慢と衰弱が人に主となりて
 種々なる不潔の慾に充たさるゝ事、放蕩なる思念を
 以て心を汚されざらんが爲少年と近づくより己を
 守るべき事

其口に人を議するを禁する者は其心を慾念より守らん然して心を慾念より守る
 者は時々主を見ん常に神を念する者は魔鬼を逐出し怨の種子を絶たん其靈魂を
 時々監視する者の心は黙示を樂まん其智の視覺を纏めて己の内部に集中する者
 は自己に於て靈的天映を見ん其智のすべての高超を惡む者は其心の内部に於て
 己の主宰を見んもし清潔を愛し之に由りて萬物の主宰を見るを得ば何人をも議
 するなかれ其兄弟を議する者に聴くなかれもし人が汝の前に於て争論するあら

ば耳を塞げ且其處より避けよ怒る者の言を聴かざらん爲なり且汝の靈魂は生命
 を奪はれて死せざらん爲なり激し易き心は神の奥義を容れず然れども溫柔にし
 て謙遜なる者は新世界の奥義の泉なり
 視よ清潔なるを得ば汝の内部に天ありて天使と其光とを自己に於て見るべく彼
 等と共に彼等によりて天使の主宰をも見ん當然に稱賛する者は害を受けざらん
 さりながらもし稱賛が彼の爲に樂くんば彼は報酬を要せざる行爲者なり謙遜な
 る者の實は其内部にあり是れ主なり其舌を畢生堅く守る者は竊み去られざらん
 沈黙する口は神の奥義を解釋すれども言に巧なる者は其造成者より遠ざかる善
 良なる者の靈は太陽よりも光り神聖なる黙示の現象を樂まん神を愛する者に從
 ふ者は神の奥義を以て富まされん然れども不義にして驕る者に從ふ者は神より
 遠ざかり其友に嫌はれん舌を黙する者はすべての外部に謙遜なる秩序を受け容
 易に慾を制せん不斷に思を神に潜むるにより慾は剷滅せられて敗走せん是れ慾
 を殺すの劍なり有形なる海の寂然として靜なる時は海豚躍りて浮游する如く心
 中の海に憤激と忿怒の情の寂然鎮靜して如何なる時にも心は愉快なるときは奥
 義と神聖なる黙示とは其中に躍らん己の内部に主を見んを願ふ者は不斷に神を

記憶するを以て、其心を淨むるに盡力す、かくの如くなれば其智力の眼の清明なるにより、彼は時々主を見ん。水より出る魚に有る所のものは神を念ふ記憶を脱して世事の記憶に漂ふ智力にも之あらん。人々と會談するに遠ざかれば遠ざかる程人は實に智力を以て神と談話するを賜はるべく、此世の慰を己より遠ざくる程は聖神により神の喜を賜はらん。魚は水の乏しきにより亡ぶる如く、神によりて起る才智の活動も世の人々と數々交際して時を送る修道士の心に消失せん。

世と生活上の爲に困む不幸の俗人は、俗人と共に時を送る不幸なる修道士より愈れり。燃ゆるが如くなる熱心を以て晝も夜も心に神を尋ね敵によりて起る攻撃の根を絶つ者は、魔鬼の爲に寒心せらるべく、神と其使等に大に望まれん。靈の清き者には其内部に思想の境ありて、彼處に照る太陽は是れ即聖三者の光なり、此境の住者が呼吸する空氣は撫恤者たる至聖の神なり、彼等と與に坐する者は、聖なる無形體の造物にして我等の生命と喜と樂とは是れ即ハリストスなり、光よりの光父よりの光なり、かくの如き者は其心の現象を毎時樂みて、實に太陽の光よりも百倍光り輝く美麗に驚かん、これぞ我等の内部に隠るゝイエエルサリムにして、且神の國なることは主の言ひ給ひし如し（ルカ十七の二十二）此境は是即神の光榮の雲にして、

たゞ心の清き者は之に入りて主宰の顔を見るべく、主宰の光の光線を以て其智を輝かさん。

之に反して激する者怒る者名を好む者貪慾なる者貪食する者俗人と交る者我意を遂げんと欲する者怒り易くして慾に満たさるゝ者、凡てかくの如き者等は夜間に闘ふ者と同様混亂の中に居る可く、生命と光の境域の外に在りて、暗黒を辿らん。けだし此域は善良謙遜にして其心を清めたる者の領分なり、人は外部にある如何なる美をも嫌ふて、之を醜視せざる間は、眼を擧げて直に神に向ふ能はざるべし、己を卑めて抑損する者に主は睿智を増さん、之に反して己を睿智なりと思ふ者は神の睿智より離る。舌を多言より制する程は、才智は照されて、思念を辨別せん、されど最思慮ある才智も多言の爲に亂されん。

世に屬する物に食しき者は、神に於て富まん、されど富者の友は神に於て貧しかるべし、貞潔謙遜にして言を放にするを嫌ひ、忿怒を心より逐ふ者は、余は之を保證す。祈禱に立つや直に其靈中に聖神の光を見るべく、其光を以て照し、輝く光耀の中に躍るべく、此の光榮の現象と其變化とを樂み、之を以て自己と比するに至らん。神に於る現象の如く汚鬼の群を黜くべきものは、他に之あらざるなり。

神父あり余に語るにこと次の如し曰く一日我れ坐じたりしに予の心意は現象の爲に捕へられたり而して己れに歸るや余は太く嘆聲を發せりされど我と對立する魔鬼は之を聞くや電氣に呑まるゝ者の如く恐れ何物にか透はるゝ者の如く切迫の餘り叫んで遁逃せり

此の生涯より逝ることを忘れずして此世の樂に戀々たるを自から抑制する者は福なり何となれば幾回か加増せられたる尊崇を自己の逝る時に受けて其尊崇は彼の爲に減少せざればなり彼は神により生れて聖神は彼の養育者たり彼は神の懷より生命ある食を啜り其馨香を嗅ぎて自から樂まんしかれども世に屬する物と世と其安息とに繋かれ世と談話するを愛する者は生命を奪はるべし予は彼のことに就ては一も言ふべき所なしたゞ慰むべからざる哀を以て涕泣號哭して聽者の心を傷ましむるあらんのみ

暗黒に居る者は首を擧げよ汝等の顔は光を以て照されん此世の慾の權下より脱せよ父よりする眞實の光は汝等を出迎へ其奧密の役者に汝等の鎖を解くを命せん汝等其光に追隨して父に進行せん爲なり哀哉我等は何を以て縛られ何物が我等に彼の榮を見るを妨ぐるか呼我等は鎖を切斷せられ尋ねて我等の神を見るを

得ば幸なり人間の秘密を知らんと欲し精神を以て之を洞察する迄には到り達せずとももし汝は賢ならば各人の語言と生活の狀態と其舉措とにより之を審知せん靈の清くして生活の狀態の無玷なる者は常に貞潔を以て神の言を發すべく其理會の度に應じて神聖なる事をも彼れ自己に屬する事をも判断せんしかれども慾に心を傷められたる者は舌も之により動かさるゝなりもし彼は靈神上の事を言はんを欲するならば不義にして勝を占めんが爲に慾の影響により判断せん賢者はかくの如きものを其初會の時に認め潔者は彼の惡臭を嗅がん

靈と體とが常に空談に耽りて才智の高超に任する者は淫者なり彼と相和して事を共にする者は姦通者なり而して彼と與に交る者は偶像崇拜者なり少年と狎近づくは淫行なり神は之を醜とすかくの如き人を和ぐるに樂なし之に反して同情により衆人を等しく愛して區別を立てざる者は完全に達せん少年少年の跡を追はし思慮ある者をして彼等の爲に泣き且哭せしめ然るにもし老人にして少年の跡を追はし少年の慾よりも更に臭なる慾を得ん彼は少年と道德の事を論ずと雖も其心は偽はる少年はもし謙遜の徳ありて沈黙する者ならばもし其心は美欲と忿怒より淨まりすべての人に遠ざかりて己を省みる者ならば怠慢なる老人の慾

を速に悟らん然してもし老人は老人をも少年をも一様に敬愛せずんば力を盡してかくの如き者と親與せざらんことを勉むべく殊に彼より遠ざかるべし。清潔の外貌を装ふて其裡面に己の慾を養ふ怠慢者は禍なり思念の清潔と善良なる生涯と舌の節制とを以て白髪に達したる者は此世に於ては認識の果の甘美を樂むべく肉體より出るときは神の榮をうけん。靈魂を聖にするが爲に聖神を以て修道士の心に吸収するの火を冷にするは人々に交ると多言と種々の談話とに愈るものあらずたゞ神を識るの認識を長じ神と親近するに助くる神の奥密の子等と談話するは此限にあらずけだしかくの如きの談話は生命の爲に心を覺醒し慾の根を抜きて汚穢なる思を睡らしむること悉くの德行よりも力あるなり。かくの如き者等を除くの外は友をも機密を共にする者をも己れに求むるなかれ恐くは其靈魂に眼を置き神の途より離れん汝を神と一致連合せしむる愛は汝の心に増々加はるべし、恐くは其原因と其終とは敗壞なる世俗の愛は汝を擒にせん。此の苦行者と共に居り共に交るは神の奥義に富まん之に反して怠慢なる者と懶惰なる者を愛するは互に才智の高超に任し腹を飽まで満たしめて度無からん。かくの如き者は友無くして食するを不愉快なる如く思ひ左の如く言はん。孤獨にして

己の餅を味ふ者は禍なり何となれば彼の爲に旨からざればなりと。彼等は互に宴會に招き之を以て甲は乙に報ゆること宛ら雇人の如し此の嫌はしき愛と此の不適當と不敬虔とに時を送るを我等より遠ざけよ。兄弟よかくの如きことに慣習せし者を避けよ。たとひ汝は餘儀なくせらるゝとも彼等と共に食するを肯んするな。かれ何となれば彼等が晩餐は嫌ふべく其側には魔鬼の侍するあればなり。新郎なるハリストスの友は之を味へざるなり。屢々宴會を設くる者は放蕩の鬼の奴隸なり。彼は謙遜なる者の靈を汚さん。無玷なる者の晩餐に供へたる低價なるパンは種々の嗜好によりて食事を爲す者の靈を清めん。貪食者の晩餐より發する香氣は食物と炙物の富にあり。愚にして思慮なき者は之に引誘せらるゝこと犬の肉店に引誘せらるゝ如し。常に祈禱に専らなる者の晩餐は麝香より發する如何なる香氣よりも香油より發する薰香よりも愉快なり。愛神者は之を願ふこと値すべからざる寶を願ふ如し。禁食して儼醒を務め、主の爲に勞する者の晩餐より生命の療法を借りて己の靈魂を死者の如くなれるより喚起すべし。けだし至愛者は彼等を聖にしつゝ、彼等の中に席坐すゆゑに彼等を苦むるの苦味は變じて言ふ可らざる甘味となり。靈界天上

の奉事者は彼等と其聖なる食物とを覆はん或る兄弟が其目を以て明に之を目撃したるは予の知る所なり。

己を造成者より離れしむるすべての奢侈の爲に其口を塞ぐ者は福なり憐みにより父の懷より出る生命の雨露を己の田中に見て目を彼に卑ぐる者は福なりけだし之を飲盡すときは其者の心は欣々として榮え歡び且樂まん己の食物に於て主を觀る者はすべての人より隠れ不當なる者と與にせずして獨り主を領食せん彼等の關係者とならざらん爲なり及び主の光線に照されずして了らざらん爲なり。

しかれども食物に致死の毒を混せられたる者は友なくしては愉快に食ふ能はざるべし腹の爲に親睦する者は死骸を食食する狼なり愚なる者よ汝に何の飽かざるありて怠慢者の晚餐に腹を充さん願ふか彼處に汝の靈は種々の慾に満たされん視よ是れ腹を制するを能くする者等の爲に豫戒なり。

禁食者の馨香は極めて愉快にして彼と面會するは思慮ある者の心を樂ましむるなりしかれども貪食者は彼と交るにより突然畏を生ずゆゑに彼は禁食者と共に食はざらんが爲にあらゆる方法を用ふ。

節制者の生活状態は神に愛せらる之に反して彼と隣するは貪食者の爲に甚だ苦

し。黙想者はハリストムに大に稱賛せらるしかれども心意の浮戯高超に偏して魔鬼の捕ふる所となりし者の爲には彼の近づくは愉快ならず謙遜にして溫柔なる者を誰か愛せざらん但驕傲なる者と惡言する者は然らずけだし彼の爲す所を忌むによる。

人あり自己の經驗により余に語れること左の如し曰く余は何の日にか何人となりとも談話を爲さん其日に於ては乾麴麴三顆或は四顆宛食す而して強て祈禱に起つや我が心意は神に向ひて勇氣を有せず思を彼に向はしむる能はざるなり然れども會談者と別れて黙想に入るや初日には乾麴麴一半を強て食し次日には一を食す然して我が心意の黙想に確立するや一顆の乾麴麴を強て全く食せんとするも能はずされど我が心意は強ひすといへども勇氣にして斷えず神と談話し神性の光輝は減少せずして我を照し我をして神聖なる光の美を見て之を樂ましむ然れども黙想の時に當り誰か來りて一時間たりとも我と言ふあるや其時は食に近づかざらんことも或る規則の或るものを廢せざらんことも彼の光を直覺するが爲に智力の弱らざらんことも予が爲に能はざるなりと見るべし我が兄弟よ忍耐と獨居とは如何に美はしく且有益にして苦行者に如何なる力と如何なる便

利を興ふるや神の爲に黙想を専ら務めて獨り自から己のパンを食ふ者は福なり、何となれば彼は常に神と談話すればなり。彼に光榮と權柄は歸す、今も何時も世々に「アミン」。

第九 説教

新進修道士の秩序及び規則及び彼等に適當なる行爲の事。

視よ清潔にして神に愛せらるゝ秩序は目を彼方此方に轉せしめて常に眼勢を前面に向はしむるにあり、閑話を爲さずして、たゞ必用なる事を言ふにあり、身體の要求を充たす爲には貧しき衣服を以て自から足れりとし、肉體を支持するに食物を益用すれども腹を悦ばすが爲にせず、すて少しく食ひ、此を輕んじて彼を撰ぶを爲さず、たゞ此の一を以て甘んじて腹を充たし、他を斥くるにあり、謹慎注意は何等の德行よりも上にあり、酒は汝に友のあらざる時或は疾病或は力の衰弱するあらざる時は味ふことなけれ、他が言はんことを欲するときには其談を遮るなけれ、答ふるこ

と愚者の如くなるなけれ、賢者の如く確乎なるべし、汝は何處にありとも己を衆人より小なる者と思ひ、且は其兄弟の役者と思ふべし、何人の前にも肢體の一をも露すなけれ、緊要なる理由なくんば誰の體にも近づくなけれ、又重要なる理由なくんば、人の汝の體に近づくをも許すなけれ、談話に放縱なるを避くること死を避くる如くせよ、睡眠の爲にも貞潔なる秩序を求め得よ、汝を守護する能力の汝に遠ざからざらん爲なり、汝は何處に寝ることも能くし得るならば何人にも汝を見ざらしめよ、何人の前にも唾を吐くなけれ、もし晚餐に坐する時、咳の出るあらば、其面を後に轉向けて咳をせよ、清潔にして食ひ且飲むこと、神の子に適當なる如くせよ。

汝の友の前に供へたるものを無遠慮に取らんとして手を伸ばすなけれ、旅行者あり、汝と共に居るときは、一度二度彼を招きて食せしめよ、秩然として卓上に供へ、不順序なるなけれ、肢體の一をも露さず、端正に且溫和にして坐すべし、欠の出る時は他の見ざるやうに口を閉ぢよ、けだし呼吸を止むれば、欠は過ぎ去らん、もし院長或は朋友或は門弟の室に入らば、己の目を守れ、彼處に在るものを見ざらん爲なり、しかれども、ごし思は強て之を促さば、己を省みよ、之に従ふなけれ、此事を爲すなけれ、けだし此事を爲して耻ぢざる者は、修道士の順序と此順序を我等に賜ひしハリス

トスに遠ざかるなり。汝の朋友の庵に於て器物を置ける場所に注目するなかれ。自己又は其朋友の室の戸は靜に開閉せよ。何人の室にも突然に入るなかれ。外より戸を叩き許を得て其後敬んで入るべし。

汝を急がしむる緊要の事なくんば、歩むに惶急するなかれ。すべて善なる行は衆人に順ふべし。たゞ貪欲者或は貪銀者或は世に耽る者には従ふなかれ。恐らくは邪なる行爲をなさん。すべての人に對し温和に談話せよ。すべての人を貞潔を以て見よ。何人の顔をも飽くまで凝視するなかれ。路を行くに、汝より年長なる者を追越すなかれ。もし汝の友が後れたるときは、少しく前に避けて待つべし。斯く爲さざらん者は無智者なり。法のあらざる豚と相類す。もし汝の友が途に遇ふ者と談話を始むるときは、彼を待ち急がしむるなかれ。健康なる者は病者と時に先だちて言ひ、要求する所を遂げしむべし。

過失は如何なりとも、何人をも責むるなかれ。却て己を以て全く責をうくべき者と、思ひ罪の原因者と思ふべし。何等の賤しき事をも謙遜を以て爲し、辭するなかれ。避くるなかれ。もし笑はざるを得ざるあらば、齒を外に露はすなかれ。もし婦人と言はざるべからざることあらば、己の面を彼の眼勢より避けよ。かくの如くして彼と談

話せよ。修道女より遠ざかり、修道女と出會談話し及び其面を見るより遠ざかること。とは火に遠ざかる如くし、魔鬼の網に遠ざかる如くせよ。汝が神を愛する愛情の其心に冷ならざらん爲なり。及び慾念の泥を以て其心を汚さざらん爲なり。もし彼等は汝の爲に骨肉の姉妹たりとも、彼等の爲に用心すること、他人の爲に用心する如くせよ。親屬と近接するを自から警めよ。汝の心に神を愛するを冷にせざらん爲なり。少年と放談し及び面會するを避くるは、魔鬼と親むを避くる如くせよ。たゞ彼の神を畏れて常に己を省み、貧うして己の房中に居れども、神の奧義に富める者を唯一の會話者となし、奥義の共談者となせ。己の密事と行爲と職とをすべての人に秘せよ。極めて緊要の外は誰の前にも露頭にして坐するなかれ。緊要なる用事を執行ふには、貞潔を以て着手すること。汝を守る天使を敬ふ者の如くせよ。而して神を畏るゝ心を以て事を完成すべし。たゞひ汝の心に樂しからずとも、死に至る迄己を此に強ふべし。

たゞひ汝の母たり或は姉妹たりとも、婦人と共に食せんよりは、致死の毒を受くるは、汝の爲に愈れり。たゞひ骨肉の兄弟たりとも、少年と同衾して寢ねんよりは、蛇と共に居るは、汝の爲に愈れり。路を行くに、年長者の中誰か汝に告げて「行け歌はん」と

言はゞ之れに従へよ。もし告ぐるなくんば舌は黙すとも心を以て神を讚美せよ。何人も何の爲にも逆ふなかれ、何人とも争ふなかれ、誰の爲にもなかれ、汝の主神の名を以て辱ふなかれ、侮られよ、自から侮るなかれ、辱しめられよ、自から辱しむるなかれ、靈に屬するものが害を受けずんば、體と共に體に屬するものは、寧ろ之を亡ぼさん、誰とも訴訟するなかれ、汝は不當に裁判せらるゝも、判決せられたるをば忍耐して受けよ、世に屬するものを心に愛するなかれ、治御者と首長に順ふべし、而して彼等と近く相交るを禁せよ、何となれば是れ怠慢者を滅亡に捕ふる網なればなり。

己の腹を充たさんと盡力する貪欲者よ、治御者と首長たる者の炙物よりも熱炭を己の腹に投ずるは、汝の爲に愈れり、衆人に厚情を注ぎ、すべてに溫和なるべし、己を多言より守れ、けだし多言は神によりて起る思の感動を心中に打消さん、好んで人を教ふるを避くること、人々に跳着く獅子を避くる如くせよ、此事の爲には、教會の被教育者とも他の人々とも會するなかれ、怒り易き者、或は争を好む者等の衝を過るなかれ、恐らくは汝の心も忿怒に満てられ、汝の靈は誘ひの暗黒に占領せられん、驕傲なる者と共に居るなかれ、恐らくは聖神の作用を汝の靈より奪はれて、其靈は種々なる惡慾の住所とならん、人よ、汝は此豫戒を守り、神を思ふを常に練習するなら

ば、汝の靈はハリストスの光を實に自己の中に見て、永久に暗まされざらん、ハリストスに光榮と權柄は世々に歸す、アミン。

第十 説教

聖なる人々の記事及び彼等が聖なる訓言と奇異なる生涯。

一日、予は庵を離れて一の聖なる兄弟を訪ひけるが、不快の爲に彼と共に一所に宿りぬ、彼れ幸に予の爲に周旋せんが爲なり、何となれば彼處に予の相識は一もあらざりしによる、然るに予は此兄弟が夜間時に先だちて起き、諸兄弟の模範となるべき習慣を有するを見たり、彼は時の多きを以て聖詠を唱ひけるが、其唱ひ續くる間に俄に規則を止めて、其面を俯し、恩寵が彼の心を燃せる熱切と共に地に頓首すること、百餘回に至りぬ、其後起ちて、主宰の十字架に接吻し、新に叩拜して、同く亦十字架に接吻し、而して再び其面を俯せり、かくの如き慣例を彼は終世守りぬ、彼が膝を屈むるの多き予は算すること能はず、然り此兄弟が毎夜重ねたる叩拜を誰か能く

數へんや、敬虔と熱切と虔恭を以て融和せられたる愛により、十字架を接吻すること二十回にして更に又聖詠を唱ひ始む。然れども或時は其熱愛に烈しく燃されたる思の大に熱するにより、此の火焰の焼くに堪ふる能はざるや、喜びに勝へざる彼は自から禁ずる能はずして叫びぬ。是に於てか予は此の兄弟の恩寵と苦行と神の勤めに於る覺醒とに大に驚けり。然るに朝に第一時の後に至り讀まんと欲して坐するや、彼は囚人の如くなりき而して其讀み續くる各章の間に一回ならず面を俯し多くの句毎に手を天に擧げて神を讚美せり。彼は生れて四十歳なりき彼は食を用ふることに最少量にして且は全く乾萎たるものなりき其身體は之を強ふることの度と力とに過る屢々なるにより宛ら影の如くなりき故に多く食せざるが爲に衰へし彼の面の二の指程もあらざる如く瘦せたるは予の憐憫を惹起せり故に予は屢彼に告げて言へり兄弟よ汝の苦行に於て自身をも惜み又汝が求め得たる此の善なる生涯をも惜めよ靈の連鎖とも云ふべき汝の此練習を亂すなかれ之を絶つなかれ幾分か勞を増さんとの願により其途の進行を減殺するなかれ之を全く止むるなかれ適度に食せよ恐らくは食し能ふ力を奪はれん力に超えて足を伸すなかれ恐らくは全く用立たざるものと爲らんと彼は憐み深く最溫柔にして善

心を以て矜恤を爲せり生れながら潔白にして謙に順ひ神に依て智なる彼は其潔白の爲又其善心の爲に衆人に愛せられたりきもし兄弟が彼を要するあれば兄弟と共に勞して三日或は四日に至ること度々なりき其後退て暮より暮に至る迄時を全く己の庵に送りぬけだし何等の工作にも器用なりき然るに獲たるものあるときはたとひ其物に乏しくなりたりとも多き少きに拘はらず大に重要視するに より其物を有せずと言ふこと能はざりき兄弟と共に働くときは耻づる如くにして之を爲し庵より出づることは自から慊しとせざるも己を強ゆること度々なり。實に奇異なる此の兄弟の生涯と舉動とはかくの如くなりき我等の神に光榮は世々に歸すアミン。

第十一 説教

高老なる老人の事

他日予は又一の老人を訪へり高老にして且美なる有徳の人なりき彼は甚だ予を愛しけるが言語は野なれども知識は光明に心は深遠にして恩寵の暗示する所の

ものを言へり彼は聖なる勤行の外は庵より出づることを屢々せず己を省み静黙して居れり時に予は彼に告げて言へり曰く父よ予は主日に聖堂の支那に至り彼處に坐して朝早く食し出入する人々に我を見て卑んせしめんを欲すと老人は此に答へて予に告ぐることを左の如し録して言へり凡て世人の惑を爲す者は光を見ざらんと汝は此地方に於て誰にも知られず汝の生涯を人々は知らずゆゑに言はん修道士は朝より食事すと殊に此處の兄弟は新進者にして其意思薄弱なり彼等は多く汝を信じ汝によりて自から益しつゝあるにもし汝が此事を爲すを認むるならば害を受けん古の神父等は其行ひし多くの奇跡の故に人々が彼等に尊敬を表はしたると其名を讃揚したるに因りかくは行爲したれど此を爲せしは己を汚辱に陥れ其行爲の榮を隠して驕傲の因を己より遠ざけん爲なり之に反して汝を之と同様の舉に出でしむるは何物なるかすべて行爲に秩序と其時とあるを知らざるか汝は如此の行爲と如此の名とを有せずして他の兄弟と同様生活す汝は己れに益を産せずして他を害せん且かくの如きの動作は悉くの人に益あるに非ずしてたゞ完全なる者と大徳なる者に益あり何となれば此は常識を離れたる行なればなり然れども僅に中間に達したる者と新進者の爲には此は害あり何と

なれば大に戒心して常識に従ふべき必要あればなり老人は警戒の時を既に過ぎたればたゞ其欲する所に從て益を引出さんげだし未熟なる商賈は大なる運轉の爲に自から大なる損失を速かん然れども些少なる運轉には速に前進して成効せん己に言ひし如く凡ての行爲に其秩序あり生活の凡ての種類に時の有るあり其度に超えたることを時に先だちて始むる者は何も獲る所あらずしてたゞ己の爲に害を倍さんもし此事は汝の爲に願はしくば神の照臨に依り汝の望に依るに非ずして汝に及ぶ所の汚辱を喜んで忍耐せよ心を擾すなかれ汝を凌辱する者に對して怨を懐くなかれ」

予は猶一回此の感謝すべき人と談話せり少壯より晩年に至るまで自から己れに任じたる勞の爲に生命樹の果を味ひし彼は道德の教訓を多く予に授けて更に左の如く言ひき曰く凡て體を苦めず心を憂へしめざる祈禱は流産したる胎實と一般なり何となればかくの如き祈禱は自から精神を有せざればなりと彼は又余に告げて曰く自説を立てんと欲し智は偽りて心に耻を感せざる議論好の人には何物をも與ふるなかれ又何物をも全く彼より取るなかれ恐らくは汝が大なる辛勞を以て得たる淨潔を自から遠ざけて其心に暗黒と擾亂とを滿たしめん」

第十二 説教

他の老人の事

何の時なりしか予は一の神父を其庵に訪へり聖者は誰が爲にも戸を開くことを屢々せざりきしかれども予の至るを窓より認むるや予に告げて言へり入らんと欲するかと予は答へり然り貴き父よと然して予が入りし後祈禱を行ひて我等は種々の談話をなしけるが終りに臨み予は彼に問ふて言へり父よ予は如何にすべしかか或者等予を訪ひ來れど予は何も獲る所あらず彼等の談話より何の益をも引出さず然れども彼等に告げて來るなかれと言はんことは予は自から耻づ彼等は予が通常の規則を行ふを妨ぐることさへ度々之あり故に予は之を哀むと福なる此の老人は予に此に答へて下の如く言へりかくの如く閑散を好む者等の汝に來るあらば其暫く坐するや祈禱に立たんとするの状を彼等に示せ而して叩拜して告げて言ふべし兄弟よ我等は祈禱せんげだし予が爲に規則の時已に至りぬ之を破ること能はず他時に之を行はんことは予が爲に心苦しくしてこは予の爲に擾

亂の因となるゆゑに極めて必要の事あるにあらずば規則を棄つるあたはずされど今は予が祈禱に換ふべき已むを得ざるの事あるなしとかくの如く言ふべし此事なくして彼を汝と共に祈禱せず去らしむるなかれもし祈禱せよ我は去らんと言はば彼に叩拜し告げて言ふべし愛の爲に此の一祈禱なりとも我と共に爲し給へ予は汝の祈禱により益を受けんともし彼等止る時は汝の祈禱を通常よりも長く行へ彼等をかくの如く待遇せば其汝に來るや汝の寛縱せざると閑散を好まざるとを知り汝の彼處にあるをきつて其所に近づかさらん
ゆゑに憤めよ恐らくは汝は偏愛により神に屬するの行爲を破らんされどもし或る神父又は疲れたる旅行者の來るあらばかくの如き者等と暫く居るは汝の爲に長き祈禱の代りとならんされどもし其旅行者は閑談を好む者の一ならば出來るだけ彼を安んじ平和にして去らしむべし
或る神父は言へり曰く或者等庵中に於て工作に従事するも自己の規則を弛べず執行して擾亂せざるを得べしといふを聞き予は之を怪む彼は又驚くべき言を發していへり曰く實に言はん予は水濱に出づるならば我が慣習と其順序とに錯亂を感じ理性を成全するの妨げを覺ゆ

第十三 説教

或兄弟の間

同神父は曾て或兄弟の間を受けたり曰く予は如何にすべきか予に或る物品のあり或は劣弱の爲或は行事の爲或は他の或る理由により之に必要を有すること毎々なり此物なくんば黙想に居る能はずしかれども予は或者の之に必要を有するを見て同情の念に耐へず此物を以て彼に與へ又或人には請はるゝにより與ふることも屢之ありけだし愛も誠命も之を餘儀なくせしめて我自己に必要なるものを譲らしむるなり然れども其後予が爲に此物の必要なるは予を思念の不安と擾亂とに陥らしめ予が智力を黙想のことを慮るより引誘し去るのみならず黙想を棄て行て同物品を捜すを餘儀なくせしむるなりたとひ忍耐して黙想を失はざるを得るとも予は大なる憂と思の擾亂の中にあり故に予は何れを擇ぶべきを知らず或は兄弟を安んせしむるが爲に予の黙想を解除して之を中止するを爲すべきか或は彼の願を輕んじて黙想に専なるべきか

老人は之に答て次の如く言へり曰くもし矜恤或は愛或は慈悲或は其爲す所は神の爲にすと認めらるゝ或事が汝の黙想を妨げ汝の眼を世に轉せしめ汝を不安に陥れ汝が神を記憶する念慮を暗まし汝の祈禱を寸断し思念の擾亂と紛消を汝に生せしめ神聖なる讀經を勉むるを止め心意の高超より救はるべき此器械を棄て汝の戒心を滅し汝が此時に至る迄檢束せられしを自由自在に往來するを始むるに至らしめ獨居に入りたるを人類社會に歸らしめ群むられたる慾念を汝に惹起し汝の五官の節制を解放し世に死したる汝を世の爲に復活せしめ汝の爲に唯一の慮なる天使的行爲より汝を貶黜して俗人の側に立つるならばかくの如きの義は亡ぼす可なりけだし肉體上の安きを與へて愛の義務を遂行するは世の俗人の行なり然れどももし修道士の行ならばこは黙想に専らなるに非ざる不充分なる者の行或は黙想を以て同心の共住と合したる者の行にして彼等は不階に入り且出づるなりかくの如き者等の爲にはこは美にして嘆賞すべき行なり之に反して身體を以ても智力を以ても世を離れたる遁世的行爲を實に己の爲に撰擇して其意を獨居の祈禱に決し凡て過去の爲此世に屬する物を觀るが爲及び之が記憶の爲には死者の如くなりし者かくの如き者の爲には肉體に屬す

るものと顯然たる行の義之を以てハリストスの前に義とせられんが爲に爲すを勤めずして使徒の言ふ如く地にある肢體(コロサイ三の五)を殺し淨潔にして無玷なる思念の祭をハリストスに献げて自己を開拓したる初實の果となし未來の望の爲に肉體の愛を犠牲にして危きを忍耐するは當然なりけだし修道士の生涯は天使の生涯と同尊なりされば天上の行爲をすて、浮世に屬するものを持つるは我等に不適當なり我等が神に光榮は世々に歸す「アミン」。

第十四 説教

詰責を受けたる一兄弟の事

嘗て一兄弟あり矜恤を爲さざるを詰責せられけるに彼は其詰責者に自由にして答へ敢て言へり曰く矜恤を行ふことは修道士の爲に立て、義務とせられずと然るに詰責者は之を駁して下の如く言へり矜恤を行ふを修道士の爲に立て、義務とせられざることは顯然明白なりけだし録して言ふ如く露面を以てハリストスに告げ「視よや我一切を捨て、汝に従へり」マトフェイ十九の二十」と言ひ得る者に

は之を義務とせられざるなり即地上に何物をも有せず肉體に屬するものを務めず有形上の事には一も考を及ぼさず何を獲るをも慮らずしてもし誰か彼に何物をか與ふるあればたい其必要に迫る丈取り必要の外は之を無視して實に鳥の如く生活する者かくの如き者には矜恤を行ふを義務とせられざるなりけだし自ら自由なる者は如何して他に與ふるを得んや之に反して浮世の事に引かれ自己の手を以て操作して自から他より取る所の者は殊に矜恤を行はざるべからずもし彼は矜恤の事を慮らずんば此無慈悲は主の誠命に反すけだし誰か神に奥密に近づかず靈を以て神に勤むるを能くせざるのみならず己の爲に爲し得べき顯然の行をも慮らずんばかくの如き者等は己れに生命を得る何の望ありやかくの如き者は無智なり。

又他の老人あり言へり曰く他人を肉體上の事に安んせしめんが爲に自己の黙想の行爲を擾す者を怪むと又言へり曰く我等は黙想の行爲に他の如何なる慮をも混すべからずすべての行爲は各々其位地に於て尊敬せらるべし我等の品行に汚點を有せざらん爲なりけだし多くの事を慮る者は多くの事の僕なり之に反して一切を棄て、靈魂の齊整を慮る者は神の友なり視よ矜恤を爲し近者に對し肉體

上の必要を満足せしめて愛を遂行する者は世に多し然れども公道にして且最美はしき黙想を務め思を神に擧ぐるを務むる者は寥寥として僅に見ることを得べし世に矜恤を行ひ或は身體に關する事に於ては義を守る者等の中黙想を務むる者が神より與へらるゝ賜の一なりとも得たる者之ありやと彼又更に言へり曰くもし汝は俗人ならば世の幸福を樂んで時を送るべし之に反してもし汝は修道士ならば修道士の卓越なる行爲を以て己を飾るべし然れども汝は彼と此とを占有せんと欲するならば彼も此も失はん修道士の行爲は次の如し形體に屬するものより免るゝ自由なり祈禱に於て身體を勞するなり神を不斷中心より記憶するなり汝は此等の行爲なくして世の道德に満足するを得るか自ら判断すべし。

問 黙想に於て苦む修道士は二種の要務を有する能はざるか即神を思念すること、他の慮を心に有すること是なり。

答 予は思ふ黙想に時を送らんと欲する者は一切を棄てゝ獨り己の靈魂を慮るのみならず己を世慮の外に置くといへども瑕疵なくして黙想の行爲を治むること能はず矧や他人の事をも慮るに於てをや主に勤めて主の子輩の爲に掛慮する者を主は世に留めて主の前に勤めんとする者等を自から選び給へりけだし官位

の等級を誌し常に王の面前に立つて其機密に參する者等は外部の務に従事する者等より光榮なることは此世の王に於て之を見るのみならず天の王の行爲に於ても見るを得べし即祈禱を不斷務めて王の會談者となり其機密の參與者となりて天上地下の富を賜はりすべての受造物に對して己の權を説ばくか顯はす者は彼の己の所有と此世の幸福とを以て神に勤め最重要にして且太だ美しき善行を爲して神の意に適する者よりも如何なる勇氣を受くるかゆるに我等の取りて繼と爲すべきは神に屬する行爲に尙不充分なるを免れざる後者にあるに非ずして苦行者と戰士とにあり彼等は其生涯を美しく完備し此世に屬するものを一切棄てゝ天國を地上に開拓し地に屬するものを一次永遠に棄擲して天上の門に手を伸ばしたりき。

我等が爲に此生涯の路を啓きたる古の諸聖人は何を以て神意を悦ばしたるかたとへば諸聖人の中フイアウエイのイオアンの如き此の徳行の寶にして此の豫言の泉なる者は何を以て神を悦ばしたるか隱舎の内に在りて兄弟を肉體の要求に安んせしめたるを以てしたるか或は祈禱と黙想とを以てしたるか前者を以てするも多くの者が神意を悦ばしめたるに予は反論せざるべし然れども祈禱と一切を棄

つるを以てしたる者の如きにはあらずけだし黙想に居り之を以て頌揚せらるる者により其兄弟等に明々なる助あればなり即窮乏の時には我等に言を以て助け或は我等が爲に祈禱を献する是なり然れども此事の外にあるものはもし或者の爲に慮る此世の事に關するの記憶又は其配慮が黙想を務むる者の心に宿るならば是れ神的智慧の行にあらずけだし黙想を務めずして黙想の外に生活する者には告げて言へりケサリものをケサリに納め神のものを神に納めよとマトフエイ二十二の二十一即各々己に屬する者を納め近者に屬するものは近者に神に屬するものは神に納めよといへり天使の位に居る者即靈魂の事を慮る者には何か此世に屬するものを以て神を悦ばすべきを誠命せられず即工作の事を慮り或は一者より取りて他者に與ふることを誠命せられざるなり故に修道士は其心意を動搖して神の面前に立つより引下ぐべき如何なる事をも慮る可らざるなりしかれどももし誰か反論して神聖なる使徒パウエルを提出し彼は自己の手を以て操作し矜恤を爲したるに非ずやといはゞ其者に告げて言はんパウエルは獨り萬事を爲すを能くせり然れども我等は彼の如くすべてに堪能なる他のパウエルの有るを知らずけだし此の如き他のパウエルを我に示せ然らば汝を信せんと且神の照管

によりて成る所のものは之を一般の行爲の儀表と爲すべからずけだし福音を傳ふるの行爲と黙想の務とは各異なりもし汝は黙想を守らんと欲するならば此世の事を一も慮らざるヘルワムの如くなるべし汝と神とを除くの外地上に汝の慮るべき他者あるを思はざること汝に先だち神父等の教へし如くすべしもし誰か自己の心を頑にせず其仁心を力めて遮るを爲さずして神の爲にも或る生活上の事の爲にも凡て地に屬するものを慮るより遠ざからんも其の定められたる時に一の祈禱を守ること能はずんば擾亂と費心を免れ自由にして黙想に止まる能はざるべし

ゆゑに道徳の名の下に何事にか關係せんとする思の汝に生ずるあり之を以て汝の心中にある穩靜を擾すあらば其の思に告げて言ふべし愛の途は美はし慈悲の行は神の爲に美はし然れども手は神の爲に此を欲せずと一の修道士あり言ふ父よ止まり給へ神の爲に急ぎて汝に追着かんと然るに彼は答へていへり我も神の爲に汝より逃げん父アルセニイは靈益の事をも他の何事をも神の爲に誰とも談話せず他人は神の爲に終日談話し其來れる旅行者を悉く受けたれども彼は之に代へて無言と黙想とを選び此に因り彼は現生の海中にありて神聖なる神と談話

し黙想の舟に乗り大に穩静にして此海を渡りしは此事を神に質したる苦行者等の明に知れる如し視よ黙想の法は一切の爲に黙するにありしかれどももし黙想到に於ても擾亂に満たさるゝ者となり身體は操作の爲に靈魂は或者の事を慮るが爲に擾さるゝならば其時は神を悦ばしめんが爲に多くの人の事を慮りつゝ如何なる黙想をか送るべき自から判断すべしけだし一切を棄つるなく何等の慮よりも遠ざからずして黙想の行爲に進歩を見るを得んとは言ふも耻づべきなり我等の神に光榮は歸す。

第十五 説教

黙想の種々なる卓越の事、智の權の事及び祈禱の各種類に對して智は其活動を起すに幾何權あるか、祈禱には如何なる界限を天然に與へらるゝか、汝は如何なる界限迄祈禱を以て願ふの權あるか、其界限を越ゆれば汝が行ふ所は祈禱と名づけらるゝと雖最早

祈禱には非ざる事

光榮は其賜を豊に人々に注ぎ給ひし者に歸す、彼は有形なる者をして無形なる者の天然の秩序により彼に事ふるを得しめ塵に屬する者の天性にかくの如き奧義を語るを許し給へり、殊に彼は我等と同様罪ある人々が此の如く語るを聴くだに堪へざる時は其恩寵を以て我等が心の盲を開き、聖書の研究と大なる神父等の教により之を了解せしめ給へり、けだし予は自己の手を以てあらはせるものゝ千分の一をも自己の苦行に因り實驗的に確知するに堪へざるなり、況や汝等及び凡て讀者の心を喚起し且之を照明せんが爲に述る所の此文に於てをや、望むらくは人を奮起して之を渴望し、實行に着手せんことを。

祈禱的悦樂と祈禱的直覺とは各同じからず、後者の前者より一層上なることは完全なる人の不完全なる童子より上なるが如し、或時は詩の句の口に甘くして、祈禱に於て一句を誦すること、が歡ぶべからざる程、續き他句に移るをゆるさずして、祈禱する者の飽くを知らざることあり、然れども或時は祈禱により成る直覺を生じて、口頭の祈禱を斷ち、直覺によりて祈禱する者の身體麻痺して、駭異することあり、かくの如き状況を我等は名づけて祈禱的直覺と曰ふ、然れども之を名づけて形

状又は式様とはいはず或は又愚者の言ふ如く空想的幻像ともいはざるなり而して又此の祈禱的直覺にも程度と其賜の等差とありて猶是れ祈禱なり何となれば智力が最早祈禱の有らざる處に侵入して祈禱より上なる情況に在るにあらざればなりけだし祈禱に於て舌と心の動くは關鍵なりされど是より後にあるものは最早密室に入るなり。こゝには何等の口も何等の舌も黙すべし心即此の思念の指揮者も智力即此の感覺の統御者も意思即此の疾く翔りて耻を知らざる鳥も黙すべく其の悉くの機謀は廢すべし。こゝには尋ねる者も止まるべし何となれば家宰が來りたるによる。

第十六 説教

清潔なる祈禱

神が人々に與へ給ひし律法と誠命のすべての力は神父等の言ふ所によれば心の清潔を以て限度と爲すかくの如く人々が神に懇求する祈禱の悉くの種類と形狀も清潔なる祈禱を以て限度となすなりけだし慨嘆も屈膝も中心の願求も最愉快

なる喚呼も祈禱の悉くの種類も我がすでに言ひし如く清潔なる祈禱を以て限度となしてたゞ此祈禱に至る迄發展するの力を有するのみなりしかれども祈禱の清潔より内部の清潔に達して思が此限度を越ゆるときは祈禱も活動も涕泣も權も自由も願求も希望も此生涯又は來世に望む所の或物を樂むことも最早之あらざるべし。すべて祈禱の活動と祈禱の悉くの種類はたゞ自由の權を以て智力を此界限まで導き到らしむるのみなり隨て祈禱に於る苦行も之が爲なり然れども此界限の後にあるものは最早駭異にして祈禱にはあらず何となればすべて祈禱に屬するものは止み或る直覺の到るありて智力は祈禱を以て祈願せざればなり。凡て行はるゝ所の祈禱は如何なる種類にても活動に依りて行はる然れども智力が靈的活動に入るならば彼處には祈禱あらざるべし祈禱と直覺とは其始を互に自から相借るといへども祈禱は別にして祈禱に於る直覺は亦別なり祈禱は種子を播くなり直覺は穀束を集むるなり此時に方りて穫る者は言ふ可からざる現象の爲に駭異すること恰も其播く所の小なる裸體なる粒よりかくの如き美なる種類の俄に其前に成長したるを見るが如くならんされば彼は自己の爲す所に於ては何等の活動もなくして止まらん何となれば凡て行はるゝ所の祈禱は或は願求或

は感謝或は讚榮を置むる所の祈願なればなり然れども智力が此の界限を超えて彼の範圍に入るときは此等の祈禱の種類の一もあるべきにや何等の願求あるべきにや深く意を留めて研究せよけだし予は此事を以て眞實を識る者に質さんとするさりながら此の思慮判断は悉くの者に之あるには非ずしてたゞ此事の親見者となり及び役者となりし者或はかくの如き神父等に學びて彼等の口により眞實を認識し此等の事の討求に生命を送りし者にあるのみなり

誠命と凡て律法に屬するものとを僅少の欠點と共に遂行して心の清潔に達せし者は數千人中僅に一人のみならんかくの如く大なる戒慎により清潔なる祈禱に達し此の界限を突破して彼の奧義を受るを賜はる者は千百人中一あるのみならん何となれば多くの者は如何しても清潔なる祈禱を賜はる能はずして賜はる者は甚だ寥々なればなり然れども最早此祈禱の後にある所の奧義に達したる者は世々代々の中神の恩寵によりて僅にあるのみなり

祈禱は或事の祈願及び配慮にして又或事の願望なり例へば現在或は將來の誘惑より救はれんこと願望或は諸神父の業を嗣がんこと願望耳は人が神より助を得んこと祈願是なり祈禱の活動は此等の活動を以て限らるゝなり然れども

祈禱の清潔なるも清潔ならざるは係る所左の如しそれ我等が已に述べたる活動の一をさゞげんが爲に智の豫備せらるゝ時に當り何か外の意味又は何事の爲にか安んぜざる心の之に混するある時は此祈禱は清潔なるものと名づけられざるなり何となれば智が主の祭壇に即心に即此の靈界なる神の祭壇に淨潔なる犠牲に依りて献せらるゝに非るはよる然れどももし誰か神父等が靈的と名づけたる此祈禱の事に論及し神父等の言の意味を了解せずして此祈禱は靈的祈禱の域中に入ると言ふならば予は思ふ若し此意見を更に緊密に穿鑿するならば是れ何人をか惡しく言はんとするものにして靈的祈禱は全く曲げられんけだし曲げらるゝ祈禱は靈的祈禱よりは更に低しすべて靈的祈禱は活動を免れて自由のものなべし然るをもし誰か清潔なる祈禱を以て僅に祈るあるや之を以て靈的祈禱と言ひ得べきかすべて善良なる活動と靈的行爲に祈禱の名を附することは聖神父等には常なりき且たゞに神父等のみならず凡て認識を以て照明せられたる者等にも凡の美なる行爲を以て祈禱と殆ど同一視することは常なりき然れども祈禱は別事にして行ふ所の行爲は又別事なること顯然なり時として此の靈的祈禱と稱するものを或る處には路と名づけ他の處には認識と名づけ又別の處には智

的觀察と名づくることあり靈的なる目的物の稱呼を神父等如何に變更するを見るか蓋し名稱の的確なる意味は此世の物には一定せらるれど來世に屬する物の爲には確實眞正なる稱呼の下すべきあらずして之が爲にはすべての名稱と凡て合成的なる起初状態色相及び悉くの綜合的名辭よりも一層上なる一の單純なる認識あるのみなり故に靈的認識が有形世界より上に昇せらるるときは神父等之を示すが爲に欲するまゝなる稱呼を適用すべし之が爲に的確なる名稱を識も知らざればなりしかれども心靈上の思想を此認識によりて證明せんが爲に彼等は名稱と喩言とを用ふること聖ディオニシイの言ひし如し曰く感覺の爲には喩言と語法と適當なる名と辭とを使用すしかれども靈魂が神の働によりて精神に屬するものに移さるゝ時は感覺も實驗も我等の爲に無用なり是れ猶靈魂が測る可からざる合一に依り神性に似たるものとなり其活動に於ては最上なる光の光線を以て照さるゝときは靈魂の爲に精神の力も無用なると同じかるべし。

終りに兄弟よ智が其活動を識別し得べき力を有するはたゞ清潔なる祈禱の界限迄なるを信すべし既に彼處に達して後戻せず或は祈禱を止めずんば祈禱は其時に心的祈禱と靈的祈禱との間にある中間者に似たるあらんされば智が活動の中

にある時は智は心的範圍にあれどももし彼の範圍に入るならば祈禱も止まんげだし諸聖人が來世に於て其智を神の爲に吞まるゝときは祈禱を以て祈願せず駭異と共に彼等を樂ましむる光榮の中に居るなり我等が爲にもかくの如くなるべしもし智は來世の福樂に觸るゝを賜はるならば自己をもすべて現世にあるものをも忘るべく何等の爲に活動することも最早あらざるべしゆゑに或者は確信を以て敢て左の如く言へり意志の自由は或は體に於て或は思に於て行はるゝすべての徳行と祈禱のすべての秩序と又此の情慾の王たる智力其ものをさへ感覺により導きて之を活動せしめんしかれども神の統治と照監とが智力即此の感覺と思念の家宰たるものを主治して之を統御する時は性より自由は奪はれて智は導かるゝも導かざらんといへりされば性は自己に對して權を有する能はずして他の力を以てみちびかれ自から何の處にあるをも知らず欲するまゝに意思の活動を爲さしむる能はずして却て此際に性を捕へたる力の爲に占領せられ其力を以て何の處に導かるゝをも覺知せざらん時は何の處に祈禱はあるべきか其時は人は思欲をも有するあらずして聖書に證する如く肉體にあるか或は肉體の外にあるか知らざるに至らんコリント後十二の二かくの如くに捕へられて自から己を

認識せざる所の者に祈禱はあるべきかゆゑに誰も非難を言ふなかるべし靈的祈禱を以て祈ることを能くすと妄斷せざるべし高慢を以て祈禱し知識は意味にして欲するとき靈的祈禱を以て祈ることを得んご己を偽り稱する者は此の如き妄斷に陥らん之に反し謙遜にして事を了會する者は甘んじて神父等に學び性の界限を知りてかくの如き妄斷に従ふを自から許さざるなり

問 此の言ふべからざる恩寵はもし祈禱にあらすんば之に祈禱の名稱を下すは何故なるか

答 之が理由は既に證する如く此恩寵は適當なる者に祈禱の時にあたへられて其始を祈禱に於て有するによるだけし神父等の證明によるに、かくの如き時の外此の美妙なる恩寵の降るが爲に位置あらざればなり之に祈禱の名を與へらるゝは、げだし祈禱により智が此の幸福に導かれて祈禱は之が原因となるによる然れども他時には神父等の書に證する如く此の幸福は位置を有せざるなりげだし多くの聖人の一代記にも録する如く彼等が祈禱に立ちて智力を奪ひ去られしは人の知る所なり

さりながらもし誰か問ふて、たゞ是時に於てのみ此の大なる言ふ可からざる賜あるは何故なりやといふ者あらば次の如く答ふべし是時に於て人は他のすべての時よりも自己に集中して神に注意するに自己を準備し願望して神より憐れ待つに由ると之を略言すれば是れ王に懇願するが爲に王門の前に立つ時なりされば懇願して願ふ者の願が是時に成らんことは適當なりげだし人が斯程に自から準備しかくの如く自己を省察するは祈禱に前進する時の外如何なる時ありや或は人の寝ね又は働く時又は其心意が亂さるゝ時はかくの如きものを受くるに更に適當なりや、げだし視よ諸聖人はすべての時を靈神上の事の爲に占有せられざるなきにより閑暇の時を有せずといへども彼等の爲にも祈禱に準備せざるの時あらんげだし或は生活上偶會する所の何事かを思ひ或は天地萬物を研究し或は他の實に有益なる何事にか従事すること屢之あればなりさりながら祈禱の時に於ては智の直覺力は獨一の神に突進して其のあらゆる活動を彼に向はしめ注意と絶えざる熱切とを以て中心より願を彼にさへげん此によりて見れば靈魂に唯一の配慮のみなる是時に於て神聖なる仁恵の溢れ出づるは當然なり視よ司祭が準備し祈禱に立ちて神を和げ懇求して其心を一に集中するや其時祭壇に供へられたる餅と葡萄酒に聖神の降るは人々の知る所なりザハリヤにも祈禱の時に天使

第十六 説教

現はれてイオアンの生るゝを豫報せり。ペトルにも第六時に屋背に於て祈禱したる時異象現はれて天より降れる布と其中にある動物とを以て彼を異邦人を招くに導びけり。コルニリイにも祈禱の時天使あらはれて其録されしことを彼に告げたり。又ナワンの子イイススにも祈禱に於て其面を俯したる時神は彼と語り給ひき。又司祭が約櫃の上なる贖罪所の中より凡て知らざる可からざる事の爲に神より異象を以て機密を識らしめられたるも、年に一回祈禱の恐るべき時に當り、司祭長がイスラエルの子の支派の残らず祈禱に集まりて、外部の堂中に立つに際し、至聖所に入りて其面を俯伏したる時に之ありき。即恐るべき言ふべからざる異象により神の語るを聴きし時に之ありき。呼此の時に於て彼の司祭長が勤めたる機密は如何に恐るべきものなりしや。しかして諸聖人に祈禱の時に現はれたるすべての異象も此の如くなりき。けだし他の如何なる時は神と對話する祈禱の時の如く聖なるか。且其聖なるにより賜を受るに此の如く適當なるか。神の前に祈禱と祈願をさへげて神と對話する此の時に於ては、人は力めて其悉くの感動と思念を八方より纏めて一に集中し、思を獨一の神に没して、其心は神を以て満たさる。故に彼は人智の及ばざる所のものを悟るなり。けだし聖神は各人の方に應じて彼に働き祈

禱する。其者より實體を借りて働くがゆゑに祈禱は注意の爲に活動を奪はれ、智は駭異の爲に打たれ、且呑まれて自己の願求を忘れ、其活動は深醉の中に葬むられて、人は此世に在らざらんとす。其時は彼處に靈と體との差別も何等の記憶もあらざるべし。神聖なる大グリゴリーの言ひし如し曰く、祈禱は智の淨潔にして、こは唯人が駭異の時に聖三者の光より分與せらるゝなり。と祈禱により智に生ずるものを悟るにより駭異する所の者に祈禱を分與せらるゝ所以は、此書の始に於ても他の多くの處に於ても予が既に言ひし如くなるを見るか。同く又グリゴリーは言へり、曰く、智の淨潔は心中の蒸洗なり。彼は天色に譬ふべし。聖三者の光は彼に祈禱の時に於て輝き始めん。

問 此のすべての恩寵は誰か何時之を賜はるか。
 答 祈禱の時に之を賜はらん。智は舊き人を脱ぎて新しき恩寵の人を衣する時は天色の如くなる淨潔を見ん。是即神が山上に現はれし時イスラエルの長子等稱して神の在所出埃及記二十四の十と言ひしものなり。ゆゑに予が已に言ひし如く、此賜と此恩寵とを名づけて、靈的祈禱とは言はずして、聖神により遣はさるゝ清き祈禱の所産といふを當然とす。其時智は彼處に祈禱より上にあるべく極て勝れたるも

のを發見すると共に祈禱は中止せられんゆゑに智は其時祈禱を以て祈願せずして人智の及ばざるもの死すべき者等の世界の外にあるものを直覺するにより大悦の中にあるべくしてすべて此世に屬するものを知らざるにより深黙せん此の不知を名づけて高上なる現象とはいふなり是れ此の不知のことは言ふべし祈禱と分けざる不知に達したる者は福なりと願くは神の獨生子の恩寵により我等も此を賜はらん彼に悉くの光榮と尊敬と叩拜は今も何時も世々に歸すべし「アミン」

第十七 說教

物の記憶を以て喚起せらるる肉體の念を離れて深く直覺に入らんを尋ぬる靈魂の假定

凡て他より高上なるものは其高上なるが故に隠れて見えずしかれども是れ他の體が天然に彼の爲に或る帷幕となるには非ずゆゑに彼の秘密を看破することをも爲し得べし凡て智力にて想像し得らるる實體は其自から卓越する所のものを外

より借來るに非ずして反つて此卓越は其活動の内部に一定せられたり即彼が第一の光を大に明に受るが爲に直接に行爲するを得るは或は他の品位と同様なるべくして其異なるあるは位置の爲には非ずして之をうくる特性の淨潔によるべく或は天上の指塵と其力を受るを能くすべき智の程度に準ずること顯然なり凡て智力にて想像し得らるる實體は彼より下等なる實體の爲には隠れて見えず然れども彼等が互に相隠るるは天性に依るに非ずして道德の活動によるなり而して予は此事を聖なる能力と靈性の品位と魔鬼等につきて言はんぞす初者の中者より隠れ中者の第三者より隠るるは天性にもより位置にもより活動にもよるなり然して各品位の實體は或は有形的なる或は無形的なるに拘はらず同じ品位に於て自から己の爲にも一者が他の者の爲にも隠れて見えざるは知識による然れども下等なる品位の爲に隠れて見えざるは本性による何となれば無形なる本體を見るは有形なる本體を見るが如く外部に於てするに非ずして彼等の互に相見るは道德に於ても活動の度に於ても其見る所の本體の活動の内部に於て見るべきを示すなりゆゑにもし彼等は同等に尊敬せらるべき者ならばたとひ互に相隔たるといへども空想を以てせず偽りなき觀察と眞實の性を以てして互に

相見ん但萬物の原因者は此限にあらす彼は獨一崇拜せらるゝ者として此の差異よりは大に超越するなり魔鬼等は極めて不潔なるものなれども其自己の品位に於ては彼此互に相隠れず然れども彼等より高上なる二の品位を見ざるべし何となれば靈的觀察は活動の光にして此光は直ちに彼等の爲に鏡となり又目となるべきものなるによるゆゑに活動の暗まるゝや其本體は彼等より高上なる品位を見ざらんされど自己固有の品位に於ては彼此互に相見ん何となれば彼等は靈的品位よりは更に粗なるものなるによるこれ魔鬼等に就きて言ふなり。しかれども靈魂は汚され且暗まるゝ間は彼此をも自から己をも見る能はざるべし之に反してもし潔められて其造られたる往昔の状態に歸るときは此三の品位を明に見ん即彼等より下き品位をも高き品位をも見るべく又自己の品位に於ても彼此互に相見ん而して其時或は天使を見るか或は魔鬼を見るか或は彼此相見るも有形的状態に變するが爲に非ずして却て自己の本性と靈的品位とに於て見るなり之に反してもし魔鬼或は天使は自から變せず有形的状態を己れにうけずんば見るあたはざるべしと言はゞ是れ其見るは最早靈を以てするには非ずして即體を以てするなりしかれどもかくの如くならば何を淨潔に要あらんけだし

視よ不潔なる人々にも或時には魔鬼等現はれ同く亦天使等も現はれて彼等が之を見るときは有形の目を以てするならばこゝに淨潔の要あるなけんさりながら淨潔に達したる靈魂の爲には之のあらざるなり却て彼は心神を以て天然自然の目にて見る即透徹聰明なる目にて見るなりされば靈魂が體中にありつゝ彼此互に相見るを怪むなけれけだし證者の確實眞正なるに據り即福たる大アフナシイに據り汝に明々なる證左を示さん彼が大アントニイの事を記する文中に言ふあり大アントニイ一日祈禱に立ちけるが大なる尊敬を以て擧げらるゝ靈魂を見てかくの如き光榮を賜はりし者を讚美せりといふ而して此の福者はニトリイのアンムンといひし人なりしが聖アントニイの居りし山はニトリイを距ること十三日の道程にありき此例は前文に述べたる三の品位のこの爲に既に證を爲すべくして靈性はたとひ彼此遠く隔たるといへども互に見るを得べきと距離と身の官能とは彼等が互に見るを礙げざることを示すなりかくの如くすべての靈魂も淨潔に達するときは見るに肉體を以てせずして精神を以てす何となれば有形的觀察は開放的公然と行はれ目前にあるものを見れども遠く隔たりしものは他の觀察を要すればなり。

在上の品位の許多存在することは、數ふべからずして、彼等は其卓越と品位により、名を稱せらる。けだし首領と名づけ、權柄と名づけ、能力と名づけらる。は何か、主制と稱せらる。は蓋し尊崇を以て卓越するものなるべし。而して彼等はアブンの主教聖テオニシイの言ひし如く、其屬下たる者よりは少數なれども權と知識に於ては多大にして、其品位の尊きに依り之を最多く分與せられたり。けだし品位より品位に及び、以てすべての品位より大にして、且權力ある者の單位に至る。即一切の受造物の首領にして、又其基礎たる者の單位に達するなり。されど予が名づけて首領といふは、造物主を言ふには非ず。神の業の奇蹟に先だつ者等をいふ。けだし多くの者は、彼等と我等の造物主なる神の睿智を得ること低くして、其低きは彼等の下に居る者の彼等自己より低きが如くなるべし。されど我が名づけて低しといふは、位地に於ての高き低きを言ふに非ずして、知識の力を以て言ひ、次下なる者の知識の大小と比較して得る所の量に準じていふなり。けだし此の悉くの靈的實體を神の書は九の名稱を以て名づけ、之を三部に分てり。而して第一部は大にして高く、且最聖なる寶座と、多目なるヘルフイムと、六翼のセラフイムとに分ち、第二は主制と能力と權柄とに分ち、第三は首領と差役首と差役とに分てり。さて此等の品位は、エウ

レイの語より譯すればセラフイムとは、煖むる者、又燒く者の義にして、ヘルフイムとは知識と智慧に富む者、寶座とは神の支柱神の安息の義なり。而して此等の名稱を以て此等の品位に名づくるは、彼等の行動に依る、されば尊敬すべき者として、は寶座と名づけ、悉くの國に權を有する者として、は主制と名づけ、精氣を調へる者として、は首領、民と人など、に權を有する者として、は權柄力の強くして觀察の畏るべきものとして、は能力、捧持する者として、はヘルフイム、聖にする者として、はセラフイム、不眠なる番兵として、は差役、首使はさる。者として、は差役と名づけらる。なり。第一日に九の靈物の造られたることは、知る可らず。而して一の造物は言を以て造られたり。是即光なり。第二日には穹蒼を造られたり。第三日に神は水を一區に匯め、且蔬菜を生長せしめたり。第四日に光を分ち、第五日に鳥と爬蟲と魚とを造り、第六日に諸の動物及び人を造れり。全世界の建設は長く、且廣し。初は東にして、終は西。右方は北にして、左方は南なり。神は全地を奠むること、床の如くし、高き天は皮革、天井又は蒸露罐の如く、第二の天は第一の天と連なる車輪の如くして、天と地は之により、互に相接するなり。大洋は即天と地とを繞らす帯にして、其中に天を摩する高き山々あり、山の後に太陽あり、全夜の間を以て通過するを爲す。此等の山々の間に大

なる海は殆ど全陸の半又は其四分の一を占むるなり。
我等の神に光榮は歸す。

第十八 説教

無形體なる者の本性を観察するに就て問答。

問 人性を以て無形體なる者の本性を観察する方法と其差異は幾何あるか。
答 すべて靈的實體の單純にして微妙なる本性を想像するは人性の感覺に屬し三の各異なる種類に於てすべし或は有形なる客觀物即現實化したる物の粗なるに於てすべく或は其物の微妙なる即現實化せざる物の微妙なるに於てすべく或は眞實なる直覺即實體其ものを直覺するに於てすべし第一に關しては五官も之に權を有すべく第二に關しては靈魂は之をたゞ表面に觀察すべく第三に關してはこゝに聰明なる本性の力を要するなり而して又後の二者各自に關しては意志と智力は之に權を有すべく意志と心靈上の樂とに關係してはもし意志が同意するならば意志は之が第一の原因なり而して必要の時には自由と意志とは沈黙

を守り暫く位地を占めて行爲はこゝに止まると雖心靈上の樂は自由の所産なり或る場合に於ては彼はたゞ指示するのみにて賛成するの意志あるなく眞實の認識なくして生ずることあり何となれば感覺は偶然に起るものを意志の關係なくして己れに受くるを能くすればなり聖なる能力が我等と與にすることきは此の三の方法を以て我等の教訓にも我等が生命の建設にも勤むるなり。

※こゝに靈的實體とは無形體非物質なる本體にして不合成的本性を云ふ。

しかれども不潔なる魔鬼は我等を益せんがためにあらず滅さんがために我等に近づくと、我等にたゞ二つの方法を働かすを得べし然れども我等を誘惑するが爲に第三の方法を以て我等に就く能はざるべし何となれば魔鬼等は智力の天然の意思を我等に活動せしむる力を全く有せざればなり。げだし暗の子は光に近づく能はざるによる、さりながら聖なる天使等は之を有す、即意思を活動せしむることをも之を光明ならしむることをも能くするなり、これに反して魔鬼は虚偽なる意思の君にして又造成者なり即暗の子の君にして又造成者なり何となれば光を發する者より受るものは光にして暗まされたる者より受るものは暗なればなり。問 彼には與へられ此には與へられざるは何故なるか。

答 凡て師たる者は其教へんとする知識を先づ自から己に於て研究し之を學習し之を受用し且之を玩味し而して其時に最早之を以て被教者の前に述べざるを得べし第一の教師は物の精確なる知識を自己の健全なる認識より授けん是れ最初に最透明清潔なる智の敏速なる想像に一切を包有し得る者なり魔鬼等は敏捷なれども光を有せず恰例は別にして光は亦別なり前者は後者なくんば之を有する者を滅さん後者は眞實を示せども前者は眞實の影なり何となれば光は物の眞實を示し生活の状態に準じて或は之を増し或は之を減ずればなり。

聖なる天使等は物の行動を知る知識を自己の認識により我等に注ぎ自から先に味ひしものと智力を以て想像したるものとを其後我等にも傳ふるなり而して之と同一第二の師も自己の認識の度に應じて物の行動に對する想像を我等に喚起す然らずんば其自から居らざる所のものに於ては必ず我等に正しき意思を喚起せんさりながら我が既に言ひし如くたとひ我等は受くるを得ることも彼等は最初に眞の直覺を有したるに拘はらず之を以て我等に教ふる能はざるを確信すべし。而して又彼等はおの／＼彼等を統御する神の照臨に依り被教者を或は其事に成は其と反對なるものに喚起せんしかれども魔鬼の媒介に依るにあらずんば感覺

は惡の認識をうけざるべく惡の爲に動かされざるべくして智力も天然に惡を爲すことは能はざるべしといへども我等が智力は聖なる天使の媒介なくして天然に學ばずして善に起るを得べし予は之を眞實と認むるなりけだし善は天性に種附けられたれども惡は然らざればなり然して凡て我有にあらずして外より入り來るものは之を認識するを得るが爲に或る媒介者を必要とすしかれども凡て内部に生長するものは學ばざるも幾分か天性に浸入するなりされば天然の性質はかくの如く自然に善に興起するならば之が生長と照耀とは天使の直覺を借らずして得らるべきなりさりながら彼等は我等の師たること猶彼等の互に師たるが如くなるべし下なる者は彼の俯瞰して己よりも多く光を有する者に學ぶべく此の如くして一は他に學びて聖三者を師とするの一位に至る迄漸々に昇進するなり然れども其の第一の品位は又自から確として言はん獨り自から學ぶに非ずして仲保者たるイエスを以て師となし彼より受けて下なる者に傳ふこと。

思ふに我等が智は神聖なる直覺に向ふ天然自然の能力を有して一の希望に於ては我等もすべての在天の性と同様なりけだし我等にも彼等にも働くものは恩寵なればなりさりながら性に依れば人智の爲にも天使の智力の爲にも神性を直覺

するは非常なるものとす何となれば此直覺は他の直覺には數へ入られざるによる然れども凡て靈智ある者に於ては第一者に於ても中間者に於ても天と地のすべての永在者を直覺するは性によるに非ずして恩寵を以て成るべく他の事物の如く性を以て之に達するに非ざるべし。

天上靈物の品位が止る所の聰明なる直覺と其觀察とはハリストスの肉身により來るに至る迄は彼等の爲に此奥義に徹底する程近接せしには非ざりしけれども言が肉身となれるや彼等の爲にイエススに入る門戸の開かれたることは使徒の言へる如ししかれどもたとひ我等は無垢清潔なる者となり得ることも思ふに實に此の如し我等人々の思想に於ては天にある者の媒介なくんば彼の實に奥義の顯現たる永遠の直覺に我等を昇すべき默示と認識とに近づくあたはざりしならん何となれば默示と直覺とを永遠者より直に受くべき上なる實體の有する如くなる能力は我等の智には足らざればなりけだし彼等も形式により之を受け蔽はるゝ所なくんばあらずして我等が智力も之を受くこと彼等と同じけだし各品位は他の品位の轉達により受けて第一の品位より第二の品位に傳ふるに嚴重なる秩序と差別とを守りかくの如くして奥義は悉くの品位に轉達するに至る。

さりながら多くの奥義は第一の品位に止まりて他の品位に及ばざるべし何となれば此の第一の品位の外他の悉くの品位は奥義の大なるを己れに容るゝ能はざればなりしかれども或る奥義は第一の品位より出で獨り第二の品位に示され彼に於て此奥義は沈黙に守られて他の諸品は之を曉らざりしも或る奥義は第三及び第四の品位まで達せん而して又聖なる天使等にあらはさるゝ默示にも増減あるべしされば彼等に於てさへかくの如くならば矧や我等は彼等を俟たず彼等の媒介なくしてかくの如きの奥義を受くるを得んや之に反して諸聖人の智に或る奥義の顯現の感のあらはるゝは彼等によりて之あるべしそれ默示は更に高き品位より更に下き品位に傳へられ次て其下き品位より他の品位に傳へらるゝことを神より許されかくの如くして人性迄達することを神の指麾によりゆるさるゝならばこはすべて之に堪ふる所の人々にも達すべきなりけだし諸聖人は天上の諸品を経由して光榮なる永在者其ものをさへ直覺する即ち此の窮むべからざる奥義さへも直覺するの光を受くべく彼等が自ら相受るは生命の嗣者とならんとする者に遺はるゝ役事の靈なるによる(エウレイ一の十四)さりながら來世に於てはかくの如きの次第順序は廢さるべし何となれば彼等は其靈魂の頌讚と喜樂

この爲に神の光榮の顯現を彼此より受くるには非ずして、おのゝ其剛勇の度に
 循ひ當然にうくべきものを價値により主宰より直接に與へらるべくして、此世に
 於る如く他者により賜をうくるにはあらざればなり。けだし彼處には教ふる者も
 教へらるゝ者もなく其足らざる所のものを他が補ふべき必要を有する者もあら
 ざればなり。彼處には受くるに適當する者に直接に與ふる一の賜與者あるのみに
 て、天上の樂を受くる者は彼より之を受くるなり。彼處には教ふる者と教へらるゝ
 者との順序は廢されて、すべての願望の中心は唯一の尖頭に確立するなり。
 我謂ふ地獄に苦みをうくる者は愛の鞭にて撻たれんと此の愛の呵責はいかに苦
 しく且慘憺たるにや。けだし愛に對して罪を犯せりと感じたる者はすべての人を
 恐怖せしむる苦みよりも更に大なる苦みを忍耐すべく、愛に悖る罪の爲に心を打
 つの哀みはすべての有り得べき罰よりも恐ろしかるべし。罪人等は地獄に於て神
 を愛するの愛を奪はるべしといふは人に不似合なり。愛は總じて何等の人にも與
 へらるゝ。何人も之を首肯せん。眞理の認識の所産なり。さりながら愛は其力を以て
 二様に働かん。愛が罪人を苦しむるはたとへば此世に於ても甲が乙の爲に忍耐す
 る場合のある如くなるべく、又其本分を守る者をば樂ましめん。されば視よ、予の考

に依れば地獄の苦みは是れ即悔恨なり。されど愛は在上諸子の靈をば其慰藉を以
 て酔はしめん。

問 罪の赦しを受けたるを人は何時確知するか。

答 全心より罪を全く憎むを其靈中に感知する時。従前と反對の方向を明に自
 己に與ふる時なり。かくの如き者は其自から得たる良心の證明により、最早罪を憎
 みし者として神より罪の赦を受くべき望のあることは使徒の言ふ如くならん。曰
 く「間然すべからざる良心は自から己の爲に證者たりと。」

願くは我等も始なき父と獨生の子及び聖神の恩寵と仁慈とに依り、其罪の赦しを
 受くるを賜はらん。彼に光榮は世々に歸すアミン。

第十九 説教

主日の事及び「スポタ」の事に關する理論の標準及び
 其比喩的意義

主日は我等が體と血とを有する間は我等の受るあたはざる眞理の認識の奧義に

して我等の所思に超絶するなり。此世には實に第八日なく安息日もあるなし。けだし神は第七日に安息し給へり。創世記二の二といひしは、此生命の進行を終て後安息するの義を表示せり。何となれば墓は即體にして體は世の爲なればなり。六日の間誠命を守るを以て、生命の行爲に終を告げ第七日にすべて墓に送られて第八日に墓より出づ。それ主日の奥義を賜はる者等は、こゝに比喩に於て之を受けども、日其ものを其本義に於て受るには非る如く、苦行者等も安息日の奥義を比喩によりてうくれども、すべて憂ひ哀むべきものより休息して不安より全く安んずる眞實の「スポタ」を實に受るには非るなり。けだし神が此處に我等の爲に與へ給ひしは、神秘にして眞正現實にはあらざるなり。眞實にして比喩なき安息は是即愛と慈と安息に反對なる行爲とより全然休息することを表示するの墓なり。人間は彼處に於て靈も體も安息するなり。神は六日の間に此世界のすべての構造を秩序にみちびき元質を作りて其の永久運轉する行動には従ふべきの法則を與へ給へり。されば彼等は破壊するに至るまでは進行して止まざるなり。彼等の力即創世元質の力を以て神は我等の體を組織し給へり。然れども元質にも其運行を休止せしめずして元質より生じ來れる我等が體にも行爲より休息することを得しめざるなり。し

かれども我等の體が最初の化合に従ふと同時に、我等の爲に行爲より休止するの限界を定め給へり。即此生涯より脱する是なり。かくの如くアダムには告げていへり。汝の面に汗して汝の食物を食ふべし。然るに此は久しかるべきか。土は汝の爲に荆棘と薊とを生ずべくして汝は其出づる所の土に歸るに至らん。といへり。創世記三の十八十九。これ汝が生ずる間に於る此生命の働の秘義なるしかれども、主の汗を流し給へる其夜よりして主は荆棘と薊とを生ずべき汗に易ふるに祈禱と共に義の行爲に於て注ぐべき汗を以てし給へり。五千五百有餘年の間神はアダムを棄て、地上に勞苦せしめたり。けだし其時に至る迄は聖所に入るべき路の未だ啓かれざりしことは神聖なる使徒の言ふ所の如し。エウレイ九の八。されど末日に及び來りて自由に命するに他の汗を以て一の汗に易ふべきを以てし、すべてより安息するに非ずしてすべてを變革するをゆるし給へり。何となれば我等が地上に苦むことの永く續きたる爲に其仁慈を我等にあらはし給ひしによる。ゆゑにもし地上に汗を注ぐことを極むるならば必ず荆棘を獲らざるを得ざるべし。けだし之と同く祈禱の廢棄は天然に荆棘を生ずるの地を以て體とするの行爲ならずんばあらず。慈は實に荆棘なり。之を體に種きたるにより、我等に芽を生ず。カラテヤ六

の八アタムの状態を身に着る間は必ずアダムの慾をも身に着んけだし地は其性に順ふ者の芽を生ぜざる能はず地の性の産する所のものは即我等が體の土なること神の證言する如し曰く汝は土より取られたりと創世記三の九彼の土は荆棘を生ずれども此の聰明なる土は慾を生ず。

主は我等の爲にすべてに於て模範たり機密に於てもすべて其攝理の種々様々なる行爲に於ても且は第九時に至る迄も其踵は行爲と勞苦とを止めずしてこれぞ我等が全生涯の行爲の秘義なる安息日に至り墓に寝ね給ひしならば生涯の中にも安息あり即慾より休することありと主張する者は何處にありやされども主日のことは我等の爲に言ふも高きに過ぐ我等が安息日は葬の日なり我等が性は實に彼處に於て安息するなりされど地の成立する間は之より日々荆棘を拔取らんことは我等に必要なりたゞ我等の働を續くるにより此等の荆棘は衰へん何となれば地は之を全く掃清せられしに非るによる此の如くなれば一時の怠慢により或は僅少の不注意により荆棘繁茂して地の表面を掩ひ汝が種るしものを歴して汝の勞は空しきに歸するならば最早汝は毎日地を掃清せざるべからざるなり何となれば掃清を廢するは荆棘の繁茂をいよ／＼大ならしむるによる願はくは一

性に於て獨生なる神の子の恩寵により掃清せられん彼に光榮は始なき父と生活を施す聖神と共に世々に歸すアミン。

第二十 説教

常に庵中に居りて獨り己を省みんと決心せし者に

最必要にして最有益なる日々の想起。

兄弟あり録して常に己の前に置き自から省みて言へること左の如し無耻にして如何なる害をも受るに値する人よ汝は自己の生命を無思慮に費せりされば善行なくして空しく過ぎ悪行を以て富める汝の諸日の中より餘す所の是一日たりとも自ら戒愼せよ社會の事をも其勳靜の事をも修道士の事をも其業務の事をも彼等が如何に生活して其所爲の如何に大なる事をも問ふなかれ此の如きことを絶えて念頭に掛くるなかれ汝は奥密に世より出で死者の如くなりてハリストスに歸せり世と世にあるものゝ爲に復た生るなかれ希望は汝に先だつべし然らばハリストスに於て生きん衆人より來るもろもろの誹謗ともろ／＼の侮辱嘲笑及び

非難に對しては自から備へ忍耐を以て武装せよ。而して此のすべてのものを喜んで受ること實に之に當るべきものゝ如くして如何なる勞苦も如何なる患難も汝が會て其旨を遵奉したる魔鬼より來る所の如何なる不幸も感謝して忍耐し、すべての窮乏と天然に起るものとすべての不幸とを勇氣に勘忍せよ。身體の爲に缺くべからざれど速に腐敗に歸すべきものを失ひしは神を望むによりて忍べよ。神に依頼して此のすべてを受けんことを願ふべく助も何等の慰撫も何處よりも期するかなれ。汝の哀を主に負はしめよ。聖詠五十四の二十三而してすべての誘惑に於ては自己を罪し己を以て此のすべての原因者とせよ。何の爲にも誘はるゝなかれ。汝を辱しむる何人をも咎むるなかれ。何となれば汝も禁樹の果を食ひて汝は種々の怨を受たればなり。不幸は喜んで受け汝を寒心せしむるに放任せよ。其が爲後に至りて樂を感じせん。禍なる哉。汝と汝の臭穢なる名譽よ。汝はあらゆる罪を充ち満てる己の靈魂をば非難すべからざるものゝ如く宥免すれども他の靈魂をば言を以ても思を以ても非難せり。汝の爲には此の今に至る迄汝が養はるゝ豚に適當なる食物にて足り足れり。汚穢者よ。汝はかくの如く無智に生命を送りて人々と交際し彼等の社會に止まるを如何して耻ぢざるか。もし汝は之に注意を向けて此すべて

を守るならば或は神の助によりて救はれん。然れども之と反對なる時は暗黒と魔鬼の里に退去し厚顔にして其旨を行はん。視よ。予は此のすべての爲に汝に直證せよ。もし神は正義に據り人々を汝に近寄せ汝が生命の至時彼等に對して思に存し言に發したる侮辱と非難との爲に汝に報ゆるあらば全世界は汝の爲に平安を有せざらん。終に今よりなりとも止めよ。而して汝に報いらるゝすべてのものを忍耐せよ。此兄弟は誘惑又は憂愁の來るときは感謝と己の爲に之を益することを以て大に忍耐するを得んが爲に此すべてを日々自から省思せり。吁。我等も人を愛する神の恩寵に依り我等に及ぶ所の不幸は感謝を以て忍耐し之より己の益を引出すを得ば幸なり。彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン。

第二十一 説教

種々なる事項に就て問答。

問 人心は惡に向はざらんが爲に如何なる錠鎖にて縛らるべきか。
答 恒に睿智に従ひ生命の教に富むを以て縛らるべし。げだし意の放恣を抑へん

がために、かくの如く有力なる鍵鎖は他に之あらざるなり。
問 睿智に従ふ者の進行の終極は何の處に之ありや、其學習は如何して完うせらるべきか。

答 其進行に於て此終極に達せんことは實に能はず何となれば諸聖人も此事に於ては完全に至る迄達せざればなり。睿智の路に終なし之に由りて行く者が神と合するに至る迄は上へ上へと進行す。無限に彼を追求するはこれ其表徴なり、何となれば睿智は神自らなればなり。

問 我等を睿智に近づかしむる第一の途は如何なるか、其途の起首は何にあるか。
答 神の睿智の跡を慕ひ全力を以て進行すると此進向に於て生命の終に至る迄、全霊を以て益ぐともし必要あるときは生命其ものをも脱し之を自から抛つことをさへ神を愛するにより等閑視せざるとにあり。

問 誰か才智ある者と當然に名づけらるべきか。
答 此生命に界限のあるを眞實に曉る者は是なり。彼は犯罪にも界限を置くを得べし。けだしいかなる知識或は如何なる通曉は之より高尚なるか、即人が智慧附けられ、欲望の悪臭に汚されたる一の部分をも有せず、又欲望の甘きに留めらるゝ、靈魂

に何等の汚點をも有せずして此生命より出て不朽に入るを曉るより高尚なるものありや、けだしもし何人か天地萬物の奥秘に透徹せんが爲に其思想を録り發明と觀察とによりてもろくの知識に富むも、其靈魂は罪の汚穢にけがされ、心中の希望に於ては證明を受けざるに拘はらず、希望の淺に幸に入りたりと思ふならば、世に彼より愚なる人やある何となれば彼の行爲は世に向て不斷進行するにより彼をたゞ此世の希望にみらびきしのみなればなり。

問 誰か眞實に最剛なるか。

答 生命と勝利の榮が隠るゝ一時の苦厄には心を慰めて、地獄の悪臭が潜伏し尋ぬる者に嘆息の分子を飲ましむる寛縦を願はざる者は是なり。

問 もし誰か誘惑に因りて善なる行爲より離るゝならば神に進行するに如何なる害あるか。

答 患難なくんば神に近づくあたはず、患難なくんば人間の正義も不變不易に守られざるなり、もし人は正義を増殖する行爲を棄つるならば、之を保護する行爲をも棄てん。されば彼は保護せられざる寶と同じかるべく、敵軍が圍繞せる時、武裝を剥がれたる戦士と同じかるべく、綱具を有せざる船と同じかるべく、渾々として流

る、水の泉を以て多く潤されざる園と同じかるべし。

問 誰か悟性を光照せられたるか。

答 世の甘味の中に潜まれる苦味を尋ぬるを能くし、其口に此盃を飲むを禁じ、如何して其靈を救はんかと常に搜索し、此世を離るゝに至る迄は其進行を止めず、五感の門を閉ぢて、此生命に對する執着の念をいらしめず、彼をして其奥密なる寶を奪はしめざる者はなり。

問 世とは何ぞや、彼を如何に認識すべきか、彼を愛する者に幾何害あるか。

答 世とは其美を慕ひ之を熟視する者を引誘して之を愛せしむる淫婦なり、されば聊たりとも世を戀愛する情の主たるありて、之に絆さるゝ者は其手より脱する能はずして、世は其生命を奪ふに至らん、而して世が人より一切を剝ぎ取りて、死するの日に、彼を其家より持去るならば、其時人は實に世は淫者たるを騙者たることを確知せん、しかれども誰か此世の暗中に匿まるゝ間は、之より脱せんと盡力するも、其路を覺るあたはざるべし、かくの如くなれば、世は其門徒と諸子とを自己に引止むるのみならず、世に縛らるれど、貪らざる苦行者等をも、父世の縛鎖を破りて、一時世より上に立ちし者等をも引止るなり、視よ種々の手段を以て、彼等を其行為に於て、擒へ、之を其足下に投じて、蹂躪するを。

問 病と困難とが身體を圍み、之と併せて意志は善なるものを願ふの望と、其最初の堅きとに於て弱るときは、我等之を如何に爲すべきか。

答 一半は主の跡を追ふて行けども、他の一半は世に止まりて、其心は此世にあるものより脱せず、自己を分割して、或時には前を望めども、或時には後を顧みる者等を見ること稀なりとせず、ゆゑに智者は二心を以て、主に就くなかれといひ、シラフ

一の二十八、時く者の如く移る者の如く就くべしといへるは、思ふに此の自己を分割して、神の睿智の路に近づく者等に、教訓を與ふるなり、主も此の不充分に世を棄て、自己を分割したる者等が、肉體の慾を未だ自から棄てざるにより、畏懼と患難とに口を藉り、心意を以て否確言すれば、思念を以て後を顧みるを知り、此の心意の衰弱を彼等に擲たしめんと欲し、彼等に一定の教訓を告げていへり、我に従はんことを欲せば、先づ己を棄つべし、云々といへり、(マトフェイ十六の廿四)

問 己を棄つとは何を謂ふか。

答 十字架に上らんと準備せし者は、其心に死の一念を有し、かくの如くして、十字架に上り、現世の生命に再び分を有するを思はざるならん、己を棄つることを實行

せんと欲する者も此の如し。げだし十字架とは如何なる患難をも受けんと欲する者の主は此事の何故かくの如くなるべきかを教へんと欲するや、告げていへり。此世に生きんと欲する者は眞生命の爲に己を亡ぼさんし、かれども此處に於て我が爲に己を亡ぼす者は、彼處に於て己を得ん、マトフェイ十の二十五、即十字架の路を進行して其足を彼處に立つる者は己を得んとされども、誰か此生命の事を更に慮るならば、これ其の出で、患難に向ひし希望を彼は自から奪へるなり。げだし此念慮は彼に神の爲に患難に近づくを許さずして、彼が此念慮に従ふにより、漸々彼を誘ふて苦行的有福なる生涯の中より引去るべくして、彼を征服するに至る迄は、此念慮は彼に増々成長せん、我を愛するにより、我が爲に己の生命を其心に於て亡す者は、間然する所なく傷はれずして、永遠の生命に守られん、我が爲に其生命を亡す者は之を得んとは、即此義を示すなり。されば猶此世に於て此生命の爲に己の生命を全く亡すに自から備へよ。もし此の生命の爲に己を亡すならば、主は亦同じ意味にていへり、汝に永遠の生命を與ふること、我が汝に約せし如くせん、イオアン十の二十八、されど汝は此の生命に留まるならば、我が約束と未來の幸福に於る保證を猶此處に實際を以て汝に示さん、此生命を輕んずるときは、永遠の生命を得ん。

此の武裝を以て苦行に出發する時は、凡て患難憂苦と思惟せらるゝ所のものは、汝の眼中に輕んせられん。げだし心は此の如く武裝せらるゝときは、彼の爲に戦もな、く死の危きに臨みて憂愁することもあるなし。ゆゑにも、人は未來の有福なる生命を望むが爲に、此世に於る自己の生活を憎まずんば、毎時毎刻来る所の種々なる患難と勞苦とを全く忍耐する能はざる所以を確として知らんこと肝要なり。

問 如何して人は從前の習慣をすて、缺乏と苦的行生活に慣るべきか。

答 身體は奢侈と懦弱とに資くるものゝ爲に圍まるゝ間は、其必要を充たさずして生活するを甘んせざらん、而して身體が凡て懦弱を生ずるものより除かれざる間は、智も其體を奢侈より止むるあたはざるべし。げだし奢侈と浮華との觀場が其前に開かるゝありて、懦弱に資くる所のものを殆ど毎時見ざることもなき時は、火焰の如き欲望起りて、彼を衝動すること、燒くが如くならん。故に贖罪者たる主は、其跡に従て行かんことを約束したる者に、裸體にして世より出づべきを最善く誠命し給へり。何となれば、人は凡て懦弱に資くる所のものを先づ自から拋棄して、其後事に着手せんを要すればなり。主も自から魔鬼と戰を始むるや、最無趣味なる野に於て開戦し給へり。パウエルもハリストスの十字架を己れに任ふ者に、邑より出づべき

を勧告す。いへらく我等は彼の辱を任ひ、邑外に出で、彼に就くべし。エウレイ十三の十三、何となれば、主は邑外に於て苦をうけたればなり。けだし人は世とすべし。世にある所のものより己を分離するや、其従前の習慣と従前の生活の有様とを速に忘れて、此等の爲に永く占有せられざらん。之に反して人を世と世の事物に近づかしむるにより、直に其智力を弱めんゆゑに、此の救濟的及び苦行的の戦に大なる進歩を爲すが爲に、特に協力して之を導くは何物なるを知らんこと。肝要なり。修道士の庵の貧しく、缺乏なる状態にあらんこと、修道士の爲に庵は空虚にして、安息の望を挑撥すべきものを一も畜へざらんこと。は有益にして、此戦に助くるなり。けだし人を懦弱ならしむる原因より遠ざかるときは、人は二様の戦に於て、即内部と外部の戦に於て危きを免れんか。くの如く安逸に資くるものを自から遠ざくる人は、其欲望を起すもの、の近きに居る者に比すれば、勞せずして勝利を得ん。けだしこゝには二倍の苦行あるなり。

人は其住所の整頓設備の爲に必要なるものを缺く時は、人の要求も易しく輕んせらるべく、其要求を適宜に充たさざる可らざる緊要の時に於ても、人は之を視るに慾望を以てせず、何等の微物を以ても體を悦ばしめずして、之を見ること或る輕ん

すべきものを見るが如くし、食に近づくも之を甘んずるが爲にあらす性を助けて、之を堅むるが爲にせんこと。かくの如きの勉勵は速に人を導きて憂ひす哀まざる意思を以て苦行に着手せしむるに至らんゆゑに、凡て修道士と戦ふものをば、之を避けんが爲に疾足して後を顧みず、彼と開戦せんとするものと交通せず、之を一見するだも節制して、もし近づき來るときは、出來得るだけ之に遠ざかるは、勉勵なる修道士に適當なり。予が此事を言ふは、たゞ腹の爲に言ふにあらす、すべて修道士の自由の誘はれ、且試みらるべき誘惑と戦ふにみちびき入れんとするものにつきて言ふなり。けだし人は神に來るときは、すべて左の件々を節制することを神と約束するなり。即婦人の面を窺はざること、美なる容顔を見ざること、何物に對しても願望を抱かざること、奢侈に耽らざること、裝飾せる衣服を見ざること、俗人が開設したるすべての陳列場を窺はざること、彼等の言説を聴かざること、及び之を好着せざらんことを約す。何となれば、慾念は凡て此等のものと接近するにより、大なる勢力を得て、苦行者を懦弱にし、其思想と企圖とを變せしむるによる。それ或る善なるものを一見するは、眞の熱心者の同意を喚起して、善を成すに傾かしむるならば、之と反對なる所のものも、心意を壓して、之を奴隸にする勢力を有すること、明なり。而

して黙想する心意と偶會するものは或る大なるものには非ずして、たゞ之を戦闘苦行に陥るゝのみなるも、これ亦既に大なる損失なり、即心意其ものを平安なる状態より混亂なる状態に隨意に陥るゝなり。

それ奮闘に於て試みられたる老苦行者の一人は、鬚なくして婦人の如くなる青年を認め、之を以て思念の爲に害ありとなし、其苦行の爲に毒なりとなせしならば、此聖人の入りて兄弟を接吻するを躊躇したりしを、誰か之を等閑視して、これ我が事にあらずと爲すを得ん、賢なる老人は熟々思ふやうもしたゞ、是夜に於て此處に之と相類する事のあらんを少しにても思ふならば、これ亦我が爲に大なる害とならん。とゆゑに彼は入らずして告げていへり、子よ、予は恐れず、さりながら何の爲に予は徒らに自己に向つて戦を起すを願はんや、之と相類する何事をか想起するは、心に大なる混亂を生せん、餌は此身の各肢にかくるゝありて、之により大なる戦は人に臨まん、されば人は自己を保護して、其來らんとする戦をば己の爲に緩うして、逃走を以て救はれんこと、肝要なり、然れども人よ、何事か接近し來るときは、たとひ己を善に強ゆといへども、常に之を見且は之を願ひつゝ、早くも危きに瀕せん。

地中には多くの埋没せる薬物を見るべきも、夏は炎熱の故に何人もこれを知らず、

然るに滋潤至りて清涼なる空氣の力に觸るゝ時は、各薬物の地中何處にか埋まりしものあらはるゝなり、かくの如く人も黙想の恩寵と節制の温暖に居るときは、實に多くの慾念より休止せん、然れどももし世事に關涉するならば、其時各慾念は起りて、其首を昂るを見ん、矧や安息の香氣に觸るゝ時に於てをや、予が之を言ふは、此肉體に居る間、死せざる間は、誰も自負に陥らざらんが爲なり、且予はすべて邪なる生活にみちびく所のものを避け、且之に遠ざかり、苦行的戦闘に於て大に人に助くる所のものを示さんと欲するなり、或る想起の我等に耻をかうむらしむるものを畏るゝこと、又之と同く良心を蹂躙せざることを、之を輕んぜざることは、常に我等に肝要なり、終に我等は身體を一時野に遠ざくるを試み、之をして忍耐を得せしめん、しかれども最重要なるは、おのゝ(此事は各人の爲に心を痛ましむべしといへども、之が爲に人は最早何も恐るゝ所あらざるべし)何處にありとも、戦の原因となるものより遠ざかるに盡力するにあるべし、これ需要が生じ來らん時、其要求を充たすべきものゝ近きにあるがため、之に陥るを免れん爲なり。

問 種々の引誘を自から絶ちて苦行に入る者は、罪と戦ふに如何なる起初を爲し如何に奮闘し始むべきか。

答 すべて罪と欲望とに戦ふが爲に起初となるべきものは勞苦と儆醒と禁食と
なることは衆人の知る所なり、矧やもし誰か我等が内部に居る所の罪と闘ふに於
てをや、此の見えざる戦を作す者等が罪と欲望とに對して之を憎むの徴候は此を
以て認らるべくして、彼等は禁食を以て之を始め、其後夜間の儆醒は苦行に助くる
なり。

禁食と儆醒の事

畢生の間此一對と交ることを愛する者は貞潔の友とならん、腹を安んじ、睡眠を以
て己を懦弱にして淫慾を燃すは萬惡の始なる如く、禁食と儆醒と眠らずして神の
奉事を行ひ、終日終夜身を十字架に釘して、睡眠の甘きに反對するは神の聖なる途
とすべての道德の基なり、禁食はすべての道德の保障なり、奮闘の始なり、節制者の
冠なり、ハリステアエンの首途なり、祈禱の母なり、貞潔と善智の源なり、默想の師な
り、あらゆる善行の率先者なり、光を願ふは健全の目に適する如く、祈禱を願ふは思
慮を以て守らるゝ禁食に適す。

もし誰か禁食し始むるならば、最食是時より智を以て神と共に交はるを願望せん。
けだし禁食する體は全夜を床上に寢通すに堪ふる能はざればなり、人が其口に禁

食の印を押さるゝときは、其意思は痛悔を學ぶべく、其心は祈禱を流すべく、其面に
愛色ありて、耻づべき思念は人より遠ざかり、其眼中に欣喜の色は見えざるべし、彼
は淫慾と空談の敵なり、思慮深き禁食者が惡慾の奴隸となりしことは未だ曾て見
たる者あらざりき、思慮を以てする禁食はもろくの善の爲に廣大なる第宅なり、
之に反して禁食を等閑にする者はすべての善を動搖せしめん、何となれば禁食は
最初食を嘗むるとき、預防の爲に我等が性に與へられたる誠命にして、禁食を破り
し爲に我等が造成の始は墮落したりき、さりながら苦行者等は神の法を守るを始
むるならば、最初の貶黜の成れる其ものよりして神を畏るゝの畏れに大に進歩す
るを始めん。

救世主も世にイオルダンの河濱に現はるゝや、此より始めたまひきげだし、洗禮の
後神は彼を導きて野に至り、彼處に於て彼は四十日四十夜禁食せり、之と同く凡て
救世主の跡を慕ふて出づる者等も、其苦行の始を此基上に確立せん、何となれば禁
食は神の備ひ給ひし武器なればなり、ゆゑにもし此を等閑にするならば、之が爲に
誰か叱責を被むらざらん、もし立法者が自から禁食するならば、其法を守る者は誰
か禁食せざるべけんや、此に由て見るに人間は禁食に至る迄は勝利を知らずして

魔鬼も未だ曾て我等の性により攻撃を試みざりしが、此武器の爲に彼は先づ弱りぬ。而して我等の主が此勝利の大將となり及び家子となり給ひしは第一勝利の榮冠を我等の性の首に加へん爲なり。ゆゑにもし魔鬼は人類中何人に於てか此武器を見るならば、此反對者と苦虐者は即時に恐を生ずべく、救世主の爲野に於て撃敗せられしとに直に想到し之を記憶して、其力は挫折せらるべく、我等が元帥を以てわれらに與へられたる武器を望むは彼を燒盡さん如何なる武器は之より有力なるか、狼惡の靈と奮闘するに當り心に勇氣を添ふるはハリストスの爲に飢うるに如くものありや、げだし魔鬼の軍の人を圍むに當ては、身體を勞らし且苦しむる程心は希望を以て満たさるゝなり、禁食の武器を着るものは何れの時にも熱心を以て烈しく燒かるゝなり、げだし熱心者イリヤも神の法律に熱心し始むるや、此行爲を務めたりき、禁食者は之を獲たる者に神の誠命を想起せしむるなり、彼は舊き法律とハリストスを以て我等に與へられたる恩寵の間の仲保者なり、禁食に等閑なる者は他の苦行に於ても懦弱怠慢無力にして、其靈魂を弱らすの始と悪しき徴候とをあらはすべく、彼と戦ふ者に勝利の機會を與ふべし、何となれば裸體にして武器を持たず、苦行に出づればなり、ゆゑに勝利なくして戦闘より退かんこと明なり、

何となれば彼の肢體は禁食に飢るの溫情を以て包まれざればなり、禁食はかくの如し之を務むる者の心は毅然として凡の猛烈なる慾を逆へて之を反抗せんとす。多くの致命者の事を傳へ言ふあり、彼等は致命の榮冠を受けんを期する日に當り或は默示により、或は其朋友中或者の報告により之を豫知するや、全夜何物をも食はず、晩より朝に至る迄眠らずして祈禱に立ち、詩頌、歌、章、靈賦を以て神を讚美しつゝ、愉快と欣喜とを以て其時刻を待ちしこと、或る婚姻に豫備する者の如くし、禁食に於て劍を迎へたりと、ゆゑに見えざる致命者の行に召されたる我等も、成聖の冠を受けんが爲に徹醒すべく、我が身の一肢體をも又一部分をも辭する兆候を其敵に示さるべし。

問 或者は此等の行爲を屢し多くの者も多分之を行爲しつゝ、あらんも寧靜と慾の鎮止と思念の平安を感せざるは何故なるか。

答 兄弟よ、靈底にかくるゝ慾は肉體上の勞苦のみにては矯正せられず、肉體上の勞苦は常に五感によりて起さるゝものと思ふ意思を止めざるべし、此等の勞苦は人を欲望より保護して之に勝たしめず、魔鬼の誘惑よりも人を保護すれども、靈魂に平安と寧靜とを得しめざるなり、げだし動作と勞苦とは默想と聯合一致し、外部

の感覺に擾亂熄みて若干時間容智の行爲に止まる時は靈魂に無欲を與ふべく地にある肢體を殺して思念の安息を與へん之に反して人は人々と交際し得ることを奪はれずして其肢體をも自己をも意思の衰弱の爲に自己に集中するに至らざる間は己の慾を確知する能はざるべし默想は聖ワシリイの言ふ如く靈魂を淨潔にするの始なりけだし外部の肢體に於て外部の擾亂と外部に於る引誘が熄む時は智は外部の引誘と高超とより自己に歸りて自己に安んじ心は覺醒して内部心靈上の思を研究せんゆゑにもし人は善く此に堅立するならば漸々心靈上の淨潔に進行するを得るに至らん。

問 靈魂は戸外に居る時に於ては潔めらるゝ能はざるか。

答 樹は毎日灌がるゝならば其根は何れの時か乾かん器中に於て毎日加へらるゝならば何れの時か滅せんそれ淨潔は人々と交る自態の交際を知らずして此習慣を棄つるに外ならずんば舊き習慣の記憶即惡癖の認識を實際自己を以て或は他人を以て五感に頼り之を己れに新にする者は何の時か其靈魂の清潔になるを望むべけん其靈魂は何れの時に之より潔まるを得るか或は彼は何れの時外部の抵抗より免れて己を察するを得るか心が日々汚さるゝならば人は汚穢より潔め

らるべきか人は外部の勢力の運動に對抗する力あるなく軍營の中にありて頻繁の戦報を聞くを日々待つあらば心を潔むる能はざるにあらずや然らば如何して人は其靈魂の爲に平和を宣言するを取すべきかされどもし此より遠ざかるならば先づ第一に内部の怒濤を少しづつ鎮靜するを得ん川は上方を塞がれざる間は下方の水は涸れざらん人は默想に入るときは靈魂は諸慾を辨別して其智慧を聰明に試みるを得ん其時は内部の人も靈的行爲に覺醒せられて靈中に花咲く神秘なる智慧を日にますます感知せん。

問 人は如何なる確實の指示又は近き徴候により靈中に隠れたる果を自から見るを始めたるを感知すべきか。

答 誰か強ふることなしに流れ出つる多涙の恩寵を惠與せらるゝ時感知せんけだし智の爲に涙を置かるゝは形體に屬するものと靈神に屬するものと慾に従ふ状態と淨潔との間に置かれたる或る界限の如し人は此賜を受けざる間は其行は猶外部の人に成るのみにて内部の人に隠れたる者の勢力を人は未だ全く感せずるなりけだし人が此世の形體に屬するものを棄つるを始め此界限を踏えて性中實に内部に屬する者のあるを認むる時は速に此の涙の恩寵に達せん而して此涙

は神秘なる生涯の第一の院に始まり、人をして神の愛の完全に上らしむべくして、人が漣々たる流涕により、食にも飲にも涙を交へて泣飲し始むるに至る迄は、いよゝゝ進歩する程益々此恩寵に富まざるゝなり。

これぞ智が此の世界より出で、彼の靈的世界を感知したる確實の徴候なる。然れども人は智を以て此の世界に近づけば、近づく程此涙は減少すべくして、智が此の世界に全く止まるときは、此涙は全く奪はるゝなり。これを人が怒中に葬ひられたる徴候なる。

涙の區別

燒盡す涙あり、又肥太らす涙あり。ゆるにすべて罪を悲むにより心の眞髓より出づる涙は、肉體を乾かして之を燒盡さん、然れども涙を注ぐ時に當り、靈中に主たる所の其ものも之より害を感ずること稀なりとせず、人は先づ必ず涙の此階段に入らざるを得ざるべし、然れども人の爲に第一の階段より更に愈れる第二の階段に入るの門戸は、之を以て開かるべくして、これを人が憐れを受くる喜樂の方面なる。これは最早善智によりて注がるゝ涙にして、此涙は肉體を飾りて之を肥太らすべく、強ひずして自然に流れ出づるものにして、已にいひし如く、これは人體を肥太らすのみならず、之が爲に人の容儀も變せられん、けだし録して言へり、心に喜樂あれば顔色よろこばし、心に憂苦あれば氣ふさぐ、箴言十五の十三。

問 使徒が「ハリストスと共に復活せしならば」コロサイ三の「一」といへる靈魂の復活は如何なる意味を含むか。

答 使徒は「暗より光の照るを命せし神は我等の心を照せり」コリント後四の六と、いひて、舊きより出づるを名づけて靈魂の復活といふべきを示せり、是即舊き人に屬するものは一もあらざる新らしき人の生出することなり、録していふ如し、彼に新しき心と新しき神とを與ふと、イエゼキイリ三十六の二十六、けだし其時ハリストスはハリストスを識る睿智と默示の神を以て我等の中に像らるゝなり。

問 默想を勤むるの力は、簡短に言へば如何なるか。

答 默想は外部の感覺を滅殺して内部の活動を喚起す、然れども外部に屬するものを勤むるは之と反對なるものを生じ、外部の感覺を喚起して内部の活動を滅殺せん。

問 何物か異象と默示の原因たるや、けたし、或者は異象を有すれども、或者は多く勞するに拘はらず、異象は其丈に彼には感徹せざるなり。

答 これが原因は多く之あり、其一は攝理的原因にして、一般の利益を以て目的とするなり、然れども他の原因は劣弱者の慰安と奨励と訓示とを以て目的と爲す而して第一此のすべては人類に對する神の憐れにより備へらるゝものなれど多くは左の三種の人類の爲に備へらるゝなり、或ひは純樸にして至て無惡なる人の爲或は完全にして聖なる或者の爲或は燃ゆるが如くなる神の熱心を有する者の爲に備へらるゝものにして、彼等は世をすてゝ之より全く脱し人々と共に社會に住するより遠ざかり、一切をすてゝ有形物體よりは何等の助も待たず、神の跡を慕ふて行きしによる、彼等は其状態の孤獨なるにより、突然恐れを生ずべく、或は飢餓の爲疾病の爲、或は或る事情の爲、又は患難の爲に死の危きは彼等を圍まんより、彼等は殆ど失望せんとす、ゆゑにかくの如き者等には慰籍の來るあれども、勞苦を以て彼等より大に超越する者等に慰籍のあらざるは、之が第一の原因は缺點の有ること無きことによる、即良心の缺點の有る無きことによるなり、然れども第二の原因は必ずや次の如くなるべし、もし誰か人間の慰籍或は何か有形物體よりする慰籍を有するならば、其者には一般の益の爲或は攝理に屬するもの、外かくの如きの慰籍はあらざるべし、我等は通世者につきて言を爲す、ゆゑに神父等の一人を以て此事の證者

とすべし、彼は慰籍を祈願したりしに、左の言をきけり、曰く汝の爲には人間の慰籍と人々との會話にて足れりと。

これと同様他の或者も通世者の身となりて、通世的生活を送りしときは、恩寵の慰籍を以て日々自から樂めりしかれども、世と接近するや、例の如く慰籍を尋ねたりしも得ざりければ、之が理由を示されんことを神に願ふて言ひけるは、主よ、恩寵の我より離れたるは、主敬職の爲にあらざるか、然るに彼に告げていへり、否之が爲にあらず、神は野に居る者等を慮るにより、かくの如きの慰籍を彼等に賜ふなりと。

けだし人類中何人が有形的慰籍を有すると共に、恩寵に屬するものをも受くることは上文にしろし、如く、かくの如き場合に於て一の攝理する者にのみ知らるゝ、神秘なる攝理によるの外は、能はざるなり。

問 異象と默示とは同じきか、或は然らざるか。

答 然らず、却て彼等には差異あり、彼と此とは共に默示と名づけらるゝことも、屢々之あり、けだし神秘なるものを異象によりて顯はさるゝにより、すべての異象は默示と名づけらるゝ然れども、默示は異象と名づけられざるなり、默示といふ言は意識せらるべきものと、智力を以て試さるべきもの、且は想像せらるべきものに、社々

用ひらるゝなりされど異象は種々の方法によりて之あるべし例へばいにしへ舊約の人々にありし如く形像又は豫象に於てするあり深睡に於てし或は覺醒なる状態に於てするあり而して或時には全くの的確を以てすれども或時にはたとへば幻影に於てする如く多少明白を欠くことありゆゑに覺醒なる状態に於て見るか或は睡眠に於て見るか異象を有する者自からも之を知らざることしばしばあり或は救助の聲を聞くこともあるべく時としては最顯然として面り相對して見且談じ且問ふて問の爲に答を得ることもあるべし聖なる能力は之に堪ふる者にあらはれて其者に默示を與ふるなり而してかくの如きの異象は極めて荒涼寂寞たる原野の地の人類に遠ざかりて人の之に必要を有することの免れざる處に於て之あり何となれば其處よりは彼に他の助けも慰藉もあらざればなり然れども智力を以て感知せらるべき默示は淨潔に由り易く受けらるべくしてたゞ完全にして練達なる者に之あるなり。

問 誰か心の淨潔に達せしならば其徴證は如何なるか又其心の淨潔に達したるを人は何時認識するか。

答 誰か悉くの人を善視して彼の爲に何人も不潔汚穢なる者と見へざる時は實

に彼は心にて淨潔なりけだし善なる目は惡を見ず(アウワクム一)の十三といへる言の如くならずんば如何して我等は誠實の心より衆人を一様に尊視して己より愈れりさせよ(フリーリッピ二)の三といへる使徒の言に的應せんや。

問 淨潔とは如何なるか其界限は何處にありや。

答 淨潔とは世に人性を以て想出せられたる知識の悖理なる方法を忘るゝ是なり然れども此等より免れて其外に立たんとせば視よ其界限は左の如くなるべし即人が其性の元始の醇樸と元始の無邪氣とに達して怡も小兒の如くになりたゞ小兒の缺點のあらざること是なり。

問 此の階段に誰か昇ることを得るか。

答 然りけだし視よ或者等は此度に達せりたとへば父ソシイの如きも此度に達して門徒に左の如く問ふに至れり言へらく予は食せしや或は食せざりしや又他の或神父も此の如きの醇樸に達して殆ど小兒の如き無罪に至りぬけだし此世にあるものをすべて全く忘れたりゆゑにもし門徒等が止めざりしならば領聖に先だちても食せしならんより門徒等は彼を小兒の如く領聖にみちびくに至れりしかれども彼は世の爲には小兒なりしも神の爲に靈魂は完全なりき。

問 黙想の庵に在りて黙想到に専なる苦行者は何を業とし何を沈思するを要するか其智を空想の爲に暇あらしめざらん爲に彼は不斷何を爲すべきか

答 人が庵中に在て死者の如くなるを得るときは業務と沈思とのことを問はんや勉焉として心の安定なる人の獨り自ら居るあるや如何に己を導くべきを問ふの要あらんや修道士には庵中に在て哀泣するの外他の如何なる業務ありや彼に哀泣より他の思想に轉ずる違ありや且如何なる業務は此よりも更に愈れるか修道士の寓居と其獨棲とは人間の喜より遠ざかる墓に居るに譬ふべくして其勤めは即哀泣なるを彼に教ふるなり而して其名の意義も彼を同事に喚起して同く之を信せしむるなり何となれば彼は悲嘆する者と名づけらる即心に悲哀を満たさるゝ者と名づけらるればなりすべての聖人は哀泣に於て此生命より移れりそれ諸聖人さへ哀泣し此生命より移るに至る迄其目は常に涙に満たされしならば誰か哀泣せざるべけんや修道士の慰安は其哀泣によりて生ず夫れ完全なる者又は凱旋したる者さへ此世に於て泣きしならば疵に満たさるゝ者は如何ぞ泣き罷むに忍ぶべけんや其目前に横たはる死者ありて彼は自から罪の爲に殺されしものなるを目撃する者に涙を益用すべきを教ふるの要ありや汝の爲に全世界より

も貴き汝の靈魂が罪に殺されて汝の目前に横たはらば汝に哀泣を催さしめざらんや故にもし黙想を始め忍耐を以て之に専らば哀泣にも専らなるを能くすべきは無論なりゆゑに我等に哀泣を賜はらんが爲に其心中に於て屢主に祈らんけだし他の賜よりも最善にして最愈れる此恩寵を求め得ば其助により淨潔をも得ん然してもし此を得ば我等が此生命より出づる迄は最早淨潔を我等より奪はれざるべし。

ゆゑに心の清き者は福なり何となれば彼等は此の涙の甘きを樂まざるの時あるなく之によりて彼等は常に主を見ればなり彼等の目に涙ある間は彼等は其祈禱の高きを以て神の默示を見るを賜はるべくして涙なき祈禱は彼等に之あらざるなり泣く者は福なり彼等は慰められんとすればなり「マトフイ五の十一」と主の述べられし言は亦此意味を含有すけだし泣くによりて人は心靈の清きに達せんゆゑに主は「彼等は慰められんとすればなり」と言ひて其慰の如何なるを説明せざりきけだし修道士が涙の助により慈の範圍を驗えて心の清潔の平原に入るときはかくの如きの慰は彼を迎へんゆゑにもしこゝに慰を尋ぬる者等の中誰か此平原に達し此處に於て得られざる慰を彼處に於て迎ふるならば其時彼は泣くにより

て如何なる慰を自から期待したると、神は泣く者の清潔の爲にいかなる慰を與ふることを終に了解せん、けだし不斷に泣く者は、愆に擾さるゝ、あたはざればなり、涙を流して哀泣するは、これぞ無愆なる者の賜なる、而して一時泣て嘆息する者の涙さへ、彼を無愆にみちびくのみならず、智力をも愆の記憶より全く潔めて、彼を自由ならしむるならば、認識と共に日夜此行爲を練習する者のことは、之を何とかいはんゆゑに、獨り己の靈魂を此行爲に供へたる者の外は何人も、哀泣によりて生ずる助を知らざるべし、凡の聖人は、此門口に向ふ、何となれば、慰藉の方面に入るが爲の門は、涙を以て其前に開かるればなり、而して至仁にして救濟的なる神の跡は、此方面に於て默示により顯はさるゝなり。

問 或者は身體の薄弱の故に不斷に泣くことを得ず、智を保護するが爲に何を有すべきか、けだし智が何物にも占有せられざる時は、之に對して愆は起らざればなり。

答 それ何等の放心にも遠ざかる遁世者の身を以て、其心は生活上の爲に占有せられずんば、愆は心に蜂起して、苦行者を擾す、あたはざるべし、たゞ彼は怠慢にして其本分に不注意なることは、あらん然れども、もし彼は神の書を研究練習するなら

ば、其旨趣の討求に特に心を奪はれつゝ、愆の爲には少しも動搖せざるものとなりて存せん、けだし神の書に曉通することの益長じて、其根を張るときは、空想は彼より逃るべくして、其智は聖書を読み或は讀みし所を考へんと欲するの望より離るゝ能はざるべし、されば深き原野の沈黙の中に在て、聖書の爲に心を奪はるゝ彼は、其業を樂む最大なる悦樂に因り、現生には少しの注意も向けざるべし、此により自己と其性を忘れて、恰も憤心したる人の如くなるべく、此世の事はすべて記憶せずして、思想は神の大なることの爲に特に占領せられん、されば心を此に沈潜して言はん、光榮は彼の神性に歸す、又言はん、光榮は彼の奇跡に歸す、奇異なる哉、非常なる哉、彼のすべての行事は、彼は予の貧寒を如何なる高處に昇せたるか、我等に何を學ぶを賜ひ、意思を如何に大膽ならしめて、我が靈を樂ましむるか、此奇跡に意思を向けて、常に之に驚かさるゝ、彼は不斷醜陋の中にあること、復活の後の生命を既に味ふ如くなるべし、何となれば、默想は此恩寵に最大に助ければなり、けだし彼の智力は默想に於て求め得たる平安と共に自から止まるを得べきを看破するのみならず、併て之を以て喚起せられて、其生命の秩序と適應せし所のものを記憶せん、けだし來世の光榮と彼の靈的生命と神とに止まる義人等の爲に、其望の如く備

へらるゝ凡ての幸福と其新なる興復とを心に想像しつゝ、此世にあるものは思にも記憶にも存せざるべし然れども此を以て酔はしめらるゝや更に直覺を以て其處より彼が自から生在する所の此世に轉回し來るときは愕然として驚て言はん「嗚呼深い哉究む可らざる神の富と智慧と知識と聰明と睿智と攝理よ其定は如何に測り難く其道は如何に究め難きや」と(ロマ十一の三十三)けだし何れの時彼はかくの如き奇異なる別世界を備へて之にすべての聰明なる實體を導き入れ彼等を終りなき生命に守り給ふか何の故に彼は此の第一の世界を造り之を擴大にして種類の群集と萬物の許多とを以て之を此の如く富まし彼處に於て多くの慾の原困と慾を養ふものと又之に抵抗するものにも位置を與へたるか而して何の故に最初より我等を此世界に置き世に長壽せんを愛するの情を我等に固めたりしも俄に死を以て我等を之より奪ひ去り少からざる時の間無感覺無動作を以て我等を守り我等の形像を滅し我等を融解し掛廻して之を土と混じ我等が組織を破壊し腐敗滅盡して人の性中一物も全く残らざるに至るか然れども崇拜せらるべき睿智を以て定めたまひし時に至り欲するあるやたゞ彼にのみ知らるゝ他の形像に我等を再興して我等を他の状態に導き入るゝは何故なるかこは我等人々の

希望する所なるのみならず此世界に必要を有せずして其性の非常なるにより僅に完全を缺くところの最聖なる天使等も我等諸族の塵より起きて其敗壞の新にせらるゝとき我等が敗壞より起るを待つげだし我等の爲に彼等も入るを禁せられたれば彼等も新世界の戸の一回開かるゝを待つなり而して我等を苦しむる肉體の重きは釋かれたるにより此受造物(天使等も我等と共に安んずるを得ること)使徒のいふ如しげだし此世の構造はすべて全く破壊して我等が性は元始の状態に回復するにより受造物自らも神の諸子の顯はるゝを俟つ即敗壞の奴より釋かれて神の諸子の光榮の自由に入らんこと是なり(ロマ八の十九、二十一)而して此より其智力を以て昇り此の世界の合成に先だちて如何なる受造物も天も地も天使も存在にみちびかれたる何等の物も未だあらざる時と神が獨一の恩恵により俄に一切を無より有となしてすべての物が神の前に完全にあらはれたる時に至らん然るに彼は再び其智力を以て神の悉くの造成に下り神より造を受けたる物の奇々妙々と神の所爲の睿智とに注意を向け愕然として自から判断して言はん「吁奇なる哉彼の攝理と照管は何等の概念よりも高きこと幾ばくなる此の受造物即此の種々様々なる物體の數へ盡されざるの多きを如何して彼は無よ

り有となしたるか然るに又此の奇異なる好順序と天地萬有の此美麗と受造物と
 時と年の整然たる此運行と晝夜の此配合と年と共に合する空氣の變換と地より
 發萌する殊異多様な此花卉と此の都府の美麗なる築造と其中に最壯麗に飾ら
 れたる宮殿と此の人類の敏捷なる活動と彼等が世界に入りしより出づるに至る
 迄勞苦を任はしめられたる此存在とを滅して此の受造物を破壊するは何故なる
 か而して此の奇異なる秩序は俄に熄んで他の世界至り此の最初の造物に於る記
 憶は何人の心にも全く浮び來らずして他の之と異なる種類と他の所思と他の配
 慮とを生ずるは何故なるか之と同一人性は此の世界の事と其生活の最初の状態
 の事とは全く想起せざらん何となれば人智は彼の状況を直覺するに密着して人
 々の智は血肉の戰に再び歸るの邊あらざればなりけだし此世の破壊と共に來世
 は直に始まればなりされば悉くの人は其時左の如く言はん嗚呼母よ生み且養ひ
 て智慧附けたる其子の爲に忘れられたる者よ彼等は瞬間に他の懐に集められて
 孕まざる者と決して生まざる者の眞の子となれり孕まず生まざる者よ謳歌せよ
 オサイヤ五十四の一地が爾の爲に生みたる子の爲にと言はんとす
 其時彼は恰も大なる熱中にあるものゝ如く沈思して左の如く言はん此世は猶幾

時存するか來世は何時始まるか此室に此の状態を以て寝ねて肉體が塵と混せら
 るゝは猶幾時あるか彼の生命は如何なるか此の性は如何なる状態に復起して組
 織せらるゝか彼は新なる造物に如何様變化するか此等の事を沈思するや彼は
 大悦駭異寂然沈黙に至らん而して彼は此時に起つて膝を屈め滂沱たる涙と共に
 獨一睿智の神に感謝し常に最睿智なる作爲に於て頌美せらるゝ者に讃榮を獻げ
 んかくの如きことを賜はりし者は福なる哉豈も夜も此の如きの勤行に専なる者
 は福なる哉其生命の日子を擧げて此等の事を沈思する者は福なる哉然るにもし
 人は其默想の始めに於て心意の高超の故にかくの如き直覺の力を感せずして上
 文に述べたる如き神の奇跡の力に上進する能はずんば煩悶を來すなかれ默想的
 生活の安靜を棄つるなかれけだし農夫も種子を種くと共に直に穂を見るべきに
 は非ずして種きし後にも憂愁と勞苦と肢體の衰弱と同輩に遠ざかると家人に分る
 ゝ等の事あるべし然れども此を忍耐するときは當事者が樂み且躍り且喜んで欣
 々たる新なる時期の至るあらん
 然るに是何の時なるか彼が己の汗を以て獲たる餅を食ひ沈黙を以て其の冥想
 を守るを得るの時ならんけだし沈黙と沈黙を以て忍耐し得る此冥想とは大にし

て終なき愉快を心に喚起して、其智を言ふべからざる驚異にみちびかんゆゑに忍耐して此に止まる者は福なり、何となれば此の神出なる泉は其目前に開けて彼は之を飲みて樂むべく、晝夜何れの時にも何れの刻にも常に之を飲むをやめずして全く暫時なる此生命の終と最後の際に至るべければなり。

問 此の行為即黙想の行為のすべての勞に於て首要なるものは何なるか、けだし此に到達したる人は最早其生涯に於て完全に達したるを知るを得ん。

答 人が連綿として断えず祈禱に止まるを賜はるとき是なり、けだし此に達せしならば人はすべての道徳の高點に昇り最早聖神の住所となれるなり、之に反してもし誰か撫恤者の此恩寵を疑なく受けざりしならば、此の祈禱に止まることを自由に通ぐる能はざるべし、何となればすでに言ひし如く人類中何人にか神の住する時は彼は祈禱を止めざるのみならず神自らも常に祈禱すればなり、ローマ八の二十六、其時は人は睡眠の状態に在るも、覺醒の状態に在るも、祈禱は其心中に於て断えざるべく、食するか、飲むか、寝ぬるか、何を爲すか、且は深睡の中にありとも、祈禱の馨香と其蒸熱の氣は其心中に易しく發出せん、其時は人より祈禱は離れざるべく、如何なる時も祈禱せざるなかるべく、たとひ外部は沈黙すとも、之と同時に人は神

の奉事を密に行ふなり、けだしハリストスを懐抱する人士の一人は清き者の沈黙を名づけて祈禱といへり、何となれば彼等の思念は神聖なる活動にして、清き心と智との活動は神秘なる者を神秘に讃頌する物靜なる聲なればなり。

問 靈的祈禱とは如何なるか、且如何様に之を苦行者に賜はるか。

答 心靈上の活動は嚴重なる無玷と淨潔との爲に聖神の能に與るものとなるを得べし、而して之を賜はるものは數千人中一人ならん、何故なれば是は未來の狀況と其生涯の奧秘なればなり、性は擧げられて、此處にあるものには何等の感動もなく、記憶もなく、無動作なるものとなりて存せん、靈魂は祈禱を以て祈願せず、然れども其感覺に於ては、人間の理解に超越して、たゞ聖神の力を以て了解し得らるべき、彼の世の靈に屬する物を感じせん、是れ即聰明なる直覺なり、こは其始を祈禱より借るといへども、祈禱の働にはあらず、又其穿鑿にもあらざるなり、けだしかくの如き人々の中或は之によりて最早淨潔の完全に達したる者ありき、而して我等上文に述べし如く、彼等が内部の活動は祈禱にあらざるの時あるなし、ゆゑに聖神の來り臨むときは斯の如き者等を常に祈禱に於て發見すべくして、此祈禱により、彼等を靈的現象と名づけらるゝ直覺に昇せしめ、けだし彼等は長き祈禱の方法にも、其起

立にも、又其勤行の順序にも必要を有せざるなり。彼等の爲には神を想起するを以て足るべくして、直に神を愛するの愛に捉へらるゝなり。さりながら祈禱を尊敬するを爲すや、祈禱に立つことをも、彼等は全く等閑視せずして、速綿として已まざる。祈禱の外に指定せられたる時間には起立するなり。

けだし我等は聖なるアントニーが第九時の祈禱に立ちて、其智力の上昇を感じたりしを知る。又他の或神父は祈禱に立つや、手を擧ぐると共に無限の悦に達して之に止ること四日間なり。其他多くの人もかくの如き祈禱の時に當り、神を念ふ強き記憶と神に對する大なる愛とに捉へられて無限なる悦に達したり。然れども人の之を賜はるは罪に反對する主の誠命を守るにより、内部に於ても外部に於ても罪を脱するの時にあるべし。もし誰か此誠命を愛して秩序正しく之を益用するならば、其者の爲に人間許多の行爲より免れて自由を得るは緊要の事となるべし。是即言はゞ體を脱して體の外に居ることにして、是は性につきて言ふにあらず。要求につきていふなり。誰か立法者の模範にしたがひて生活し、其誠命に導かるゝならば、其者は罪に止まること能はざるべし。ゆゑに主は福音經に於て誠命を守りし者を住所となさんことを、其者と約束し給へり。

問 神の多くの果の完全は如何なるか。

答 人が神の完全なる愛を賜はる是なり。

問 之を得たるを人は何により確知するか。

答 人の智覺に神を念ふ記憶の起るあるや、其時人の心は直に神を愛するに喚起せられて、其目は豊に涙をそゝが、んげだし愛は愛せらるゝ者を想起するにより、感涙を起すを例とす。然して神の愛に居る者は決して涙を奪はれざるべし。何となれば神の記憶を涵養する所のものに決して乏しきを告げざればなり。故に夢中にも神と談話す。けだし愛は通常かくのごときものを生じて、彼は此生活に於る人類の完全なればなり。

問 人が求め得たる多くの勞苦、衰弱及び奮闘の後にも、驕傲の念慮は人を攻撃するを憚らざらん、何となれば彼は人の徳行の美を借りて己の食となし、人が任ぶ所の勞の大なるを計算するによる。然らば人は如何して其念慮に勝ち、之が爲に征服せられざる程の堅固を其心に求め得べきか。

答 誰か神より離れ落ること枯葉の樹より落つる如くなるを認識する時は己の靈魂の力を了解せん、即主が其助を止め、彼をして獨り魔鬼との戦に入らしめ、通常

奮闘者と關係して其戦に助くる如く彼と共にするを爲さるると同時に彼は自己の力を以て此德行を求め得たるや其の悉くの戦を耐忍し得たるや否を認識する時は彼の力は顯はれん之を確言すれば打撃と彼の困苦とは明了にあらはれんけだし諸聖人を保護して之を固むる神の照管は常に彼等と偕にするなりもし苦行と致命的の苦と其他神の爲に遭遇し神の爲に大に忍耐する患難に居るならば此照管を以て人類の種々なる階級に打勝たん此事は明白顯然疑なきなりけだし人々の肢體に不斷起りて之に憂をかうむらしめ之を打負すが爲に最も強き肉瘁の力を性は如何して征服するを得るかそれ他の人々は勝利を願ひ且之を愛すれども其有力なる抵抗に際しては勝を奏する能はずして反つて肉體上の痿感より日々に打撃を受け其靈魂の爲に困んで苦勞と悲哀と衰弱とに居れども汝はかくの如き困苦なる肉體の引力を易く忍耐して之が爲に大なる錯亂に至らざるを得るは何故なるかされば他の場合には苦を感じ易く荆棘の刺の爪を刺したる疵にさへ堪ふる能はざる肉體はもし天然の力以外に其苦みを反拒する他の力の他所より来るあらずんば鐵の斷割に打勝ち肢體の挫折と種々なる苦痛とを耐忍し人性に常なる如く痛苦の中に在て其差別をさへ感するあらずして苦難の爲に勝たれ

ざることを如何して能するか我等は神の照管の事に言及したるにより奮闘を以て人に超越する一報道の靈に益あるものを記憶の爲に引證するを懈らざるべし。フエドルと名づくる一少年あり酷刑に處せられて全身に苦みを受けたり人あり問ふて汝は苦痛を感じたるかといひけるに彼は答へて次の如くいへり最初は感せり然れども後に至り余は或る少年を認めたり彼は我が奮闘の汗を拭ひ我を堅めて苦行の時我に爽快を得しめたりといひき呼神の恵は何ぞ大なるや神の名の爲に奮闘する者に臨む神の恩寵は彼をして神の爲に苦難を喜んで忍耐せしむる爲に幾許接近するか。故に人よ汝に於る神の照管に感謝せざる者となるなかれ畢竟汝は勝利者にはあらずたゞ器械の如きのみにて主は汝に於て勝ち汝は勝利の名を無報にして受くることこの顯然明白ならば何れの時にも同様の力を願ひ勝ちて賞讃を受けて神を承認するを誰か汝に禁せんや人よ汝は世の造成より以來幾多の苦行者が此恩寵に感謝せざる者となりて生命の高きと其苦行の高きとより落ちたるを聞かざるか人間に於る神の賜は本來數多にして種々同じからざる程は受くる所の賜にも同じからざるありて之を受くる者の等級と適合するなり神の賜には縮少と卓越

ごあり、其賜は皆高尚にして奇異なりと雖も、光榮と尊敬とに於ては一は他に優越し、一の等級は他の等級より高し、而して己を神に献げて道徳上に生活することも亦同くハリストスの大なる賜の一なり。けだし多くの者は此恩寵により、人々に抽んじて神に献げられし者となり、神の賜に參與して之を受る者となり、選ばれて神に奉事し、聖務を行ふに相當する者となるを賜はりしを忘れ、其口を以て不神に感謝するに代へて、驕傲と高慢に離去りぬ、而して彼等は己を以て清き生活と靈的行爲とにより、神に奉事を勤むる爲に聖務を行ふの恩寵を受けし者とは思はず、却て神に恩恵をあらはす者の如く思ふ、然らば神が人々の中より彼等を抜きて、神の奥義を識るにより、其眞子となせるを彼等の當然に思慮するは何の時なるべきか。而してかく思慮するも、彼等は其全心を震盪せざるべし、矧んや彼等の先にもかく思慮せし者等が突然尊位を奪はれたると、主が彼等を其有したる大なる光榮と尊敬とより、瞬間に貶黜したるを見るに於てをや、而して彼等は不潔と放蕩と耻づべき行爲に離去りて、禽獸の如くなりぬ。けだし彼等は己の力を識らざるのみならず、神の前に奉事を行ひ、其國に入るを得て、天使の共住者となり、天使の如くなる生涯を以て神に接近するの恩寵を與へし者を、不斷其記憶に存せざりしにより、神は彼

等を其勤より、黜けり、而して彼等黙想を棄て、其生活の有様を變せしは、是れ神は之を以て、彼等が生涯に善き秩序を守り、自然と魔鬼と其他の反對の壓迫も、彼等を驚かさざりしは、彼等の方に依るには、非ずして、神の恩寵の力なるを、彼等に證示するものにして、此事の至難なるにより、世は容るゝ能はず、或は聞く能はざる所のものに、彼等が久しく止まりて、之を守り、勝つ所とならざりしを證したるなり、故に彼等には、或る力の伴ふありて、すべてに於て、彼等を助け、彼等を保護するが爲に、充分なりし、ことば論を俟たざるなり。しかれども、彼等は此力を忘れたるにより、使徒の言ふ所は、彼等に應せり、曰く、神の勤務の爲に、塵を配合せし主宰たる神を、其念に存するを願はざりしにより、彼等を戻れる心を、愾くに任せり、(ローマの二十八)されば、其迷認の爲に、彼等が汚辱を受けしは、當然なりき。

問 人々と同住するを俄に全く辭して、善なる熱心の爲に、人の居らざる恐るべき野に、突然離れ去るを敢てする者は、之が爲に、被覆又は其他の需要を有せざるに依り、飢えて死するの時あらざるか。

答 無言なる動物の爲に、さへ之を造るに先だち、住所を備へて、其需要の爲に、處る者は、其造成を輕んぜざるべし、特に神を畏れ、正直にして、彼に従ひ、好奇の心を以て

せざる者を彼は軽んぜざるなり己の意志を神に全く犠牲にする者は肉體の必用や艱難不幸の事は最早慮らざるべく隠れたる生涯に居り卑しき生活を送らんことを願ふべく患難を懼れずして却て清き生涯の爲に全世界より遠ざかるを以て愉快甘美なる事と思ひ丘陵山嶽の間に己を勞らして無言なる動物の中に漂泊者の如くして居るべく肉體を安んじて汚穢に充たさるゝ生活を送ることを肯せざるべし而して己を死に付して神に屬する清き行爲を奉はれざらんことを毎時毎刻悲んで祈禱する時は神より助をうけん神に光榮と尊敬は歸す彼は我等を清潔に守り聖神の恩寵の聖なるを以て我等を聖にして彼の名を榮せしむべし彼の聖なる名は清潔を以て世々に讃美せられんアミン。

第二十二 説教

試惑を恐るゝ身體は罪の友となる

或る聖人は言へり試惑を恐るゝ身體は之を極度に至らしめて其生命を奪はれんことを恐るゝが故に罪の友となると故に聖神は彼に死すべきを獎勵すげだし死

せずんば罪に勝たざるべきを知らばなりもし誰か主の住り給はんことを欲せば主に事ふるに其身を強ひ使徒が書せる神の誠命の爲に勞して其靈魂を使徒の録したる肉慾の行より守るべしガラタイヤ五の十九罪に關係する身は肉慾の行に安んずるも神の神は罪の結果に安んじ給はざるなりけだし身體が禁食と謙遜との爲に弱る時は靈魂は祈禱を以て強めらるゝなり身體が默想の苦厄に多く虐げられ刺戟と缺乏とを忍耐して其生命をも殆ど失はんとするときは汝に歎願して左の如く言ふを常とす曰く相當に生存する自由を少しく予に與へよ今や予は正しく行かん何となれば不幸を以て試みられたればなりと然るに彼に同情を表し彼を其厄より安んせしめて多少の安息を彼に與ふるならば彼は暫時は安んずといへども漸々媚を呈して汝に耳語し彼の媚は甚だ有力なり汝を野より離れしめんが爲に汝に告げて言はん世の近きに居るも好く生活するを得べし何となれば多くの事に試みられたるによる故に彼處に於ても今日導かるゝと同様の規則を以て生活するを得んたゞ予を試みよもし予は汝の意に適するものとならざるときは汝は歸るを得ん視よ野は我等より逃亡せざるなりと彼は大に歎願し多く約束を與ふるも彼を信するなかれ彼は言ふ所を履行せざるなり彼の願に應ずるとき

は汝を大なる墮落に投じ起て出来る能はざるに至らん。
 試惑により煩悶を生じて之に満たざるゝときは自己に告げて言ふべし汝は不潔
 と耻づべき生活を再び渴望す。然るにもし肉體は汝に告げて大なる罪は自か
 ら己を殺さんと言は、答て言ふべし、予は己を殺さん何となれば不潔に生活する
 能はざればなり。こゝに予の死するは予が靈魂の眞の死と神の爲に死することを再
 び見ざらん爲なり。予は寧ろ此處に放蕩の爲に死して惡生命を以て世に活きざら
 ん予は己の罪の爲に此死を自由に撰擇せり己を殺さん何となれば予は主に罪を
 犯したればなり復び彼を怒らしめざらん神より遠ざかる生命を予は如何にすべ
 きか此等の殘害を忍ばん天の希望より離れざらん爲なり。もし世に惡く生活して
 神を怒らすならば此世に於る予の生命を神は如何にすべきや。

第二十三 説教

黙想を愛する一兄弟に遺す書

予は汝の黙想を愛するを知り又惡魔が汝の心の望を知りて善行に口を藉り多く

の事を以て汝を累し善の多くの種類を含有する道徳を修る汝を挫折し且之を妨
 礙するに至る迄は己まざるを知るゆゑに善なる兄弟よ汝と密着の肢たる予は有
 益の言を以て汝の善なる望を助けんが爲に賢明道徳の人々より神父等の書より、
 及び自己の経験により自から得たる所のものを汝に書さんことを心懸けたり。け
 だし人は名譽も不名譽も輕んじて黙想の爲に凌辱罵詈損害又は打撃をさへ忍耐
 するなくんば笑具となるなくんば見る所の人々をして痴人愚者と思はしむるな
 らんば黙想の善なる企圖に止る能はざるべし何となれば人は或る緣由の爲に一
 度戸を開くならば惡鬼は此等の緣由中或るものを多くの口實により現はすを能
 めずして人々と限りなく會見するを頻繁ならしむればなり故に兄弟よもし汝は
 古の人が放心も分裂も分離も自から容忍せずして麻痺得たる所の黙想の道徳を
 確として愛し神父等に擬して彼等の行狀を自己に表はさんとするならばかゝる
 場合に於ては賞讃すべき願の達し得らるべきを發見せん彼等は完全なる黙想を
 至愛して近者の愛を失はざらんことをば慮らず彼等を安んせんが爲に力を用ふ
 ることを勉めず尊敬すべき人々と認めらるゝ者等との會見を避るを耻とはなさ
 ざりき。

かくの如く彼等は進行したりしも賢明にして達識なる人々は、彼等を非難して近者を軽んずる侮慢者とはせず、或は懶惰者又は理性を失ひし者ともなさずして、却て人々と交際するよりも黙想と遁世的生活を尊敬する者に對しては、彼等を辨解して言へること左の如し、曰く己の庵中に於て黙想の美を實地に學ぶ人の近者と會見するを避くるは、彼を軽んずる者が避くるをこくなるに非ず、黙想によりて拾集する果實の爲なり、試に問はん父アルセニイが何人にか遇ふあるや、逃奔して彼の爲に止らざりしは何の爲なるか、又父フェオドルは何人をか迎へしならば、其迎ふるや、劍を迎ふる如くなりき、彼は庵の外に在ても誰にも挨拶を爲さざりき、然して聖アルセニイは問安の爲に來りし者にさへ問安をなさざりき、けだし某神父あり、一日父アルセニイに遇はん爲に來りけるが、老人アルセニイは彼を己の從者と思ひ戸を開けり、然るに來者の誰たるを認むるや、其面を俯しぬ、而して來者が祝福を受けて去らんことを證言し、次で彼に起たんことを久しく懇願するや、聖者は之を峻拒して言へり、去らざる間は起たずと、而して其者の去るに至る迄は起たざりき、とも福者の此く爲せるは、げだし一たび彼に手を與ふるならば、再び己れに歸り來らざるが爲なり。

言の續きを見よ、然る時は汝はアルセニイを以て此神父或は他の人をば其微なるが爲に軽んじたれど、別人には其高位の爲に、偏頗をあらはして、彼と會話せしなるべしと言はざらん、之に反してアルセニイは小なる者をも、大なる者をも、すべての者を一様に避けたり、彼の目前にはたゞ一あるのみなりき、即黙想の爲には大なる人小なる人に論なくすべての人と共に交るを、輕んじ、黙想と無言とを尊崇する爲には衆人より責を受ることも辭せざること、是なり、大主教なる福フェオドルが聖者を見て尊敬を表せんとの意を有し、地方の裁判官と共にアルセニイを來訪せしことは我等の知る所なり、然るにアルセニイは彼等と共に坐するや、彼等がアルセニイの言を聞かんことを甚だ願ひしに拘はらず、少しの言を以ても、彼等の高位を尊ばざりき、而して大主教が此を請ふや、善なる老人は暫時沈黙して、其後言ひけるは、もし予は汝等に言ふならば、予の言を守るか、彼等答ふ、諾、以て同意を表せり、老人は彼等に告げて言ふ、もしアルセニイ此處に在りと聞かば、其處に近づくなかれ、老人の奇なる品性を見るか、彼が人間の會話を輕んずるを見るか、祝よ、これ黙想の結果を認識したる人なり、願者は此の聖世界の師にして、教會の首長たる者の來れることをば料らずして、左の如く思浮びぬ、予は世の爲に一次永遠に死せり、生者の爲

に死者は何の益やあると父マカリイも愛を満てる詰責をもて言ひけるは如何して汝は手を避くるかと然るに老人は奇なる賞讃すべき辯解をあらはし答て言へり予が汝等愛するは神の知る所なり然れども予は神と人々と共に一所に居るあたはずと彼が此の奇異なる認識に導かれたるは他の何人をも以てせしに非ずして神の聲を以てせりけだし彼に告げて言へりアルセニイよ人々を避けよ然らば救はれん。

閑散にして談論を好む人たりともアルセニイの言を顛倒して之を非難する程無耻なるものは一人もあらざるべし又之に逆ひ之を以て是は人間の想出にて黙想を益する爲に想出せるなりと言ふ者なかるべし反つて是は天上の教なり願くは我等はアルセニイに此事を告げられしを見て是は彼をして遁れて世に遠ざからしめんが爲にて兄弟よりも遁れしめんとの旨意には非ざるべしと思はざらん蓋彼は世を棄てたる後行て修道院に居り更に神に祈禱して問ひけるは如何にせば道徳を以て生活するを得べきか主よ如何にせば救はるべきか其途を我に示し給へと彼は思へり何か別事を聴くあらんとされど第二次にも亦同く主宰の聲をきけり曰く遁れよアルセニイよ黙せよ無言者となれ兄弟と面會して共に談するは

益多しと雖彼等より遁るゝ程汝に益あるに非ずと福なるアルセニイは神の黙示に於て之を受けまた世に居りし時に遁るゝことを命せられ其後兄弟と共に居りたる時にも同く此を告げらるゝや其時彼は善なる生活を得んが爲に世の俗人より遁るゝのみにては不充分なり悉くの人より一様に遁れざるべからずと確信し且認識したりきけだし誰か神の聲に反抗して之に逆言するを得るか然るに神聖なるアントニイにも黙示に於て次の如く告げられたりきもし無言者とならんことを願はいたゞワツイダに行くのみならず深く野の奥に至るべしと此によりて見れば神は我等に悉くの人より遁るゝを命じ神を愛する者が黙想に専なる時にさへかくの如く沈黙を愛すべきを命するならば誰か人々と共に談じ共に相近づくが爲に或る口實を設くるを得んや遁世と戒慎とはアルセニイとアントニイにさへ益ありしならば況て劣弱者には殊に有益なるにあらずや言を以ても面會を以ても助けんことを擧世必要とする其者を神の貴びしは彼等がすべての兄弟社會に助くるが爲なるよりも確言すれば全人間に助るが爲なるよりも黙想の爲ならば黙想は己を善く護る能はざる者の爲には殊に必要なるにあらずや予は他の或る聖人の事をも知る其兄弟病重かりけるに彼は別庵に籠居して出で

ざりき。けだし聖者は兄弟の病中己の憐情を制し來りて面會せざりしかば病者は生命の終りに臨み使者を以て左の如く言はしむ曰く今に至る迄汝は予に來らざりき然れども今は來るべし予が世を去るに先だちて汝を見ん爲なり或は夜間なれども來れ然らば予は汝を接吻して寢ねんと然れども福者は天性が我等相互の憐憫を常に促して意志の定限を踰えしめんとする此時にも肯んせずして言ひけるはもし出れば我が心は神の前に潔からず何となれば靈的兄弟を訪問するを疎にしてハリストスよりも天然を貴んずればなりと兄弟死して彼は終に遇はざり

故に何人も意思の怠慢により此事を能はざるが如く想ふなかれ神の照管を斥けて其黙想を破るなかれ之を空しきに歸するなかれ天然は如何に強くとも聖者は其天然に勝ちしならばハリストスの子の輕視せらるゝと同時に黙想を尊崇する時にハリストスは愛さるゝならば汝は此事に遭遇するるとき之を輕視する能はざる他の如何なる緊要ありや汝の心を盡し汝の靈を盡し汝の智を盡して全世界よりも天然よりも天然に屬するすべてのものよりも汝の主神を愛せよ(マトフイニ十二の三十七)と言へる彼の誠命は黙想を守る時に全く遂行せらるべくして近者

を受することの誠命は自から其中に在り福音の誠命に従ひ近者に對する愛を其心に得んと欲するか彼より遠ざかれ其時は彼に對する愛の焔は汝に燃えて彼に對面するときは之を喜ぶこと聖なる天使を見るとき如くならん又汝を受する者等が汝の對面を願ふを汝は欲するかたゞ一定の日に於て彼等と對面せよ經驗は實に衆人の爲に師なり康健なれ我等の神に感謝と光榮は世々に歸すアミン

第二十四 説教

同胞にして同教なる兄弟に遺す書

彼は世に居りてイサクに遇はんと欲し其來らん
 ことを書を以て勧め且懇願したるによる。

福なる者よ我等は汝の思ふ如く有力なるにあらず蓋し予の薄弱と汝の爲に予が亡ぶること容易なることを汝は知らざるならんゆゑに我等の爲にも慮るを要せずして汝の爲にも願ふを要せざることを絶えず我に求むること恰も習慣の故に自然に燃ゆるものゝ如し兄弟よ肉體と肉體の念とを安んずる此一事を我に求め

すして、たゞ我が靈魂の救の爲に慮るべし。猶多時ならずして我等は此世を過ぎ去らん。予が汝に至る時は幾ばくの人に接すべきか己の居所に歸る迄には人々の風俗又は其場所を幾ばく見るべきか人々と面會するとき予の靈魂は思念の爲に意外の事を幾ばく受くべきかを以て惹起されたる人情の爲に多少慰んする所はあり共之か爲に擾亂を幾ばく忍耐すべきか此事は汝も知らずんばあらず世に屬するものを見ることこの修道士に害あることは汝自から之を知る見よ長き間自ら黙想を守りし者が俄に又陥りて慣れざる所のものを見且聞く時は心に如何なる變化を生すべきかそれ苦行に居て敵と奮闘しつゝある者の爲には未だ其地位に近づかざる修道士に面會することさへ害あるならば特に長き間の経験を以て認識を得たる我等は如何なる井中に落ちんとするか思ふべきなり吁我等は我が敵の鋒より救はるゝを得ば幸なり故に必要なくして予に此事を爲さしめんことを予より促すなかれ然のみならず何を見聞するもこれにより我等が爲めに何の害もあらずと主張し野に在ても世に在てもわが思念は一樣なるを得んといふ者は是れ我等を誘惑するなり庵中に在りても其外に在りても我等が謙遜は擾されざるべし之に悪しき變化を生ぜざるべし人と物とに接するも之が爲に怒の騷擾を感ぜざるべしと此の如く主張する者等は是れ疵を受るも之を知らざるなり然れども我等は此の心靈上の健全に未だ達せずして臭穢なる傷を己れに有すもし一日も此事を慮らず巻かすして之を棄て硬膏を貼り繃帯を施さずんば瘡を湧出さん。

第二十五 説教

知識の三の方法の事其作用と其意味の同じからざる事心の信仰の事信仰に隠るゝ奥密なる富の事此世の知識は其方法に於て信仰の正直明白と幾ばく差異ある事。

行爲の徑と信仰の路とを経て頻りに信仰に進歩したる靈魂はもし知識の方法に再び轉するならば信仰は直に跛行し始めん而して相互の助を以て純潔の靈にあらはれ正直明白にして穿鑿討究に渉るものには絶て入らざる精神の力は失はるべしげだし一たび信仰を以て己を神に従はしめしば一經驗を以て神の助を試

みたる靈魂は最早自己のことに掛念せずして却て驚愕と沈黙の爲に縛らるゆゑに知識の方法に再び立戻りて之を行爲に使用する能はざるべし然らずんば倦まずして尙に靈魂を監視し之を慮りて悉くの方法により不斷之を追尋する神の照管は知識の方法の反對により奪はれん即靈魂は知識の力により自から充分に己を慮るを得べしと妄想して無智になれるにより奪はれんけだし信仰の光が照らし始むる者は更に祈禱に於て神に願ひ此を我等に與へ給へ或は此を我等より取り給へといふ如くなる無耻には最早至らざるべくして彼等は自己のことは少しも慮らざるべし何となれば眞實なる父の彼等を庇蔭する父たる照管を信の靈妙なる眼を以て時々目撃すればなりけだし彼は無量に大なる愛を以ていかなる父の愛にも卓越し我等の願ひ且慮り且想像するよりも更に大なる餘あるの量を以て我等に助くべき力を殊に有するによる。

知識は信仰に反對す信仰はすべて之に屬するものに於て知識の法の破壊にして、且非靈的なる知識の破壊なり知識の制限は搜索と考究となくんば何事をも爲すの權を有せずして反つて彼は思ふ所のものと欲する所のもの、能ふべきや否を搜索するにありされと信仰は如何なるか彼は不正にして近づく者には止まるを肯せざるなり。

知識は討求を待たず行爲の方法を待たずんば認識する能はざるべしこれ眞理に躊躇する徴候なり之に反して信仰は工夫を凝らし方法を搜索するものにはすべて遠ざかる思想の有様の唯一潔白單純なるを要求するなり視よ彼等は如何に相反するか信仰の家は幼児の如くなる概念と單純なる心なりけだし言ふあり心の正直を以て神を讚美せりと又言ふあり爾等もし轉じて幼児の如くならずば天國に入るを得ずマトフイ十八の三三されど知識は心と其概念の正直明白の爲に綱を立て之と反對す。

知識は天然を其悉くの徑路に保護する天然の法則なり之に反して信仰は天然より高く進行す知識は天然の爲に破壊的なるものを自から容るゝを敢て試みずして此より遠ざかる然れども信仰は容易く之を許容す言へらく爾輩と毒蛇とを踐み獅と大蛇とを踏まん聖詠九十の十三知識は畏懼を伴ひ信仰は希望を伴ふ人は知識の方法に遊かるゝ程畏懼の爲に縛られて之より免るゝ自由を享る能はざるべし之に反して信仰に従ふ者は直に自由自主なる者となりて神の子の如くあらゆるものを權を以て自由に利用す此信仰を愛する者はすべて造を受けたるもの

を天然に指麾すること神の如くならん何となれば信仰には神の如く新なる造物を造成し得べき力を與へられたること録していふ如くなるによる言ふあり欲するあるや萬物は汝の前に現はれんイオフ二十三の十三彼はすべてのものを存在せざるより生ぜしむること度々なり之に反して知識は物質なくんば一物も生ぜしむる能はず知識には天然を以て與へられざるものを生ぜしむる程の自負あらず然り如何して彼は之を生ぜしむべきか水の流るゝ性は其潮に顯然たる足跡をうけざるべく火に近づく者は己を焚かんもし之を取てする者あらば禍之に従はん

知識は警戒して己を之より保護し此界限を踰ゆることを如何しても肯せざるなりしかるに信仰は自由の權を以てすべてに超越す言へらく汝火の中を過るとき焚かるゝことなく河も汝を溺らさずイサイヤ四十三の二信仰は凡ての受造物の前に此事を行ひしこと屢なり之に反して知識は己を此事に試むべき場合の此處にあらはるゝありとも彼は之に對して決行せざることを疑なしけだし多くの者は信仰により火焰に入り火の焚き盡す力を止め無害にして其中を経過し海の急湍を陸の如く進行したりきこれ皆天然より高く知識の方法とは反對にて知識は其

の悉くの方法と法とに於て空しきを示せり知識は如何に天然の界限を守るを見るか信仰は如何に天然より高く踰えて彼處に其進行の路を啓くを見るか知識の此方法は 大略五千年の間世界を統御したりしも人は幾何も其首を地より擧げて造物主の力を認識するあたはず以て我等の信仰が照らし始めて我等を暗より脱し才智の無益なる高超に任ずる浮世の行爲と之に従ふ空しき從屬とを免れしむるに至れり然るに今や我等は動搖せざるの海と乏きを告げざる寶とを發見したるも更に又涓々たる泉に離れ去らんを願望すたとひ大に富むといへども乏きを告げざる知識はあらじ之に反して信仰の寶は天も地も容れざるなり信の希望を以て以を固めらるゝ者は何物も決して失はざるべくして有せざるものあるときは人は信仰を以てすべてを包有せん録して言ふ如し「祈禱の時信じて求むる所は悉く之を得ん」マトフイ二十一の二十二又言ふ主は近し何事をも慮るなかれ「フィソビ四の六」

知識は之を求むる者を保護する爲に常に方法を尋ぬ之に反して信仰は言ふもし主は家を造らずば造る者徒に勞すもし主は城を守らずば守る者徒に整頓すと聖詠百二十六の二信仰を以て祈禱する者は自護の方法を決して利用せず之が助け

を求めざるなりけだし知識は何の處にも畏懼を讚美すること睿智者の言ひし如し曰く主を畏るゝ者の靈魂は福なりシラフ三十四の十五されど信仰は如何なるか録して言ふあり懼れて溺れんとす(マトフイ十四の三十)而して又言ふあり爾等は奴たる者の復び懼を懐く神をうけたるに非ずして子たる神即神を信するに望むとの自由によるものを受けたり(ロマ八の十五)又言ふあり彼等を懼るゝなかれ彼等の面を避るなかれと畏懼には常に疑念を伴ひ然して疑念は審問を伴ひ審問は用ふべき方法を伴ひ用ふべき方法は知識を伴ふゆゑに其考究と審問に於て畏懼と疑念は常に認得らるゝなり何となれば知識は如何なる時にもすべてに於て成功するにあらざることは是より先我等が證せし如くなればなりけだし知識と智慧の方法が茲に幾ばくも助くることこの全く能はざる困難なる事情の相集まりて衝突する多しの危険を充ち満てる機會の靈魂に遭遇することは屢々之あればなりしかれども他の一方には人間の知識の全力を極むるも拒ぐことこの能はざる困難に於て信仰は此等の困難の一にも毫も打負されざるなりけだし人間の知識は見えざる造物と有形なる力と同一亦他の多くの者とも顯然たる戦を爲すが爲に幾ばく助くるに足るゝや否や知識の力の弱きと信仰の力の強きとを見るか

知識は其徒の爲にすべて天然に遠ざかる所のものに近づぐことを禁ず然れども信仰の力を此に於て察すべし信仰は之を學ぶ者の前に何を提出するか録して言へり我が名によりて魔鬼を逐出し蛇を捉へ毒を飲むとも彼等を書せざらんといへり(マルコ十六の十七)知識は其法に依り凡て其途を進行する者にすべての事に於て其を始むる以前に其終を審問し然る後始めんことを提出すこれ其事の終りが人力を盡したる限りに於て困難と遭遇することのあらはるゝや之が爲に徒に勞するを免れん爲なり事の困難にして成就する能はざるものとならざらん爲なりされど信仰は如何に言ふか信する者には能くせざることなしといふ(マルコ九の二十三)何となれば神の爲に能はざる所なければなり呼言ふ可らざる何等の富なるか信仰の波と信仰の力を以て大に注がるゝ奇異なる寶とに富む如何なる海なるか信仰と共にする進行は如何なる善心と如何なる満足と慰安とに充ち満たさるゝか其軌は如何に易くして其活動は幾何甘きか

問 信仰の甘きを嘗むるを已に賜はりて更に誠實なる知識に轉する者は其行爲を何人に比すべきか

答 貴重なる眞珠を得て之を銀製の小蟲に易へたる者に比せん又自主自由を棄

て、畏懼と奴隷の狀態にみたまさるゝ極貧の身分に歸る者に比せん。知識は非難せらる可きに非ず然れども信仰は知識より上なりもし非難せらるゝも知識其ものは非難せらるべきにあらざらんことをさりながら知識が天然に悖りて進行する種々の方法を如何に辨別すべきか如何して知識は魔鬼の列に近づくか此事は後に至りて明に辨せん此等の方法により知識の昇るべき階級は幾許あるか各階級に如何なる差異あるか知識は其各方法と共に如何なる概念を持つるときは之を以て覺醒せらるゝか此等の方法の中何れの方法に従ふ時は信仰と反對して天然より脱するか而して之に如何なる差異あるか其原始の目的に返り其天然に達して善なる生涯に於て信仰と一なる階段に立つときは如何なる階級にあるか而して同一の級に於て差異は時として何處まで廣まるか而して此級より更に高き級に如何して移るか此の級或は原始の級の方法は如何なるか而して知識が信仰に結合して之と一になり火の如くなる概念を衣被して神にて燃え無欲の翼を求め得て地に屬するものに勤むるより他の方法を用ひて造成者の國に昇るは何の時なるかさりながら其時に至る迄は信仰と其上昇と其活動とは知識より上なるを知るを以て我等に充分なり。

眞の知識は信仰を以て成全せられて上方に昇り何等の感觸よりも上なるものに接觸し人間の知覺と知識とを以て捉へ得べからざる彼の光線を見るの力を受けん知識は階段なり之により人は信仰の高きに登るべくして既に之に達するときは最早復た之を利用せざるべしけだし現時は言ふべし我等知ること全からず預言すること全からず全き者の來るとき全からざる者は息まんと(コリント前十三の九)今や信仰は最早完全の現實を我等の目前にあらはすものゝ如しゆゑに彼の人智の及ばざるものは我等が信仰を以て學ぶべくして知識の審問と其力を以てせざるなり。

視よ眞實の行爲は左の如し禁食なり矜恤なり成聖なり及び其外凡て身體の助により行はるゝものなり近者に對する愛なり心の謙遜なり過を赦すなり善行の爲の慮なり聖書に隠るゝ眞正なる奧義の研究なり最完全なる行爲と心中の慾の節度を守るを以て智力を煉るなり是れ皆知識に必要を有す何となれば知識は之を保護して此事に於るの秩序を教ふればなり然るに是れ皆階段のみにして之により靈魂は信仰の天の高きに登らん之を名づけて道徳とはいふなりしかれども信仰の生活は道徳より一層高くして其働は動作にあるに非ず完全なる平安と慰

藉と心中に於るの談話にして、此働は靈魂の概念に於て行はるゝなり。且此働は靈的生涯の全く奇異なる方法にして、靈的生命を感ずるなり。悦樂なり。靈魂の安息なり。願望なり。神の爲に喜ぶなり。及び其外凡て彼處の福樂の恩寵をうくるに當るべき靈魂に此生涯に於て與へらるゝものと、神聖なる書中信仰の指示す如く其賜に當める神を以て此處に行はるゝ所のものなり。

疑。誰か言はん此の悉くの幸福と是より先に致へたる道徳の行爲と、惡に遠ざかる。心中に起る幾微の念頭を辨別すると、思念と闘ふと、刺激する慾念に抵抗すると、すべて其外之なくんば信仰其ものが靈的活動に於て其力をあらはすことの能はざるものとは是れ皆知識を以て成就せらるゝならば、何故知識は信仰に反對なるものとしてあらはるゝか。

解。答ふ思想の方法は三あり之によりて知識は或は上るべく或は下るべし。而して知識のみちびかるゝ方法にも、知識其ものにも、變化のあるありて、之により知識は或は害すべく或は助くべし。三の方法とは何ぞ體と靈と神となり。知識は其性質に於ては一なれども、思想に屬するものと、感覺に屬するものゝ此範圍に關しては精微になりて、其方法と其明悟の働とを變するなり。終りに此の働の順序の如何

なる。其原因の如何なるかに注意せよ。之によりて知識は或は害すべく或は助くべし。知識は靈智ある造物の性に最初之を造るときに與へられたる神の賜なれば、天性單純にして分れざるものなることはたとへば太陽の光の如し。然れども其働に準じて變化と分割とを受くるなり。

第二十六 説教

知識の第一階級

知識は肉體の望に従ふ時は左の方法を引誘して之と一にならん。富なり。虛榮なり。修飾なり。身の安佚なり。此世に處するに便利にして、發明と藝術と學問とに新規を出す言の智慧を勉むると、其他すべて此の有形世界に於て身を飾る所のもの是なり。此等の特別なる方法に依れば、我等が既に言ひ且定めたる如く、知識は信仰に反對するものとならん。彼は裸體なる知識と名づけらるべし。何となればすべて神聖なる慮を排除し、肉體の優勝の故に無智陋劣を心中に入れて、すべて慮る所のものは全くたゞ此世の爲なればなり。視よ、此知識の自己に對する意見は左の如し。言へ

らく知識は奥密に人を統治する思想の力にして、人々を監視し全く人の爲に慮る神聖の後見たることは何の疑の之あらんとゆゑに彼は世界の統治を神の照管に歸せずして、すべて人に於る善なるものと、人の爲に有害なるものより人を救ふと陰にも陽にも我等の性に随伴する困難なるもの及び多くの反對なるものより人を警戒する天然の預防とを以て人自己の勉勵と自己の方法の結果なる如く思ふなり。知識を弄ぶ者の自己に對する意見はかくの如し彼は其經畫の如く萬事成るべしと妄想す此點に於ては彼は此の有形世界を治むるの掌理無しと主張する者等と一に歸すさりながら彼は身體の爲に不斷慮るなく、懼るゝなくして居るあたはず故に小膽悲哀絶望魔鬼の爲の恐れ、人々の爲の恐れ、賊の風説死の傳聞疾病に於る掛念、必要なるものに缺乏するの心配、死の恐れ、災難及び惡獸の恐れ及び其外すべて此に類するものと、時々刻々晝も夜も動亂して航海者に波を傾注する海に似たるものとは彼を主宰するなり、何となれば此知識は神を信する働により自己に對する慮を神に負はしむる能はざるによる、ゆゑにすべて彼れ自己に關係するものに於ては其方法を考へ工夫を凝すが爲に占領せらるゝなり、されば其發明の方法が一の或る場合に於て不成就となり了れども、奥密なる照管をも類はざる

により、其時彼は之を妨げて之に反對する人々と争はん。

愛を剛絶する善惡認識の樹は此知識に植附らるゝなり、ゆゑに彼は他の人々の小なる錯誤と其過失と其弱點とを摸し、人の師となると言を以て逆ふと狡猾なる發明と詭計とを用ふるを人に勸め、人の爲に凌辱的なる他の方法にも助を假らんとす。彼には高慢と驕傲とあり、何となればすべて善なる行爲を自己に奪ふて神に歸せざればなり。しかれども信仰は其行爲を以て恩寵に歸す、ゆゑに自負することあたはず、録して言ふ如し、曰く我を堅むるハリストスに由りて能せざる所なしと(コリント四の十三)又言ふ、我に非ず乃我と偕にする神の恩寵なりと(コリント前五の十)然るに福なる使徒が知識は誇を致す(コリント前八の一)と言ひしは是れ神を信すると神を望むとを以て溶解せられざる如上の知識につきて言ふものにして、眞實の知識を言ふにあらず、願くは之のあらざらんことを。

眞實の知識は之を得たる者の心靈を完全にして、謙遜ならしむること、モイセイがワイドイサイヤヘトル及び其他の諸聖人を完全にしたる如くなるべし、彼等は人性の尺度にしたがひて此の完全なる知識を賜はりぬ、此等諸聖人の知識は常に非常なる直覺と神聖なる默示と靈界の高尙なる直觀と言ひ得ざる奥義との爲に香ま